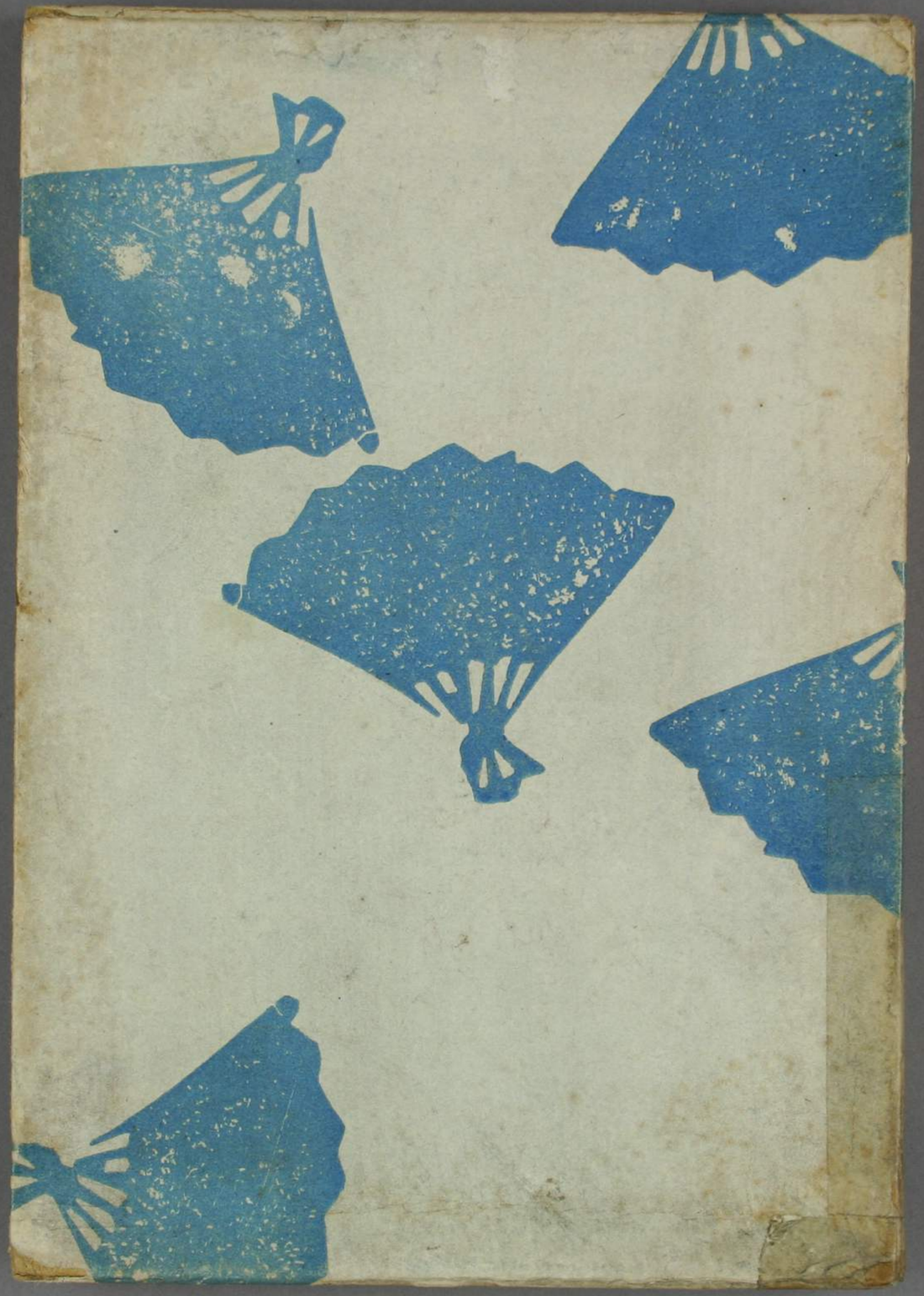
げや美京

著江秋松近

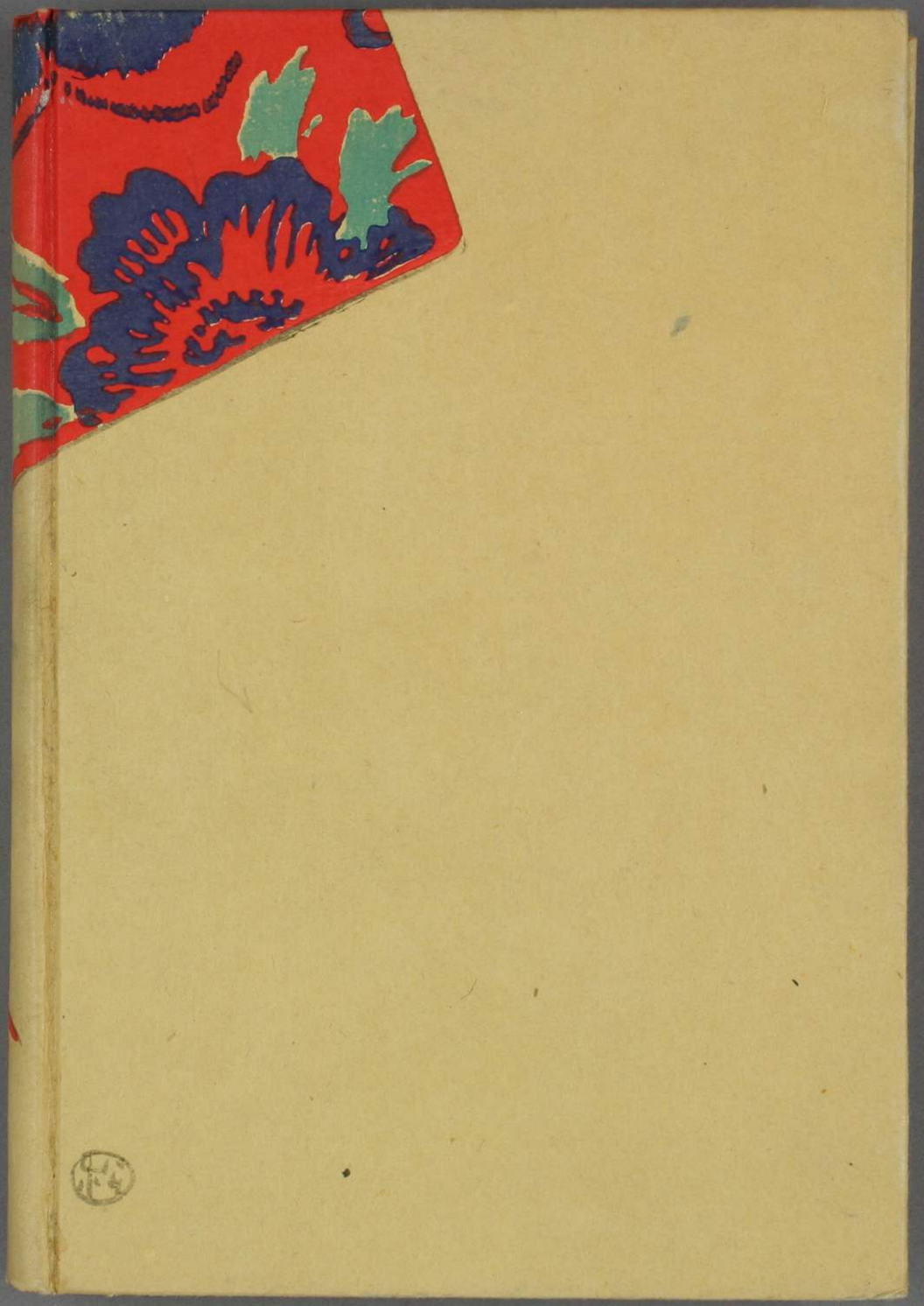
京美やげ

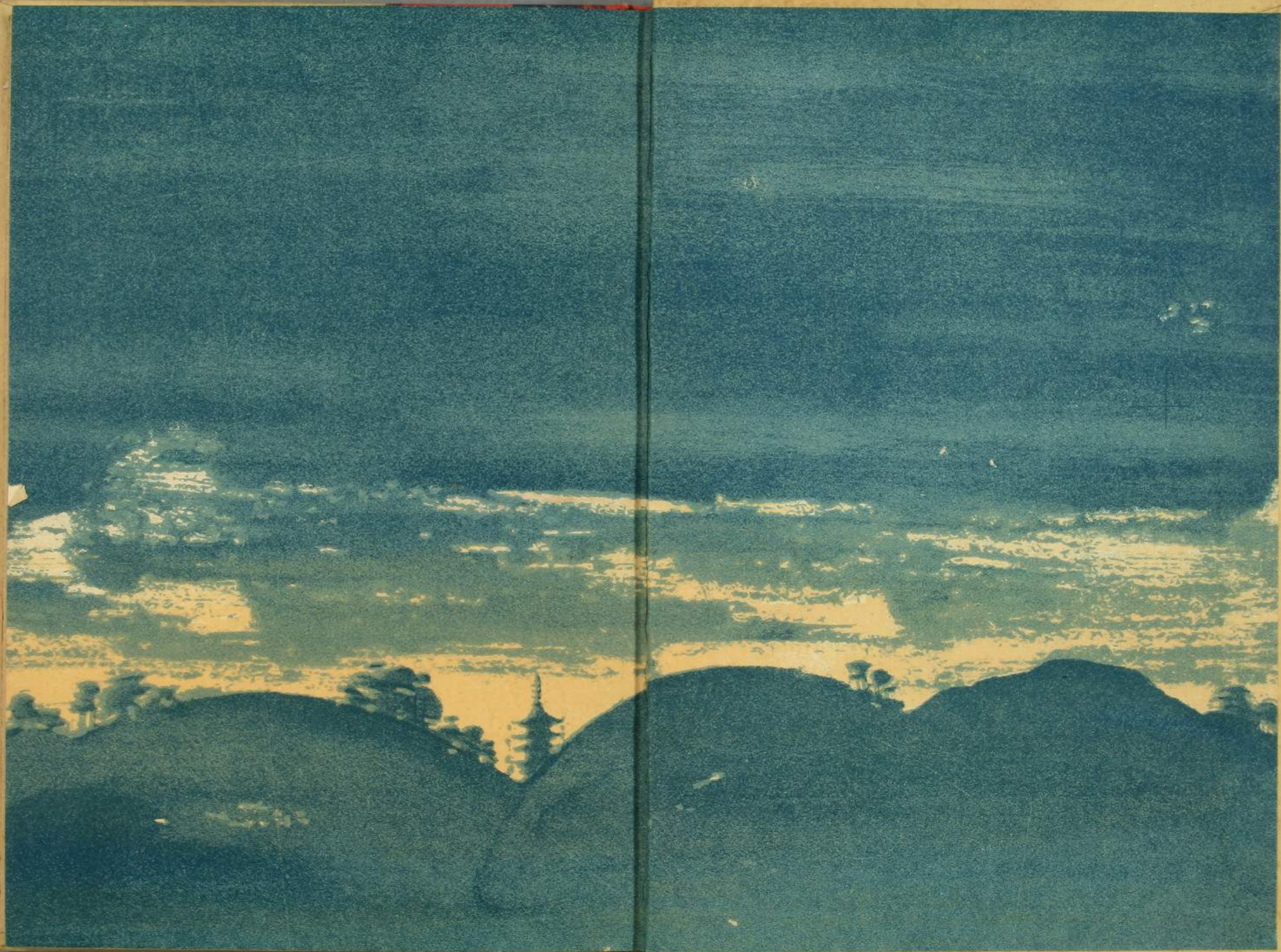
近松秋江著



京美少女

近松秋江著





京美やげ

近松秋江著

東京 日本評論社版

初しぐれ　一
貸し間　二五
白木蓮の葉かけ　六三
死の幕の彼方　七七
老若　一〇九
老若續篇　一三五
小石川の家　一六三
冬の夜　一八九
春興　二四一

（次目）

（目次）

大和路の春　二六一
長命寺の夏の月　二七九
比叡山より琵琶湖へ　二九一
湖光島影　三〇七

初しぐれ

秋冷追々相加はり候處御全家いよ〳〵御健勝賀し上げ候。小生の歸京、度々御勸說下され難有奉深謝候。當夏、叡山三ヶ月の山居も、おひ〳〵迫る秋雨の佗しさに堪へかね、先月十九日に下山。大津よりすれば直ちにその夜の汽車に投じて翌日早朝は早や沼津、江尻の朝の富士の姿に曉の夢を破り、國府津、大磯の浦々に寄する波の光に心は早速東國の氣分に立ちかへり申すべしとは思ひ候も、尙ほ暫らくは京畿の秋の色見のこしがたく、再び逢坂山の此方に立ち歸り申候。永々の宿屋暮しにも飽きはてしことゆゑ、此の度は、幸ひ東山の畔なる高臺寺の裏門の近くに去年の春、當地に罷越し候て以來懇意に相成り候さる金滿家の御隱居有之、その所有なる隣家、爰元東京と同じく貸し家拂底の折柄數多の借家望みてある中に、私かねての懇望に

て、まだ明かぬうちより頼みて借りうけ、そこを暫しの隠れ家と定め申候。顧れば東西にさすらひの月を眺めつゝ宿屋住ひの生活を、ざつと十年がほどにて又々男所帶の獨り暮し。これも他にせん術なさの物好きと、強ひて、ひとり笑ひに消して諦めをり候。東京には十六七年前はじめて所帶といふものを持ちはじめて眞似のやうなことを致せし時分からの鍋釜から茶碗皿鉢のたぐひまで米櫃や飯鉢の中に仕舞ひて餘處の藏に托しあれば、假住まひの京都にて餘計の品も無用とぞんじ、ほんの手で食べぬだけの事にて埒あけんと存ぜしに隣家の隱居のお婆さまことに情ある人にて、私旅の空にて獨り所帶の不自由を思ひやり、東京へ持つてかへれぬ物に入らぬお錢を、なるたけ使はぬやうになされとて、差當り當座の用を缺かぬ品々、私のまだ叡山を下らぬさきよりお年寄の氣の早く、竹細工の茶棚に手まはしよく取り揃へて置き、これだけが貴方にお貸し申すものどすとて貸し與へられ候。御隱居今年七十三になりたまへどいと健康にて若い時後家にて夜も碌々寢すに數十萬の身代を働かれたる果報は、老後の今の安樂。四條通りの目抜に角店を飾りて年中の繁昌。一人息子に多勢の孫、曾孫ありて、これぞ福壽圓滿

の好き例と知れるほどの人の羨みて噂しあへるほどなるに、御隱居はその分限になりても身に榮華の望みさら〳〵なく、今の處に、下女をも置かず、他人を使ふよりは自分をつかふが氣樂なりとて朝夕を自から炊ぎ侍女もなく、たゞひとり隱居せられけるが、自身の物語りせらるゝところによれば初めは神佛の篤信家なりしが、數年この方基督の敎に歸依したまひ、この上の願ひは、たゞ死して後ふたゝび天國に生れることのみ、箸をとる間も忘れず只管祈禱三昧に不足を知らぬ月日を送りて人に施すを樂しみとせられ候。

金滿家の貸し家とはいひながら前の借家人によりて永年住み荒らされて立ちのきしあとの淺茅が宿、御隱居自から、私の歸り來ぬさきより度々掃除して疊まで拭いてたまはりし添けなさ、世間に鬼ばかりぱ無之とぞんじ候。かくて叡山を下りて京に入りし夜は一晩御隱居の許に泊めてもらひ、翌日隣へ移り住み申候。夜具、褥は夏前鄕里なる田舍より、木綿物なれど新しく垢の付かぬを一とそろへ取り寄せおきたるを、留守中隱宅の押入れに預け置きたれば、寢るには當座の事を缺き不申候。そのほか柳行李一つ、瀨戸燒の大なる火鉢一個それだけの家財道具にて

埒明き申候。さりとは尻輕の身上に御座候。

私其等の小荷物を隣りへ持ちはこび候間に御隱居はまた自から、用の序に、自宅にて取り付けの出入りの商人の處へ立ちより、米、炭、醬油などを屆けさすやう誂へてたまはり候。

米はお國からおとりやすのでも今日明日の間には合ひまへんやろとおもうて五升持つて來るやうにいふときました。炭も一俵小いのと、炭團を十五持つて來るやうにいふときました。炭團をよう埋けときやすと、一日火が消えずにおすさかい。この婆さま、私を、まだ生れてはじめて家を持つ未熟者と思し召し孫兒のやうなる御待遇。馴染の少き京にゐるやうな心は致さず候。まだ飯を炊く道具調はざれば、その日は御隱居炊き立ての御飯を一日では食べ殘るほど分けて下され、これだけあれば今日だけはおすやろ、冷飯でよろしかつたら、まだ何ぼでもおすせ。それに山科茄子の漬けものを入れて糠味噌までとり分け、錦小路の親類の砂糖屋より砂糖の小桶を、それも婆さま自分で取つて來て、漬物をけまで拵らへて下され候。何處も家賃高騰の折柄なれど、當家ぬしはこれまでの拾貳圓を貳圓上げて拾四圓にしたのみにて他並にしては殊の

ほか格安といふいひ譯にて疊は十何年か踏み汚して黑ずみ、ところ〴〵破れ目に紙を貼り付け、緣布の紺の糸目の切れるほどに白く褪めたれども疊は取り換へてくれ不申候。私が八九年前牛込の矢來にて世帶を持ち居り候頃自分持ちにてとりかへたる時分には、並の品表と手間を六拾錢づゝにて壹圓貳拾錢にひ調ひ候が今日では一枚參圓は決して上等の品にては無之、いつ東京に歸へるとも知れぬ假の住居に無用のついえとぞんじ、だれの踏み付けたか知れぬ古疊のうへに起臥飲食いたしをり候。慣れゝば何事も辛抱出來申候。自分の住家と定まれば澁茶色の疊も敢果なき夢を結ぶたよりと相成り申候。

永年の宿屋くらし。米の高いといふことは、たゞ世上の噂に聞くばかりにて眞實に米の値を知らずに八九年過し候が、なるほど十七八年前には二人口にて月に四五圓は上等米の方なりしが只今は一升につき五拾六錢。私一人にて一日三四合、一ヶ月に五圓六拾錢の勘定に相成り候。尤も米は鄕里の田舍より取り寄せ候へば、米代は入り不申。京都の米屋より取つた米もなかなかの上等米にて炊いたあとの水の退きもよく味も好味なりしが、備前米はまた格別、田舍の事

ゆゑ都會の米屋の手を經ざれば、籾殼まじりて洗ふに手數を要し候へども、炊いてからの好味は申すに及ばず、米粒槍のごとく立ちて、色は象牙の如く透きとほり居り候。たとひ米價壹圓に五合の時來り候とも我等一人口にては斯の如き上々白の內地米に尙ほこの先きの露命だけは繋ぎ申さるべく此の儀のみは安心いたし居り候。食慾の進む好季になりて東京の食べ物一入なつかしく思ひ起され候。東京にゐれば一日三度の食事の中一度は必ず壽司を缺かしたことなき私なれどもそればかりは、せんすべ無之候。爰元は御承知の切りずしとて東京の付けたての握りを食べる意氣は無之候へども鯖のすしは風味なか〳〵上々にて、まんざら棄てたものに無之候。當地は昔より北陸筋殊に若狹より輸入する魚介多く、鯛、甘鯛、鯖など若狹のもの多く有之候。初秋の香高かりし栗、松茸が追々八百屋の店に目馴れ、北山時雨はら〳〵と夕暮れを急ぐ窓の障子をおとづれ候頃になれば、若狹鯖の肉味いよ〳〵加はり、壽司屋はいづれも彼方より來る一と鹽のものを一寸鹽出しゝて、それを用ゐ申候。それにて丁度い、加減の味に相成り申候。せめて、その鯖のすしにて東京の壽しの渴を醫し申候。鱧は上方の人間の好物、丁度

東京の鮪のごとく年中有之候へども私はそんなに好み不申候。先日中久し振りに自炊をはじめて、自分で食味の調理をする面白さに東京にはめづらしい鱧の皮を飽きるほど食べ申候。もはや食べてみたいとも思ひ不申候。東京とちがひ流石に田舍なりと思はしめ申候は、東京ならば如何なる場末の果てにても日々御用きゝの水口に聲をかけぬ日とては無きに、爰元諸商人の商賣に不勉强なること、呆れ申候。東京ならば、天秤棒の撓なふほど桶を積みかさねた魚屋が、お勝手口から、今日は！　と威勢よき聲を掛けるなど、さも磯臭い魚類の生を示めしてゐるやうに存ぜられ候に、當處にては長方形の箱に入れたる魚を魚屋が肩に擔いで一日置きに廻り申候。鰯、鱧、鰆は大抵缺かさず持つてをり申候。先日はめづらしく鮪の切り身をもつて居り候ひしゆゑ、これは珍味、なんでも食べざるべからずとぞんじ、一と切貳拾五錢にて、ついでに刺身にいたさせ申候。そのほか鯵の煮びたしも東京の惣菜を風味せしめるもの、一つ、ぜひ所望いたし候ところ、魚屋その後度々鯵を持つてまゐり候ゆゑ、あまり大きな品は一人暮しには無用の費えにてもあり、第一食べ飽き候ゆゑ一尾三拾錢どころの品を片身は刺身におろさせ、骨

附きの方を打つ切りにして名古屋大根と煮あはせ申候。大根の大きなるは一つ拾錢から拾五錢以上もいたし候。そんなのは一人ぐらしには持てあまし候ゆゑ精々小さく一個五錢から七八錢のところを選んで近所の八百屋より取つてまゐり申候。何がさて浮世の見えを厭はぬ市隱の身なれば構はぬことゝは申しながら眞晝間八百屋より大根下げて來ることの、あまりに貧乏臭く候ゆゑ、大抵夜分に買ひにまゐり申候。東京に比べて、御用聞きの來ること少なく、不便此の上なきことに御座候。五錢の大根にても一人にてはなか〳〵に食べあまし申候。半分を二度に煮て、殘りは漬けて食べ申候。尙そのほかにも葉のところをも無用にはいたさず、これも漬け物に用ゐ候へば、私一人にて二三日の漬物の食ひ料にはあり剩り申候。ロシヤ、ドイツなどには食料缺乏して餓莩途に横はり、盜賊四方に跳梁す。我れ等何の幸か、此の國土に生を享け、物價騰貴の聲高しといへども一個五錢の名古屋大根にてさばかりの副食物を工夫いたし候て、泰かに日々の露命を繋ぎ候事を思へば、瞑利といふこと勿體なく、大根の切れつ端にてもゆめゆめ仇おろそかにはいたされずとぞんじ、始末といふことを何より先に考へて日夜を送り申候。

この分にて世を渡り候へば、物價はなにほど騰貴いたし候とも、私一人の生計を脅かし候氣づかひ當分の間は無之候。世間兎角物價騰貴に苦む聲の聞え申候は、いづれも人の物慾の深きゆゑよりと笑止の至りにぞんじ申候。人間一人口過すに何ほどの事か候はん。然るに巷に生活困難の聲の絶えざるは、これ皆人間の物慾の深き故なり。物慾とは何ぞ、妻子眷屬を以つてその第一とす。吾等夙に一人過ぎを以つて覺悟し、妻子眷屬を飼ふの榮耀を思ひ絶ち候以上は如何なる物價騰貴の脅迫押寄せまゐり候とても驚くことにはあらず候。

さうは申すものゝ、私も長い間東京を不在にいたし東京なつかしくぞんじ、當冬は必ず一度は歸京いたし、そのまゝに致し居り候書籍調度の類、さぞ埃塵まみれになりて主人の歸るを待ちわび候ことゝぞんじ候へば、其等の始末をもいたしたくぞんじ居り候。御地はいかゞ、當地は連日の美晴にて、氣象穩和、温暖春の如く、世界の果までも旅して見たき心地いたし申候。それを思へば毎日風塵劇しき東京の地は厭はしく相成り候。松茸の季節はやゝ過ぎたれども、四圍の山野遠々時雨の色を增さんとす。私の二階よりは北窓の机に凭りて東山と愛宕とを一時

に眺められ申候。窓によりて少し背伸をすれば北山の靉靆もまた双眸に入り候。二階は前陳の如く座敷煤けて、頗る汚れたれども、八疊六疊の二間にて、八疊の間には一間に三尺の床、一間に三尺の入り床には違ひ棚袋棚の設け型のごとくありて、南向きの六疊の室には清水の山の端を出でたる太陽建仁寺の樹林の彼方なる西山に沒するまで終日麗かに輝き渡りて室を暖め申候。此の分ならば冬季も存外温暖なるべく、今より冬ごもりを樂しみ居り候。音羽山、清水の二重塔。殊に八阪の塔は秋晴の空に畫圖のごとく浮きいで居り候。朝夕獨座の眺め飽かず、少しも外出の念無之、人を訪ふことを欲せず、また人の訪ひ來ることをも欲せず、外界と絶ちて日を送り候へば、身は都會に在るも、恰も山野に隱れたるに異らず候。さばかり人を遁れ候へども、人間の聲は終日耳に絶たず、何處までもついて來り申候。爰元祇園、圓山の名所に近く候へども、横丁の通りに面したる表通りなる露地の入り口には兩側の二階長屋に各三組づゝの世帶を致して居り候。借家主は一人は金網細工を渡世にして、朝から晩まで一日針金を叩いて階下の二間といふも名ばかりの處に商賣用の針金を女房の鏡臺と一つ處に取り散らかし、渡り

かねたる針金を地道にたゝいて細き世渡りいたし居り候。その二階には一日亭主の顔を見たることなければ、私の起きぬ間に出てゆくかと存ぜられ候。二人の年若き女房一間づゝ別々に住るて居れるが、私の三坪ばかりの庭に茂りて立てる木蓮の葉越しに見え申候。露路の入口の右側には米屋が住居いたし居り候が、聞けば主人は夏の頃より長々の痔疾の由にて最早半歳近くも商賣を休み、その二階にも二た組の夫婦共一間づゝに住居せる樣子なれども、これまた、私には亭主の顔を見たること無之、いづれも日々出稼ぎの世を渡り候ことゝ存ぜられ候。露路の内は二階建四軒の棟割り長屋にて、私の住家はその入つた突き當りの西の隅、その右隣りの突當りが家主の御隱居の住居、御隱居は奢侈の勿體ないことを常から口に絶やさぬほどの始末よき方にて、それほどの身分にてありながら、本宅より附けようと云はれる下婢をも使はず、しかし一人にては、これまで度々一人住居をしてゐて盜難にあひ、衣類着物をすつかり持つてゆかれたことのあるのに懲りて二階に同居人を置き、自分は階下に住まはれ候。その二階の同居者はさる町醫者のお圍ひ女にて、私の部屋とは、ほんの薄き壁を一重隔てたるばかりの隣合

せに御座候。蓼食ふ蟲も好きゞとやら、女にすたりは無いもの、さる處の鳥屋の仲居なりしを旦那の世話になりて、米の値を知らずに住む氣樂な境涯。家主の御隱居は、もう十數年の昔に後家になりたまひて、朝夕神に祈禱を捧げることを仕事として居られるやうな世捨て人なるに、その二階には左樣な婦人住ひて、壁一重彼方に日夜艶めかしき笑聲絶えず候。私も女を見ることを好み申さぬにはあらざれども、その女はあまり人目を惹くほどの女にてはこれなく候。加之性行野卑にして、ともゝ安物らしい妾の相場を發揮いたし候には家主の御隱居も常に蔭ながら顔を顰めをられ候。つい此の間の晩も旦那は一週間ばかりの他行にて顔を見せぬ留守の間に、折柄御隱居も一日不在、女は近邊に住む二三の朋輩を誘ひ來りて三味線を彈くやら、立つて踊るやら、叡山までも響くやうな聲を立てゝ二階座敷の搖れるまで大騒ぎして狂ひ興じてゐる有樣、苦々しく存じ候。前述の如く露路の中にはあまり結構なる身分の人間も住んで居らぬらしく候へども、いづれも堅氣に世智辛き世を渡り候中に自分は何にも爲ることがないと見えその女は朝つぱらから三味線を彈いて一日遊び暮らし居り候。それも段物の稽古にてもすること

か、まるで寄席か酒の座にても聽くやうな流行うた。朝からそんな三味線を彈いての空さわぎ、待合や貸座敷の二階にてもない事なり。世間に咎める者が無いから、どんな事をするも勝手自由とはいひながら、己れの品性の野卑なることを曝露して省みざるは寧ろ憫笑に値いたし候。妾といふ中にもそんな女ばかりはないもの、然るにさういふ女を何處がいゝのか、好いて圍ひ者にしておく旦那の醫者の、女といふものに對する趣味も低劣と申さざるべからず候。まだ〳〵そのほかに面白きは、その妾いつも月末にはハイカラ頭髪に盛裝して患家へ藥禮の受取り催促に出掛け申候。廣い東京にも近頃さういふのが出來申候や。私、東京にゐる間は、二十五年住み候へども、一度も聞かぬことに御座候。兎角金錢には外見も體裁も繕はぬが京阪の風習とて、見え透いた僞善を行ふよりは此の方がむしろ宜敷かは存ぜず候へども、妾といふからにはもつと風情あるをこそ好ましくぞんじ候。

御隱居は基督教を信仰せらるゝゆゑにや、如何なる人に對しても上下貧富の區別を付けずして一視同仁に交はらるゝは結構のことに候へども、陰にて屢々顔を顰めらるゝほどならば、左

様な人柄の好からぬ婦人に二階など貸したまはざるがよろしからんと存じ候。旦那の醫者も醫者、出入りの際隣家の事なれば時々人體見受け申候が、先日も、まるで女の着るやうな好みの小豆色のお召の格子縞などべろ〳〵と着て居り候。京都大阪の男のにやけた好みとなつたら、實に鼻持ちならず候。當節は昔と異り、醫者なども背廣の洋服でも來て事務家らしく活潑なるが厭味がなくてよろしく候。それほど臭い風俗をしてゐるほどの旦那なればにや、圍ひ者を置くほどならば、一軒借りをすれば氣散じにてよいと思ふに、二階がりをして下女をつかひ、二階にて炊事などをいたさせ居り候。まことに世間はどんなにしても暮らされるものとぞんじ候。その長屋の一軒置いた先の一番隅には、友禪染の下繪を商賣にしてゐる者住ひ居り候。内證は夫婦に十二三歳ばかりの女の兒一人なれども弟子職人十人の餘もゐるらしく。毎朝共用の水道口に繪の具皿を洗ふ子供やら顔を洗ふ年長の弟子共にて立て込み汚きことに御座候。女房は宮津あたりの者とかにて、露路の内の噂にては娼妓上りと申すことなれども、さうでもあるまじきか、併し子供は貰ひ子にて、三十五六の鼻の低い女なれども、頭髪はいつ見ても丸髷を崩し

たことなく、隨分やつし居り候物腰、娼妓でない分が田舍茶屋の仲居の果てくらゐと存じ候。その女が壁隣りの醫者の妾と八々の對手にてお妾は旦那の泊つてゆかぬ夜は下繪屋にて翌日の二時頃まで兩人差しにて遊び耽り候ことめづらしからず、拾圓から貳拾圓くらゐの出入にて取つたり取られたりしてゐる樣子。それも御隱居左樣な賭け事は大嫌ひの由にて、苦み切つての話しに御座候。亭主の下繪屋小柄にて、あまり風采よき男にては無之に一とかどの繪師氣取りにて、これまたにやけたる端役役者の着るやうな紺セルのとんびなどを着て出入りするを見申候。淨瑠璃の稽古をすると思はれて、時々午過に大きな聲にて語るのが露路の中に響き申候。いやはやいづれを見ても蟲の好かぬ京阪臭き人間ばかりに御座候。

左樣の次第ゆゑ。其等の連中も、私の事を、定めし何とか噂いたし居り候事と存じ候へども此方は一向構ひなし。自から水を汲み、炭火をついでの獨り居、東京は知人多くして心も散り申候へども、爰元却つて氣樂に存じ候。机の窓より東山を眺め申候に、この程よりの時雨に四方の木々も少しづゝ色づきそめ申候。これより暫らくは古都の風物一年の中にて最も好ましき

折柄に御座候へば尚ほ當分爰元滯在の上年末に相成り候へば、相州の海濱あたりに冬籠りの避寒いたしたく、その準備をするまでに年内には久しぶりにて歸京の存念に有之候。先づは京都住居の近況御洩らし申上げ候　草々。

十月二十七日

京都

朝霜より

東京

松露様

×

拜啓、曼珠沙華の油繪及び雜誌の裝幀圖案二品ともたしかに受領したし候間御承知下され度候。曼珠沙華は吾々の生國邊にても通稱死人花と申し、あまり心持ちの宜敷き花にては無之候へども、この花を見る時は種々幼き折の懷しき聯想自然に浮び出で申候ゆゑ、吾等かうして

多年生國を離れ他鄕に流寓してゐる者にとりては幼き記憶に深き印象をのこしたる故鄕の山河の形態、種々の自然の色彩、年とゝもにその色その形薄れずして却つて段々濃くなりゆくやうに被存申候。英國の湖畔詩人ウォヅウォスが幼時を追憶して靈魂の不滅を想ふといふ詩歌の心は、その詩を初めて讀みたる時の咄嗟の間には俄かに味解出來ざる事なれども、十年を經る間に時々想ひ浮べ、清純なる心の奥にひとり靜かに省みてはじめてその詩歌の深意自から味解出來申候やうに存じ候。

今にして思へば幼少の時は、恰もこの曼珠沙華の咲き溢れたる初秋の野邊に照り輝く日の光のごとく麗かにして且つ清純なりしと申すべきか。盛夏の炎威次第に衰へて、大空の色いつしか鏡のごとく明かになり、爽かなる初秋の風が野をわたる頃になり、鎭守の宮の馬場、西北の山裾なる水車小舍に通ふ土手、田圃の中の小渠（こみぞ）の緣などに眼の醒めるやうな眞紅の曼珠沙華は眞直ぐき細莖を擢きて咲き出で、うら盆すぎて月暦八朔の頃より一と仕切り盛に群れ飛ぶ赤蜻蛉は冴やかなる初秋の日を浴びて、その花の上を群れ飛んでゐる村里の野末の光景そゞろに思

ひ起され申候、其等の光景の間に生きたりし吾が幼時の心は今に至つても尚ほ忘れず、明らかに懐かしき追憶となりて殘り居り候。

小生先般、三ヶ月の山居に飽き、叡山を下りて歸洛せんとする際江州阪本日吉の馬場にて此の花の咲けるを認め、ふと如上の遠き往時を憶ひ出で申候。この花は年中大都會の中に在りて暮らす者には遂に見る機會もなくて過ぎ申候。吾等先日阪本にて見たるは何年ぶりなりしか記憶いたさず、多分前申せしとほり今から三十餘年前、吾等が幼時に故郷の野邊にて見し、それ以來と存じ候。それゆゑにかゝる、多くの人の殆ど見向きもせざる野花にても吾等の印象を新鮮にしたるものならんと存じ候。曼珠沙華の生花を室内にて眺めることはいかゞかなれども、かく油繪にして壁間に掲げ、この生花によりて吾が往時を追憶するは吾等が生活の單調枯淡を少しにても潤ひあらしむる手段とぞんじ、足下に囑して描いてもらひし所以に有之候。何人に見せんとするにもあらず、たゞ、私の記憶に感興を生ぜしむれば足り申候。なか〳〵巧に出來居り滿足に存じ候。雜誌の表裝波頭の具合も面白く出來上り、全體の色彩の程度もよろしく是

れまた滿足に存じ候。

私事先月十三日より輕微なる風邪にて引籠り居り候。昨年は丁度今時分そちらに歸郷の折柄やつぱり流行の世界風に罹りて五六日間臥褥いたし候が、秋風心を傷めやすし。今年はそのやうなことなきやう隨分用心いたし居りしに、十月半ば小春日の暖かさについ薄着をしながら假寢をした間に引きしものと思はれ兎角心地すぐれず候。三四日の間斷食して臥せつてゐれば快く相成り候とぞんじ候へども風邪は膳の下に入ると申候とほり、少しの熱はありながら食慾に變りは無之候まゝ毎朝起きいでゝ水を汲んだり洗ひものをしたり、とかく水いぢりをするので自然癒ることも遲く私の風呂ずきが最早半月ばかりも風呂に入ることをひかへ居り候。家にゐても話す對手もなき一人ゆゑ退屈しのぎに、それまではよく街へ散歩に出で歩きしも、風邪を引いてからは、ぴたりと外の出あるきも止め家内にばかり引籠り居り候。水を弄るにも可成掌頸より上は觸らぬやうに用心しつゝ、毎日食べる物のこしらへのほかには二階の居室に一日閉ぢこもりて新聞雜誌を友として日を送り居り候。何年かぶりに小家を構へ自炊暮しを始めし當

座は、自分ひとりの食べる支度にも隨分手數を費すやうにぞんぜられ申候へども、慣れては苦にもならず、何程の手數も要し不申、結句安樂なりと存じ居りしに、風邪を引いて、身にいさゝかの不快を覺えてさへ一人者は不自由にぞんじ候。それでも食べる物さへ食べられゝば氣づかひなしと存じ、折柄年中の最も食慾の進む季節とて先日送つてもらひし其地の米を、日によれば三度にても吾等のごとき運動不足の體には過ぎたるに、四度も食べることありて、風邪は引きながらも血色などは至極宜しかりしに、遂々過食の爲に胃を害し、此度は前と反對に食慾皆無、心細き事に有之候。よつて其地にて出來る米は私の胃には餘りに强過ぎるとぞんじ、以來三合に一合は麥を混へ食し居り候。この分にては如何に米價高騰して日本國中が相騒ぎ候とも私一人の口を養ふくらゐは何程の扶持も要せぬ事に御座候。

この頃はお祖母さんは、もはや毎日炬燵の守とぞんじ候。榮坊はよく遊び居り候や。段々成長するにつれて徒戯も募り候かはりに倍々家中賑かなることゝぞんじ候。

風邪を引いて家にばかり閉ぢこもり居り候間にも四圍の風物次第に移り、二階の窓より眺めるる東山の樹々連日色づき申候。われ等隨分長く京都に逗留いたし候へどもまだ八瀬大原を知らず候へば、この秋は必ずその方へ出遊して見たく存じ居り候。さだめし野趣深きことゝぞんじ候、帝國美術院展覽會は當地は十一月二十七日より十二月十一日までの由、辻ビラの廣告かゝり居り候。その頃ならばお前の都合も定めしよろしからん。ぜひ〳〵御入洛待ち居り候。それまでには夜の物も寒くないやうに手廻はしいたし置くべく候。展覽會のほかに京都には普通の商店にて繪畫を鬻ぎをり候處祇園町あたりに少なからず、其等の店頭をのぞいて歩くも興多し、色々面白き繪畫有之候へば、お前にはまた格別の興味を覺え申さるゝならんとぞじん候。駿河屋の餡、室町虎屋の饅頭お送り申候。御受取り下され度候。草々。

十一月十五日　　京　都　東山のほとりより

備　前　池邊達次郎殿

×

拜啓、度々趣味ある御葉書下され難有き事に奉存候。又先日は參州長篠古戰場附近の記念繪葉書三枚たしかに落手、弔古戰場の御作詩不相變御風流の事に存じ申候。小生など平常文學を職業としながら却つてかゝる風懷を寄するの機會に乏しく、日々營業の如き讀書に惱まさるる者の境涯何卒御憫笑下され度候。尊兄の如きは實業家を表看板にして富の開拓に從事されながら、尙ほ且つ、業務の爲めに參河の山奥まで入つて行かれながら道々古戰場を過ぎて古の英雄の靈魂を弔し一片の感懷を山河に寄するの風雅あり、尊兄に在りては實業もまた從つて精彩を放ち來る所以なりと存じ候。

當地は當月中旬頃が最も秋色闌ならんと存じ候可相成その頃までに御入洛待入り候。奈良、法隆寺等へもその際ぜひ共御同行致したきものに存じ候。過日御來訪の節もお話し申せしとほり十一月十七日大和多武峰談山神社の例祭にて、同社は御承知のとほり鎌足公をはじめ藤原氏

初代の人を祭れる古祠にして、建築の優麗古來關西の日光廟の稱あり、且つ春は櫻、秋は紅葉の多きを以つても知られ居り候へば、小生は宿年の望みを果たすべく今秋は必ず一遊を試みたくぞんじ居り候。あらゆる話題に富み、いかなる事物にも興味を持たるゝ尊兄の淵達颯爽たる談話振りに耳傾けながら車窓の左右に山城大和地方の晩秋の景を眺めながら汽車旅行をつゞけてゆくは何たる清興ぞやと、今より御入洛の日の一日も早からんことを鶴首して待ち居り候。

小生この頃友人と家族となくして日を暮らすことを得んが爲めに日本の新聞雜誌のほかに外國雜誌を數種購讀いたし居り、なか〳〵面白くぞんじ候。中にもニューヨークにて發行するアジアと申す雜誌は一種の挑發的の雜誌にて、セプテンバア・ナンバアは、山東省倍大號にて山東を以つて極東のアルサス・ローレーヌなり、將來の世界の禍機此處に在りと稱して盛に日本の侵略主義帝國主義を針小棒大にいひ做し居り候。それも御面會の節の座談の一材料とぞんじ候。草々不宣。

十一月七日

京都東山のほとり

尾張半田

山路樣

朝霜市隱

貸し間

借家の拂底は京都でも甚だしい。去年の九月此の家が空いた時借り手は降るほどあつた中に、特に私が前々から懇望して置いて借り受けたのであつた。そしてその借り主なる此度の主人が、たつた男一人で二階が八疊に六疊の二た間。階下が六疊に三疊に二疊三間。五間の家にゐるといふことが忽ち其處ら中に知れ渡ると、まるで婚ひとりに嫁八人といふやうに、あちらからも此方からも空間を貸してくれと賴んで來る者が斷り切れないほどあつた。こゝは一と口に安非天神の境内と云つて、新開ではあるが京都でも粹な場所の一つになつてゐる。東京でいふならば恰ど濱町か中洲といつたやうな處である。つい十年ばかり前までは一面の藪であつたものが段々拓り夷げられて意氣づくりの貸家がどん〳〵建てられていつた。私の借りてゐる家などは殆

ど草分けと云つてよいくらゐに、新開のそも〳〵建てたものらしいのが、京都式に妙なところに臭味の手を込めてはゐるが元來雜普請で、柱がひどく傾いて座敷が妙に捻れてゐたり、戸障子が手を觸れば溢れ落ちるやうにぼろ〳〵朽ちてゐたりする。それに一と口に安井と云つても目抜きの處からは少し外づれてゐるのであるが、中の方には今でも毎日大工が入つて盛に建築してゐる大きな三階造りの意氣な家があつたりする。其等は皆料理屋とか席貸し〻とかに向けて建てたもので二百圓二百五十圓といつたやうな家賃の家が出來上るのを待ちかねてゐて借り手がある。そして普通の住宅向きの家を借りて住んでゐる人間は大抵皆なそれ者ばかりで、女あるじに、女衆と猫と三人きりの家が多いのである。私の家もその塲末とはいひながら露地の内外では絶えず三味線の音が聞えたり、ぞろりと錦紗お召などを曳擦つた女がそこらを出入りしたりしてゐる。

去年の秋の初、此處を借りる契約を手紙で交換しておいて私がその夏中避暑してゐた叡山から

ら下りてくゐると隣家の家主の隱居のお婆さんは

『えらい遲うおしたなあ、今のところ貸してほしいちう人が三人ほどおすせ。』

といつて、そのうちの誰れかに是非貸してあけとくれやすといふことであつた。

それは、一人の隱居のお婆さんの二階に同居してゐる醫者の圍ゐ者の友達で、近い處の鳥料理の仲居をしてゐる女であつた。醫者の妾もその鳥料理屋にゐる間に出來合つて、こゝの二階に移つて來たのである。私の處に置いてもらへまへんやろかといふ其の口の女は相撲の年寄りか何かゞ亭主とか旦那とかで、年中大方旅にゐて、偶に歸つて來た時に女の處に泊りに來るだけだが、女は此方に所帶を構へてゐて不斷はやつぱり近くの鳥料理で仲居を働いてゐながら、ちよい〳〵此處へ戻つて來るといふのである。その鳥料理へは私はついぞ一度も上つたことはないが、『はあ、い、』といふやうに長く言葉尻を引張つて返事をする赤前垂れである。

『そんなのは不可へんやろ。』

と、お婆さんは私の意向を訊くやうに云ふ。

『そりや駄目ですよ、お婆さん。』私は一言の下に反對した。

『なあ。』お婆さんは、さういつて私の顔を見ながら『あんた、年を取つた夫婦者が置きたいとおいひやすのどすさかい。』

『えゝ、そんなのはお婆さん、あなたが私に御相談なさるのからしてをかしいくらゐのものです。』

かういへば、隨分私も自分ながら堅苦しくなつたやうなものだが、實際私は、女といふ者については自分ながら感心するほど堅苦しくなつてゐる。それは一つは自分の體の關係に大いに原因してゐるのであるが、それが自から氣分に影響して來て、熟々女とのだらしない關係が醜いものに考へられて來てゐるのである。所謂、從心所欲不踰矩とでもいはうか。

それからも一組は、これは夫婦者であるが、やつぱり隣の二階の妾の旦那の醫者が使つてゐる人間で、御亭主は年もそんなに若くはない四十を越してゐて、妻君も三十をちよつと出たくらゐだが、時々二階に出入りするのを見ると、いつも丸髷に結つた中肉中背の、やつぱり仲居

かなんかではなかつたかといふやうな風の女である。

『あれなら宜しいやないか。御亭主もちやんとしとおすし。』

といつて、お婆さんは、私がそれにもウンと云ひさうにないのを、妙な人やなあといふやうな顔をする。女房が三十くらゐで、御亭主が晝間外に勤めてゐて、私が一日家にゐる人間であるにしたところで、所謂不踰矩ならば同居に置いたつて何も格別な差支へはない筈である。所謂自分の心持ちを、自分で疑ふのではないが、斯う見えても甚しい毛嫌ひの強い私は一體その隣の醫者の妾を蟲が好かなかつた。京都者にしては成程氣轉のよく利く女らしいが、いかにも下品で不作法であるうへに二階借りの妾をしてゐながら、さながらそれが自慢でゝもあるかのやうに毎日べろ〳〵した錦紗お召などを引張つて、露地の内では孔雀のやうに振舞つてゐた。私は顔を合はしても口も滅多に利かなかつた。もし旦那の使つてゐる人間に迂濶に部屋でも貸さうものなら、屹度その女が主人顔をして階下へ繁々入り込むのは知れてゐる。さうなると痩つッ削けて貧弱な女の癖に厭に疳高な調子でべちやくちや立てつゞけに饒舌るその聲からして

耳に障る。

『えゝ、折角お婆さん、あなたの仰有ることですけれど不可せんよ。』

お婆さんは七十三で、年にしては常人以上に壯健であるが耳が一寸遠いので、すぐ二階にはその妾がゐるので、そつちの方に聞えぬやうに私は大きい聲で云つた。

『さうどすか?』

お婆さんは怪訝な顔をして私を見てゐる。

『あの人やつたら、あんた拭き掃除から御飯も煮くちうてゐますせ。』

けれども、『まあ〳〵。』と譯なしにいつて、それも斷つた。そのほか私に直接に頼むよりも隱居のお婆さんを口説いて貸してもらつてくれと拜むやうに云つてくる者が絶えなかつた。『あの人確乎したはりまつせ。』で通つているお婆さんは三勝半七の半兵衛のやうに昔人間の床しい一徹なところが、三十代から後家で通して殆ど女手一つで今日數十萬圓の身代の基礎を築いた名残りをまだ止めてゐるのであるが、それでもこの數年來キリスト教に歸依して有難いお說教を

聽いたり、段々寄る年とゝもに人の親疎に拘らず只管慈みの心が深くなつて、人から頼まれゝば何でも否といふことが云へなかつた。それで後には餘りに私が、お婆さんからどんな借り手の話をしても『まあ〳〵』と云つて謝絶してしまうので、

『なんでどす?』

と、さながら隱居さんの人柄をその一言に籠めたやうな一徹な音聲で反問することさへあつた。

『何故ッて、お婆さん、そんなに貸し急ぎをしないでも少し氣長に待つてゐれば私の註文どほりに年とつた。忠實に世話をしてくれる人間がありますよ。此方の思ふとほりの人間ならば私の方では部屋代は只にして置いても可いんですから。』

『そりやさうやけど、あないに云ふてくるのに氣の毒やおへんか。』

お婆さんは、どうかして人情につまされるとすぐ發する、涙が咽喉に絡んだやうなおろ〳〵聲になりながらいふ。

『えゝ、そりやお婆さんの仰有るとほりですけれど。』と、私はつとめて隱居さんの心に逆らはぬやうに『けれどもお婆さん、一體家主といふ者は借家に同居人を置くことは好まぬ。同居なぞを置かない借り手を望むものです。お婆さんのおうちの四條（お婆さんの本宅は四條通に在る）だつて、なるたけ同居を置かぬ方を好かれるでせう。』

さういふと、隱居さんも、それには何と口の出しやうもなかつた。四條はお婆さんの自慢であり、又自慢しても無理のない繁榮であつた。

『えゝ、そりやさうどす。』

と云つて、それッきりもう餘り部屋を貸すことをお婆さんから無理に勸めなかつた。そして誰れでも、お婆さんの處に賴みに來る者には、

『お隣りは一寸偏屈な人どすさかい、どうどすか分りまへんが、話だけはして見ますけど。』

と云つてゐるのが屢々隣りと共用の内井のところから此方へ漏れて聞えてゐた。お婆さん遂々斷はる辭に窮して好い事を云つてくれる。偏屈で氣むづかし屋で追拂つてくれるのが一番好い

と、私は蔭で舌を出して悅んでゐた。

さういふわけで結句私は一人きりが好いときめて自分の方から借り手を求めなかつたが、京都にかうした隱れ家を構へておいて、近いうちに、やがてもうまる二年足掛け三年も歸らない東京へも是非歸つて始末をせねば何や斯やがそのまゝになつてゐる。それには留守居かたがた假ひ大切な物はなくとも、階下に確かな者に居つてもらひたい、且つ今に段々寒さになり嚴冬になつたら久しぶりに伊豆の方に出掛けたいと思つてゐるが、それまでに永仕事をしたり、火を熾したりしてくれる者がゐないと不自由である。さう思つてゐるところへ露地の入口の金網屋のお内儀さんが或日の事やつて來て、

『えらひ妙なことをお訊き申しますけど、お宅さんでは、階下の座敷をもう何方にもお貸しいしまへんのどすやろか。』

と云つて、亭主は三十五六、おかみは二十二三で堅い人だが、半歳ばかり前に半歳ほど自分

のところの二階を貸して置いたことがあつて人はよく知つてゐる。今同居してゐる處がよくないので移りたいといつてゐる。貸して貰へますまいか、御飯くらゐは煮くし、拭き掃除もするいふてはりますといふから、

『あゝ、さうですか、ぢや兎に角一ぺんその人に夜分にでも話しに來て御覽なさいと云つて下さい。……いや何方かにお貸しすることはするのですから。』

で、その晩もう九時を過ぎた時分に門の扉を叩いて訪ねて來た男は晝間金網屋の女房の話では京の人間のやうに聞いてゐたが、京都辯の中に重苦しい北國訛りのある田舍者で、京都生れの女房とは遠い從兄妹どうしとかで、中京の方でつい近年まで悉皆屋を渡世にしてゐたそのおかみさんのところへ養子に來たもので實家は越前の田舍だとか云つてゐた。話してみた樣子では口も幾許か吃るやうだが、一寸した簡單な事を云ふのさへ、それがすら〳〵と理路を踏んで言ひ表はせなかつた。養父が死んで養母の代になつてからもまだ暫くは家業の悉皆屋を營んでゐたのだらうが、その人間にはとても如才のない商人で遣つてゆけさうな氣働きはなさゝうであつ

た。それで一二年前に養母も死んでからは中京にある家を人へ賃貸しゝてそれから入る少々の家賃と、半歲ほど前から、他に好い事も見付からないので區役所に勤めてゐると云つてゐた。此の人間が區役所に勤まるだらうかと怪んだくらゐであつたが、自分でも初めて訪ねて來た時に、

『區役所などへいつて居る人間は皆敗殘者です。誰れを見ても一人も面白さうな顏をして居る人間はありまへん。』

彼はぎこちない言葉で諦めたやうにいつてゐた。去年の十一月の末頃で、月給生活者が大藏省や中學校などでも盛に增俸の罷業運動を勃發してゐる時分であつた。

『要するに私の方の條件は、もう金網屋のおかみさんからも聞かれたでせうが、今のうちはまだいゝけれど、段々寒くなつたら御飯を煮いたり、食べた後のものを洗つたりくらゐはしてもらひたい。それから拭掃除は申すまでもなく氣を付けてして頂きたい。その他には私に近頃度々劇しい頭痛の起る持病が出來てゐるので、さういふ時には小用くらゐは足してもらひたいといふのです。その代りに部屋代は本來よくして下されば貰はなくともよいくらゐのものだが、

兎に角五圓だけ貰ふことにしませう。』

當節貸家や空間の拂底の時分に六疊に三疊に二疊の三間、それに小い庭があつて樹木があつて、御臺所を勝手に使つてよいのだから、家主のお婆さんをはじめ誰れでも安くお貸しやしたと云つてゐた。

區役所に勤めてゐるので次の日曜日を待つて引越して來た。女房も京生れとは思はれないやうな色の淺黑い、舌ッたるひ口の利きやうをする、まだ二十ばかりの女で、御亭主を捉へて、

『兄さんにひさん。』と呼んでゐる。

前桐の大きな重ね簞笥が二棹に小さい長持、一間の大きな佛壇。それにお釜やバケッのやうな臺所道具などもよく使ひ込んだ銅の物であつた。紫檀の机や香爐臺のやうなものを置く處へ置いて一と、ほり座敷が片付くと、そこへ恰ど下りていつた私に、

『さあ、まあどうぞお座りやす、まあ、おすはりやす。』

と、早速座蒲團を取り出して引留めるやうに云つた。

私は誰れを置いても、階下の人間によつて私の靜かな獨棲の氣分を搔き亂されぬやうにしたいのが第一の希望であつたから、それには、最初から此方から近づき難い人間といふ態度を示して置くのがよいと思つて、

『え、ありがたう。まだ一寸これからしなければならぬ用事がありますから。』

と云ひながら、折角出した蒲團に座らないでそこに突立つたまゝ、

『あなたは、なか〳〵立派な道具を持つてゐますねえ、階下をお貸しするあなた方に較べて私は柳行李一つに火鉢一つ、たつたそれだけが身上だ。』と笑つた。

『先生御戯談を。』と、その人間も笑つてゐる。

『いや本當だ。』

『みんな親が買うて置いてくれたものどすさかい、まあ、なるたけ無いやうにせんと持つてゐます。』

その人間は頭が悪いのか、一寸したことでさへ思つてゐることが條理を立てゝ口にいひ表は

せないやうな、ぶまな人間であつたが、ほかに何一つ娯樂も道樂もなさゝうであつたが碁が唯一の樂しみで、それは可なり上手らしかつた。

『XXさん、あなたが碁をおやりやすとようおすがなあ。』

時々そんなことを云つてゐた。が、一體が陰氣な、面白味のない人間で、妙に頑固な田舍者の何につけケチ臭いところがあつた。さういふことなどが原因で從兄妹同しの妻にひどく嫌はれてゐた。夫婦になつてからもう五六年になつても子供がなかつた。子供は入らぬ、一つ家に起臥しながら夫婦の交りもせぬなどゝ云つてゐた。

それで、越して來た當座暫くの間はこちらの提出條件のとほり階段に雜巾をかけたり米を洗つてくれたり、氣を着けてくれた。

『先生、御飯煮きまつせ。少しやと味なうおすやろ。』

などゝ云つてくれた。

『えゝ難有う。まあ〳〵私が斯うして自分で出來る間は自分でやります。そのうち又お頼み

する時が來たら、やつて下さい。』

十二月に入つてからも半月ばかりは暖くて、何でもしよかつたが、十四五日頃からどつと寒くなつた。こゝへ來る前にも一度盲腸炎とかで二た月ばかり患つた事のある階下の妻君は輕い風邪で床に就いたきり、殆ど冬中炬燵に嚙りついてゐた。そこへ以つて來て私は、鍋を洗つてゐる時知らぬ間に左の紅さし指に刺さつてゐた眼にも見えぬほどの鍋の破片が化膿して、それが一ヶ月ばかりも癒らなかつた。その上に私の持病の劇しい頭痛の發作と嘔吐とが一週間置きくらゐに定つて襲來した。とてもこれでは遣り切れないと思つたから階下の人間に體よく他へ移つてくれるやうに宣告した。それは十二月の押詰つてからであつたが、當節の貸家や貸間も拂底の時分に一生懸命になつて探しても丁度好いのはなかつた。さう云つてゐるうちにも月日は流れるやうに經過して、やがて二月となり三月となり四月となつた。私が遠からそのつもりでゐる東京歸りも段々遲延して春までにと云つゐたのが、その春もやがて過ぎてしまつた。

階下の人間には、私が留守にして東京に行く前に成るべく他へ行つてもらひたいと云つてゐ

るので、彼は毎日區役所へ出勤の暇にはそこら中を探して歩いてゐるやうであつたが、三月の中頃になつて暖くなつてからも、御亭主は早くから起き拔けに水道の水で飯を食つて出勤した後、妻君は、私が起きて臺處まはりに動いてゐる九時十時々分になつてもまだ炬燵の寢床にもぐり込んで新聞や講談本などを讀んでゐた。そして晩に御亭主が區役所を退けて歸つてくる時分には隣りの醫者の妾の處へ遊びに行つて、ぼろん〳〵三味線を鳴らしてゐた。御亭主は、獨り者の私と同じやうに自分で飯を炊いたり、漬物を切つたりしてゐた。彼は、世間の人が、圓山だ祇園の夜櫻だ、嵐山だのと云つてぞろ〳〵出歩く時分でも日曜日のほかは體に暇がなかつた。そしてその日曜日には貸し間を探して歩いた。御亭主がそんなにしてゐるのを知らぬ顔に色の黑い不器量の二十か二十一の若い妻君は隣の醫者の妾に連れられて昨夜動物園の夜櫻を見に行つたその翌日は又二人で嵐山に出掛けた。

『おかみさん、今日のやうな日に嵯峨や嵐山にいつたつて電車が込んで花を觀る氣もしないでせう。』

晩に嵯峨から歸つて來て氣發汕で着物の襟を拭いてゐるお内儀にさういふと、

『ほんまどつせ。電車かて汽車かて乘れしまへん。やつと汽車の窓から餘處の男はんに乘せてもらうて乘りました。着物も何も塵埃まみれどす。』

『私は去年の春もかうして京都に來てゐながら遂に櫻花の時分は嵐山にゆかなかつたが、今年も又行けさうにない。』

と獨言のやうにいつた。塵埃まみれになつても嵐山にでも何處へでも出掛けてゆく位の元氣がなければいけないのだが、三四日前も久し振りの雨が晴れて櫻花日和になつたのに浮かれて伏見稻荷から醍醐の方へ出掛けてゆくと、丁度醍醐の三寶院の庭内の枝垂櫻が滿開であつたが持病の頭痛がそこにゐる頃から次第に襲うて來て家へ戻つて來て倒れたきり、もう外へ出るのが恐ろしくつて家に靜にしてゐて掃除を運動のつもりでしてゐるくらゐが一番氣樂であつた。

それから間もなく隣の家主のお婆さんは、低聲で

『あんたの處の階下のは夫婦別れをして、これは』と小指を出して見せながら、『こゝのこれ

の處へ女衆に來やはるちうことどすな。』と云つて、又小指で自分の頭の上を指した。二階には醫者の妾がゐるのである。

『へえ！……私はまだ何にも聞きません。尤も私が東京へ行くまでに變つてもらへば形付いていゝからとは云つてゐるのですが。へえ！　私はまだ聞きませんが夫婦別れをしておかみさんは小指の處へ女衆に來るといふのですか。』

私もお婆さんのするやうに小指に物を言はせながら天井の方を指した。

『そやさうにおつせ。妙な事をしやはる思ふて私。』

階下の御亭主に訊くと、さうでもなさゝうにいつてゐたが、その頃からおかみはもうお妾のところへ寢泊りして、亭主が役所にいつて留守の間は偶に私の階下に戻つて來てゐることもあつたが、いつも晩に退ける時分になると隣の二階に歸つてゆき、妾に敎へてもらつて宵の口から氣樂さうにぼろん〳〵三味線の音をさしてゐた。薄い壁一重の隣の二階から毎時も定つたやうな『深川』だの『奴さんどちらへ』それから『臺坂』と『和歌の浦には名所がござる』に『野崎の堤』

のところが私の机の傍まで響いて來ぬことはなかつた。

一枚板を突立てたやうな甘味のない背格向をした亭主はその三味線の音が聞えてゐるのか、ゐないのか、晩に戻つて來ると私と同じやうに薄暗い臺處のまはりを動いて、自分で簡單なお菜を拵へて食つてゐた。私自身がそれをやつてゐるのでありながら、臭い者身知らずといふのか、自分の事はそんなに思へないで、平素は餘り好かぬ人物でありながら、近頃その人間が氣の毒に思はれ出した。

『あなたのおかみさんも、こんな事をいつては濟まないが、隨分我儘者ですねえ。』

『そうどすとも。それで私も困つてますのや。』

亭主の云ふのでは、妻君は親から貰つた物を賣り崩してそれを小使ひにして隣の妾などゝ一緒に花見にいつたり京極へ安芝居を見にいつたりするといひ、又おかみが妾に話したのが家主のお婆さんから傳はつたところによると、亭主は妻君に餘計な小使錢を一錢たりとも出してくれぬ。たゞ飯だけは食はしてくれるが、魚一つ買つても食はさうとせぬ。それで女房は止むを

得ず母親から貰つた物を一つづゝ賣つて小使錢にしてゐるのだといふ。

『あんなに見えてもお今さんの婚はんえらい薄情な人やさうにおす。養子の身でありながらお今さんに、お前が死んだら好きな女が女房に貰へるから、お前は死ねちうやうなことを云はるさうにおす。』

何でも正直に人の云ふことを直ぐ本當にしてしまふ家主のお婆さんはそんなことを云つた。

『お婆さん、それは兩方を訊いて見ないと、小指の云ふことだけでは分りませんよ。』と、私は笑つた。

そして四月の二十日過になつて、御亭主が近い處の寺の離れ座敷を借りる約束をしてから、いよ〳〵階下を立ち退くことが定まると、隣りの二階に寢泊りしてゐる若いおかみは、御亭主の留守の間には戻つて來て鏡臺だの行李だのを隣りへ運んでいつた。そして置き手紙を書いて碁盤の上へ載せて置いた。その晩も御亭主が戻つて來た時、私は訊く必要はないことゝ思つたけれど、あまり氣の毒のやうに思はれたので、

『あなた方は別々になるのですか、此度の處へは、あなた一人で行くのですか。』

と訊いて見た。亭主は例の物の前後になるやうな口のきゝ樣で、

『さうどす。まあ一人どすなあ。』

と云つてゐたが、親達の計ひで正式に夫婦になつてゐるのだから、それを今更離別するといふやうなことは出來ないけれど、今無理に賺かしたりして一緒に連れて行かうとしてもその氣のない者は仕方がない。當分あゝして好きなやうにして置くよりほかない。

『あゝして三味線を彈いたり遊び歩いたりして居りたいのどすさかい。』

次の日曜日を待つて亭主は一人の手傳を雇つて來て半日かゝつて又佛壇だの長持だのを運んでいつた。おかみは隣りの妾のところでその晩も例のとほり素知らん顏をして、ぼろん〳〵三味線を鳴してゐた。それはよいが、二三日經つて妾のところに來た男の客に何か徒をせられて、きやッきやッ云つて浮ざけてゐるのが壁一重を堺にしてゐる私の机の傍に響いた。

私は部屋を貸す人間の事で次の事を話さうと思つて、挿話の方が長くなつてしまつた。本來同居などを私は置きたくないのだが、これから東京に歸つて東京にも一軒家を借りて其處に落着かうと思つてゐるので京都の方は留守居かたゞ〳〵階下を貸すつもりでゐるのであるが、今云つた人間が四月の二十五日に荷物を運んで行つてしまうと、もと〳〵飽くまで獨居の靜寂を樂む自分は、久しぶりに家の中に一人もゐなくなつたので、のう〳〵したやうな氣持になつてゐた。そして前の人間が門の扉や入口の格子戸などに碌々雜巾掛けもしなかつたので、私は暖い春の日を浴びながら悠然とした氣持ちで水道の水を汲んでそこらに雜巾をかけてゐると、四十あまりの束髮に結つた一人の婦人が訪ねて來て、階下の座敷を貸してもらへまいか、先にゐた人間と知合で、退いたあとを借りるやうに頼んで置いたのですがお訊きになりませんかといふ。成程さういへば階下へ一二度來たのを見た顏のやうに思はれる。

『先の人からは何にも聞いてゐませんが、だれかにお貸しは致しますが、どんな方ですか。』

先の人間が、たしか此の婦人の噂だつたらう。下河原の方にゐる金持の老人の妾で、大口を

きいて話をする女といつてゐたことを私はふと思ひ出して、さういつてみた。

その婦人は見にくゝない身裝をしてゐるが、四十を越した顏にべた〳〵白い物を塗りこくつてゐた。

『いえ、私が入るのではございません。知つた處のお婆さんが一人でお入りになるのです。』

妙に東京言葉を訛りながら云ふ。こいつは、私が兼々老人夫婦の者か小綺麗なお婆さんかを置きたいと云つてゐたことを先の人間から聞込んで、此方の氣を取らうとするのだなと考へたから、

『お婆さん一人。たつた獨りですか。』

『まあ只今ではひとりでございます。息子があつてそれが他に居つて、且處から仕送りが來まして、氣樂にしてゐやはりますよつて、ほんまにお靜かどす。』

變に慎ましい口のきゝやうをする。

『そのお婆さんは幾歳くらゐですか。』

私は雑巾で門の戸を拭きながら話をした。

『さあ、五十……もう六十に近いお老人どすけど綺麗なお婆さんどす。』

今までも誰れか貸してくれと仲に立つて話す人があると、ともかくその本人に一度見に來るやうに云つて下さいといふことにしてゐた。

『いかゞでせう。貸して貰へますやろか。』

『さあ、そんなお婆さんなら、惡くもなさゝうですなあ。』

と云つたが、私は容易に貸さうとは云はなかつた。そのうち雑巾掛けを濟まして、

『失禮しました。まあ二階へお上んなさい。』

と、二階の自分の座敷に上つてお三どん着を更めて火鉢の傍に座ると、その婦人は厭に處女の羞むやうな色氣づくりながら遠慮しい〳〵上つて來た。

『いかゞでございますやろ。貸していたゞけますやろか。』と、確答を促すやうにいふ

『さあ、あなたが今仰有るとはりだと私の註文どほりなのですが。それに違ひなければお貸

し申してもようございます。併し私は近日中に東京に行くことにしてゐますから、おいでになるなら直ぐでないと留守になります。』

『いやもう私の方でも直ぐに越してまゐります。』

それから彼女は前階下にゐた夫婦の噂などをして、年の行かぬおかみの心得の好くないことなどを話したり隣の醫者の妾のことを批評して、自分はさながら婦德の高い女でゝもあるかのやうな口振りであつた。そして私が貸してもよいと云ふ確答を與へてから、段々話の終になつて、

『お婆さんと都合によつたら娘が一人まゐりますかも知れまへん。』といふ。

『へえ、娘さんが。』

私は、前と後と云ふことが相違してゐると思つたが、さう〳〵戸籍調べのやうに根掘り葉掘りして訊くのもどうかと思つて、さうどすかと云つてゐた。それに東京に行くにはどうせもう出立前に丁度好い借り手もなからうから留守にして置いて行くつもりでゐたのだが、同じ事なら階下に誰かゐてくれる方が好いと思つたので大抵ならば貸すことに決心したのであつたが、

年取つた婆さんに娘が一人では、先刻息子に仕送られて遊んでゐるといつたのも、どうやら好い加減な嘘らしい。その娘が旦那どりをしてゐるといふ寸法なのであらうと思つた。まあ可い。娘が妾をして母子の者が世を住み侘びてゐるとでもいふやうなのならば、餘りに覺氣のない獨居の庵よりも少しは陽氣でよいかも知れぬ。さう思ひながら、稍々あつて、

『ちや指拇でも時々來るのですか。』

『えゝ餘り度々はまゐりまへんやろと思ひます。』

『此奴め、もう嘘を云つてやがる！』と私は胸の中でむッとした。私は此の年になつて愈々自分が嘘が云へない人間と分つたせいか、嘘を云ふ奴は何によらず大嫌ひだ。此の座で直ぐ貸すことを斷つてしまはうかと思つたが、いかにも甘いことを云ふので、少しは本當もあるのだらうと、たうどうそのまゝ貸す約束をした。

それから中一日置いて翌々日であつた。その婦人のほかに六十ばかりの町方の小柄な婆さん

と三十五六の束髪に結つた色の淺黑い女とが三人づれでぞろ〳〵入つて來た。私は二階の障子の腰硝子からそれを見たので早速階段を下りていつた。そしてこれならば先づ一見したところ惡くはなささうだと思つた。

此間の婦人は、先に立つて二人を案内しながら階下の六疊の座敷に坐つた。

『おゝ、これはえらい好いお家どすなあ。』

と云つて、二人の婦人もそこの緣近く座りながら、庭の方を眺めたり天井や襖などを見まはしてゐた。

『えゝお庭どすなあ。このくらゐの庭があると樂しみなもんや。』

小い丸髷を頭の上に載せた薄痘痕の老婦人は靜かな物の言ひ振りでそんなことをいひながら金張りの小い煙管を帶の間から取り出して煙草を吸つた。

小高い塀で取り圍んだ四坪ばかりの庭には白木蓮や木犀の眼醒めるやうな新綠が五月の淸々しい風に薰つてゐた。

『そこは疊が汚れてゐます。さあ、階上へお上んなさい。』
と促した。やがて三人は又ぞろ〳〵二階に上つてきた。
『おゝ、二階はお廣おすなあ。まあ晴れやかなこと。』
などといひながら立つたまゝ、明け放した窓から一目に見える清水の山から八坂の塔の方を眺めてゐた。私は、自分が好きでそればかりを用ゐてゐる川柳を焙じて薦めなどして話してゐた。
『私も此度東京に歸つたら、また此方に戻つて來るにしても、今までのやうに一年も二年も京都に來切りにはしません。東京の方へ多くゐるやうになるだらうと思ひます。兩方にゐると飽きるから、此處も此のまゝかうしては置きはしますが。』
『ほんまにお一人やと廣過ぎるくらゐどすなあ。』
『えゝ、それに夏になつたら又何處かへ二三ヶ月は行きますから、今度東京へ行つてからはもう餘り落着いて此處にゐる間はありません。留守になつたら、二階をもお使ひなさい。』

私は此の老婦人が借りること、思つたものだから、そんなことを調子づいて云つてゐた。そこへ階下から、
『お母さん！』
と、呼ぶ聲がした。
『はあ、こちら。お上りやす。』
と、初め家を借りに來た婦人はそれに應じて、座つたまゝ呼んだ。
とん〳〵と階段を上つて來たのは二十一二の束髪に結つた、小つくりの女ではあるが、なか〳〵の別嬪である。
『こゝへお座りやす。』
と、おかあさんと呼ばれた四十ばかりのその婦人がいふのに應じて若い女は、三十五六の色の淺黑い女とお母さんとの間に來て坐つた。
京都の女がよく着てゐる藍色の勝つた藍色錦紗お召の荒い小紋の羽織をお召の着物の上に引

掛けてゐる。挨拶をする時ちよつと笑つた口元から一ぱい金の入れ歯が見えた。

『これが、申しました娘どすさかい、どうぞ宜しうお願ひまをします。』

おかあさんと呼ばれた四十ばかりの婦人はさういつて私に紹介した。私は腹の中で

『いや、これは飛んだ者が獨りゐる處へ舞込んで來たぞ。』と、驚きながら、少々當惑してゐた。それに、默つて先刻からの樣子を見てゐるのに、どうも六十餘りのその老婦人が當の借り手ではなさゝうに思はれてゐるところへその娘がやつて來ても、娘と老婦人とは何の關係も繫がつてゐさうに思へぬ。四十餘りの婦人は今日もまた、前に下にゐた夫婦の噂をはじめて、隣りの醫者の妾の婦德を非難したりしてゐた。その時門の方で私の名を呼ぶ聲がしたので私は起つていつて八疊の北窓から見下ろすと、東京にゐる畫家のT君と東京のある雜誌の京都派遣員のH君とが門の外に立つて此方を向いてゐた。後に婦人が二人從いてゐる。

『やあ、めづらしい。どうぞお上んなさい。』

さういつて置いて、下に降りていつて座敷に案内をした。四人はどや〳〵と階段を上つて八

疊の書齋の方に通つた。

先客の婦人達は、

『さあ、えらいお邪魔。いきまへう。』

といつて、六十餘の老婦人と三十五六の色の淺黑い婦人とは座を起つて歸つていつた。あとに殘つた四十ばかりのおかあさんと呼ばれた婦人は、二十一二の別嬪を重ねて私に紹介し、

『階下はこの人が借りますのどすよつて、どうぞ宜敷うお願ひ致します。』

と云ふ。私も大抵そのくらゐの事だらうとは思つてゐたが、

『あなた一人きりなの？』

別嬪に向つて屹度した口調で訊ねた。すると、おかあさんは

『ひとり年寄りを探して居りますのどすけど、丁度好いのがまだありませんので、そのうち必ず來てもらふやうに致します。それまでは私の方から私か誰れか代る〴〵來て居りますよつて、どうぞ御遠慮なう何なりと御用をおいひつけやしとくれやす。』

段々云ふことが前と違つてきた。最初に借りに來た時いつたのとは全然相違してゐる。そこを意地わるく突込んで此の座で直ぐ斷はつてしまはうかとも思つたが、假ひ猫を被つてゐるにしても、四十女の物のいひ振りは飽くまで慇懃なので、あまり急所を突くやうなこともつい遠慮して控へてゐた。

『あゝさうですか。』と、私はどこまでも鷹揚に受け答へつゝ、

『しかし前以つて申して置きますが、先日も申したとほり、私が一人ですから階下にはなるべく年を取つた夫婦者か、婆さんに貸したいと思つてゐるのですから、この人ひとりでは甚だ面白くない。本當のところが餘り別嬪過ぎる。私は階下にこんな美人がゐて、上に自分一人でゐると思へば、あまり惡い氣持はしない筈ですが、しかしそいつは一寸困る。どうぞその積りで年寄りにはぜひゐてもらふやうにして頂かねばなりません。』

『えゝもうそれはよう分つて居りますよつて、その年寄りを至急に連れてまゐります。』

私の云ふ通りに調子を合はして置いて、二人は歸つていつた。私は八疊の方に入りながら、

『あの若い方の女がこゝの階下に來るのだ。諸君どうです。私の處に越して來ませんか。』と浮戯けるやうに云ふと、

『そりや素敵だ。お目出度う〳〵。』と、仰山に繰返しながら、H君はぺた〳〵お辭儀をする眞似をした。

『その代りに君の方のへ色つぽい物が書けます。京都でどんな侘び住居をしてゐるかと東京の知人は思つてゐるだらうが、この年寄もまだまんざら棄てたものでもありませんな。あんなのが舞込んで來るところを見ると。』

『いやもう、貴方また神經衰弱がひどくなつて、私が書かすに困る。』H君はまた仰山に云ふ。

『どうもあの樣子といひ、下河原の方にゐるといふ處を見ると、彼女はヤ印らしいな。』

『あゝ、さうかも知れぬ。』一昨年の秋まで二年ばかりその下河原の近くに住まつてゐて、その邊の事をよく知つてゐるT君もさういふ。

『併しヤトナにしては好い方だ。かう頭髮の房々として柔かく垂れかゝつてゐるところなど、

なか〳〵好い。』

所謂T式の美人畫家として、自分の繪畫の趣味から、さういふタイプの美人を世に作り出した、フエミニストのT氏は直ぐにそんなことを云ふ。

『お目出たう〳〵！』

H君はまた仰山にいふ。

『まあ、さうあんまり老人を冷かすものぢやない。精々御註文どほりな艶物を書きますから。』

私達は暫くそんな戯談を云てゐたがT君は今夜の汽車で東京へ歸るのだと云つて、H君と、もに二人の婦人を具して歸つていつた。

その翌日、昨日の別嬪と例の四十ばかりの婦人と二人朝から盥や箒を小婢に持してやつて來て、半日が、りで掃いたり拭いたりしてゐた。ハイカラの美人は緣側を拭きながら打ち水をした清々しい庭の若葉を樂しさうに眺めて、

『私今に朝顏をたんと〳〵此處に植ゑんならん。』などゝ云つてゐるのが聞えた。私は、その日に越して來るのだらうと思つてゐたが、晩になつても越して來ない。夜に入つてから靜かな春雨がしとしとゝ庭の若葉に灑いでゐた。雨になつたからもうどても今夜は來はすまいと思つてゐると、十時頃になつて、

『××さんお出でになりますか。』と例の四十女の優しい聲が靜かな雨の降る音の中に聞えてきた。

『やあ。』と、私は二階の障子を開いて聲をかけた。

『今日はおほけにお邪魔をいたしました。』と、階下でいつてゐる。

『まあ此方へお上んなさい。今日は到頭來ませんでしたな。』

『えゝ、それであなたがお待ちやしとくれやすやろ思ふて、一寸その事を内の少女にさういふといでやす。いふといて、私外へ一寸出まして、今戻つて、××さんへさういふて來とくれやしたかと訊たますとまだ行かなんだいふて、あんた假睡をしてますよつて私今叱つて置いてこ

ないに遲うからお妨げをいたしまして、まことに濟まこつどす。』

婦人は例の飽くまで慇懃な調子で、訛のある言葉でさういふ。

『ナニ、いつでも御都合の宜い時にゐらしつたらいゝでせう。』

私は書きかけた物があつたけれどあまりに靜かな好い雨の夜なので讀書や執筆をするよりも誰れかと話して見たかつた處であつた。

婦人は遠慮しい〳〵二階に上つて來て、出した座蒲團をよけて向うの方に坐つた。

『今日掃除にまゐりましたのも仕馴れぬ事をしましたよつて、えらう疲れたいふて、これも貴方、今戻つてみると襖に恁れたまゝ微睡をして居りますやうなことで、ほんとに相濟みませんことどす。』

それを端緒に私はそれとなくハイカラ美人の話を持ち出して訊くと、彼女は不思議に私と同縣の岡山の者であつた。日那といふのはまだ定つたやうな定らぬいやうな口振りである。何だか此方の思ひ過しか知らぬが、昨日どうぞお願ひいたしますなどゝ云つたことなどを思ひ合はせて、これは迂濶してゐてはいけないぞと思はせた。

『ナニ、日那がある方が可いのだ。此のお爺さんを、もう誰れも何とも思ふものはありはしませんが、傍の噂がうるさいので困りますから。』

昨日、此方でおほかたさうと付けた見當が大抵當つてゐさうに思はれた。

『明日雨が霽りましたら越して參じます。』

と云つて、婦人は十一時頃に歸つていつたが、翌日は五月の朔日、日本晴れの輝かしい晴天になつたが、何の音沙汰もない。たゞ下河原の四十婦人のところの十三四になる例の少女が小い重箱にごもく壽司を入れたのを持つて來て

『これ、内でこしらへましたのどすよつて、味なうおすけど、どうぞお上りやしとくれやす。』

どしたらお殘しやしとくれやす。』と、にこ〳〵しながら云ふ。

『おゝそれは御馳走。お前のところでは一體誰れが此處へ來るの。』さういつて、お妻といふそのおちよぼに訊くと、くりくり肥つた可愛いおちよぼは、

『わたい、どや、よう知りまへんけど、おほかた姉さんどつしやろ。』

『あのハイカラの別嬪さんかい？』

『さうどす。』

東京を遁げ出して京都三界までも浮世を遠ざかつて居るこの隱棲に何の因縁で、あんな美人がまた階下に入つて來るのだらうと思つて、私は誘惑の魔の手がそこらに窺いてゐるやうな薄氣味惡さを感じた。（をはり）　——九年五月十四日——

白木蓮の葉かげ

一年の中で最も健康に好い、清爽な新緑の時候が來た。造化は、殘虐な嚴冬の後に斯の如き萬物蘇生の春を惠んでゐる。實際秋が好いの、夏がよいのと云つても晩春から初夏にかけての今時分くらゐ好い時はない。京洛の都は今しもその新緑に埋まれやうとしてゐる。東京の近郊も新緑の眺めは京都に讓らない。市中の山の手にも新緑は多い。その點では京都よりも或は優れてゐるかも知れない。私はその新緑の頃を以つて滿二年と尙ほ餘歸らない東京に、近いうちに歸らうと思つてゐるのであるが、新聞で見たり、知人などから貰ふ書信によつて近來の東京が倍々殺風景な物になつて來たことを報ぜられてゐる。『京都は年を取つて金でも出來て隱居するに好い處だ。』と、よく云はれる。併しながら私が京都に斯う永く滯在してゐるのはその爲め

でもない。私には何時まで經つても金などはどうしても出來さうにないから、金があつて、年を取つて樂隱居を極め込んで京都にゐるのとは、頭から範疇を全然異にしてゐるのである。京都にゐても第一京都の人間と嘗て交際をしない、又しようとも思はぬ。日用品の商人より外に殆ど口を利かぬから所謂交際の意味に於いて京都人とは口を利かないのである。それは京都にゐながら、私の簡素なる生活が依然として全く東京によつて支へられてゐるからである。これが他の商人とか月給取りで京都の地にゐるのならば、勢ひ京都人と必要上交らなければならぬ道理であるが、原稿料に衣食する文筆の士に在つては矢張り東京が大事である。私は一昨年の四月の二十九日朝（丁度二年前の今日だ。）東京を去つてから今日まで、只の錢一文たりとも京都から受取つてゐない。月々京都の魚屋に仕拂ふ金も、毎日好きな風呂屋に持つてゆくお錢もみんな東京から送つて貰ふ原稿料の内から拂つてゐるのだ。

故に、ずつと前に、東京のT氏から、戯談半分に僕を誡めたハガキを越してくれて、『そんなに京都に長くゐて京都化しては不可ない。』と、心配して來てくれたのであつたが、それは有難いが

考へると、前述の理由に於て、私の身體こそ京都にゐながらも精神は依然として東京にゐるに少しも異らないのである。唯併し、東京に未練のある者が餘儀ない事情から遠く東京を離れてゐて常に東京の事を氣に病んでゐる如くに東京の望鄕病にも罹らないでゐると云ふのも、去來共に心の自由であるからである。精神的には常に東京にゐると異らないと同時に、東京望鄕病に煩はされないで超然としてゐられるのは、自分ながら大分自己修養が積んだと思はぬこともない。

私にとつてはなる程東京が大事である。東京から見離されたが最後忽ち路頭に迷はねばならぬ。それでゐながら東京の事が氣に懸つて、長く留守にしてはゐられない程東京に執着もしてゐない。——文壇に執着してゐない。いづれも吾々文學の事は飽くまでも獨自の境を開拓しなければ嘘である。文學者は獨自の境を開拓しさへすれば、そこは寬濶な東京だ。東京は必ず糧を授けてくれる。決して打遣つては置かない。西洋の諺にも故鄕は古井さへ身を助けると云ふが、東京は家族のない私ひとりの生活をどうか斯うか支持してくれる。その意味に於て私の生れ故鄕よりも東京の方が私には本當の故鄕である。

それ故斯うして長く京都に來てゐても東京に對しては倍々強い愛都心――妙な熟語だが――を持つてゐる。それは恰も國外に在る者が一層強い愛國心を意識すると同じである。その證據には私は京都にゐても日々の新聞に表はれる大阪や京都の市府政に關した記事に一番興味を持ち得ない。之に反して東京の市政や電車の怠業や罷業には、自分は差當つての不便不自由は感じなくても、矢張り心に懸る。どうせ詰りは東京に歸つてゆくのだから、近來の東京市の交通機關の不完全な事などが市民の一人の感情を以つて氣になるのである。

だが、斯うして今現在京都に身を置いてゐる以上は、やつぱり京都の市街によつて樂しみうるものは力めてそれを享樂しようとしてゐる。誤解してはいけない。それは錢のかゝる享樂を云ふのではない。況して人間を見るのに時間に錢を拂はなければならぬやうな遊びは、この儲けのない自分にはもう餘りに馬鹿々々しくて出來る事ではない。假ひ入らぬ錢があつてももうそんな馬鹿な事は爲る氣はさらりと無い。唯屢々私の云ふ如く京都の自然は桓武帝が此の山城國の北隅の地域に奠都まし〳〵た時分からの如く好い。たゞそれのみが何故にさう長く京都に

返つてゐるかといふ唯一の理由でないにしても、少くとも最大の理由である。次に此の附近に、いふまでもなく古い史蹟や名刹巨祠などの多いことである。さうかと云つて、私は日々そんな史蹟や古刹の探訪に時を費してゐる好古癖の閑人にも全然なり切り得ない。唯其等の物が一緒になつた、綜合的に一つの古い感じの惡くない、日本の内外を問はず萬人の好む所謂京都特有の古都の情調を湛へてゐる、その情調にじつと浸つてゐるのである。

新緑は前述の如く東京も好い。或は東京の山の手の高臺を埋めてゐる新緑や近郊の武藏野の新緑の方が京都やその近郊の新緑よりす優れてゐるかも知れないが、今日の如く東京が物情騷然としてゐては、幾許周圍に煩はされないやうに超然としてゐようとしても落着いた氣分で其の新緑の頃の清々しい色彩や氣分を十分味はふことは出來ないであらう。その點になると京都は閑靜なものである。電車の罷業や怠業はない。その代りに電車の車掌などの氣の利かない、間の抜けたこと夥しい。併し京都でも電車はこの頃よく込む。私は電車に乘ることを好まないから、なるたけ電車に乘ることを要しない範圍に散歩をする。そこになると新緑に彩どられた東

山一帶、清水から高臺寺、圓山公園から智恩院、南禪寺あたりは今が一年中での最も美しい季節である。

嵐山には、去年の櫻花の節にも行かなかつたし、今年も遂に行かなかつた。その代りに五月に入つてからは屢々歩いてみた。今頃の嵐山は實に何とも云へない美しい新緑に彩どられてゐる。洛西の嵯峨は洛南の宇治と、もに京洛近郊の二大名勝區であるが、嵯峨一圓どんな地點に入つて行つても其處には美しい自然と古代の藝術とが見られる。大覺寺、二尊院から祇王祇女の墓のある邊も好いが、私は殊に廣澤の池や大澤の池の畔を好む。靜かな淺黄色の雨が水草の浮んだ池の上に降りそゝいでゐるのを傘を翳して眺めてゐると誠に閑寂な氣分である。不忍の池の畔などの荒んでゐるのと遙に違つてゐる。

眼覺める樣な東山の新緑は、恰ど枕屏風を立てたやうに私の部屋の窓から眺められる。殊に靜かな雨の日は何とも云へない好い氣分である。昨日の朝から何となく蒸々として頭が重かつ

たが、晩方一陣の驟風がどつと吹き起つて京にはめづらしい砂塵を街路に捲き上げたと思つたら、忽ち雨滴を落して來た。それから宵の内は降りかけては止み、止んだと思ふと又降つてゐたが、夜半に及んでしと〳〵と本降りになつて來た。私はその靜かな雨の音を聽き乍ら毎時よりは遲くまで靜かな氣分で夜を更かした。

私の家の前庭は高い塀に圍まれた四坪ばかりの庭で、前の二階を隱すやうに、可い加減大きさの白木蓮の木が立つてゐる。それが去年の秋風に落葉する頃から旣に膨らかな無數の蕾を持つてゐたが、早春三月の初から段々大きくなつて、三月の末には滿枝悉く純白な花を開いた。が、四月の初にかけて五六日春霖が打ちつゞいたので、本來脆い花は分けて早く朽ち落ちてしまつた。そして四月一と月の間に若葉の緣が見る〳〵生長して今はもう向うの二階をすつかり隱すほどになつた。

昨夜夜業の筆を擱いて二階の雨戸を閉めやうとして起き上ると、蕭々と庭の若葉に漱ぐ春雨の合間合間に、いと幽かに人の唸る聲が聞えてゐる。初は自分の空耳かと疑ひながら暫く耳を

澄ましてゐると確かに人の唸る聲で、しかも力無い聲がかすかに聞えてゐる。何處の家でしてゐるのだらうと思つて尙ほよく耳を澄ますと、それは白木蓮の若葉に隱された直ぐ向うの家の階下座敷の方から聞えてくるらしい。けれども、そこは此方の高い塀の外になつてゐるので、座敷の樣子は少しも分らないが、さう思ふと確かにそこから幽かに唸る聲は起つて來る。私は思つた。

『はて、だれが俄かに病氣になつたのであらう?……私自身が劇しい頭痛の發作で屢々あんな聲を立てゝ一日一夜打倒れることがあるが、丁度私の唸る時に違はない聲である。』

それが他に聞えると、さぞ聞く人は厭だらう。自分も醜いから制しようと思つても、苦しまぎれに聲は自然に出て、さうしてゐると幾許か苦痛が堪へられるのであるから、仕方なく聲を發するやうになる。

『だれが、あんなに悪いのであらう? 不思議だ。』

と、私は、雨戸を閉めるのを止めて考へてみた。

私などは、此の冬の悪性感冒にも戰々恂々としながら、どうか斯うか恙なく此處まで切り拔けて、お蔭で一陽來復の春の惠みに浴することが出來たが、此の露路の中の一廓では最も藥餌に親しみ易い方の人間である。向うの家は金網を手職に製造してゐる家で夫婦に十歳と八つばかりの女の兒が二人。亭主は未だ三十五六で酒も好きらしいが、それでも稼業に感心に勤勉で、露路の出入りに、いつ見てもそこの亭主が職に坐つて針金を手に取上げてゐないことはない。女房も此の一廓の中では、他の住人の多くが、べろ〳〵した錦紗お召などを曳擦つて思ひ上つてゐる妾渡世の女などが多いのに比べて職人の女房で、いつも木綿づくめでこそあれ、くれ〳〵と一日よく動いてゐた。私が去年の九月の末に此處に家を持つてから共用水道の處で最初に口を利いたのは、そのお内儀であつた。隣りに住んでゐる家主の隱居の婆さんの話では、其處の家でも一と頃は困りに困り拔いて、幾許働いても子供に木綿の着物を一枚づゝ拵へて着せることすら思ふやうに行かなかつた。ほんの食べて通るだけで、先の内は亭主は他へ金網細工の仕事に通うてゐた。それが、私が去年の九月に此處に來た時分から家で仕事をするやうになつて、

自分の店先にも金網細工の品物が一つづゝ並べて置かれるやうになつたゞけ、原料を買込むほどの餘裕が出來たのであつた。初のうちは魚を燒く網だの、茶ほうじだのが少しづゝ店頭に吊して置かれたのが段々大きな篩などのやうな品物を壁に掛けつらねられてあるのを見たのは、つい此の間であつた。問屋へ持つて行く殘りをさうして置いたのだ。……

『なるほど氣が付かなかつたが、よく考へてみると今日は一日あそこのお内儀さんの姿を見なかつたやうである。

『どんな日でも亭主が店の間で職に坐つてゐないことのない如く、おかみが白い上つ張りを當てゝカランカランと露路の三和土（たゝき）の上を下駄の音をさして水道の口へ米を炊ぎに來たり、藥鑵を持つて水を汲みに來る姿を一日に三度か四度は認めないことはなかつたのに、なるほど、それを見なかつたやうな氣がする。ぢや、おかみさんがあんなに力無けなる聲で幽かに唸つてゐるのだな。健康さうな人間であつたが、どうした事か、私の唸るやうに唸つてゐる。』

私は、そんな事を思ひながら、雨戸を閉めて寢た。すると一と寢入りして、ふと眼が覺めた。

それは人の物聲に眼が覺めたのである。戸外の事だから、はつきりと分らぬが、やつぱり家の前の塀の外あたりで毆き鉦の音に和して夜更けて俄かに多勢の同衆の聲で御詠歌の合唱が始まつたのだ。それがすぐ近く枕に通うて繰返へされてゐる。

『はてな、何處かで今夜觀音講でも催されてゐるのかな。』

と、ぼんやり思ひながら、夢現の頭を擡げて消し忘れた電燈の光に枕頭の文鎭時計を見ると時計は最う一時を過ぎてゐる。

『一時を過ぎてゐるのに、隨分遲くまで觀音講があるものだな。』

と、又半分夢の如く、そんなことを考へつゝ兎角寢そびれて、枕の上に轉輾してゐると、御詠歌はいつまでも止みさうにない。一人の先達の聲で十句觀音經をでも誦してゐるのであらう、暫く低い聲で南無大慈大悲觀世音菩薩……』といつて、次に西國三十三所の番號を讀んで、後は多勢の同衆の合唱で、

ちゝはゝの、めぐみも深き、粉河寺。

ほとけの誓ひ、たのもしのみや。

といふやうに、次から次へと高らかに續いた。殿き鉦の音は、戸外の、しと〳〵と降り漱ぐ雨の音に交つて陰々と夜半に冴えて響いた。

『隨分遲くまで根よく御詠歌をやつてゐるものだな。』

と、私は又考へたが、一體京都などには佛への信心といふよりも、流行歌でも唄ふやうなつもりで半ば醉興に御詠歌を唱へたりする者が、老人のほかに若い連中にもあるのだから、殊に今は春闌の頃で諸人が浮かれてゐる時だから、おほかた面白半分に、觀音講を開いて、いやに春を悟り顔に三味線の代り鉦を殿いてお精進で遲くまで酒を飲んでゐるのかも知れぬ。今になつてはつきり考へて見れば斯うだが、その時は私も夢うつゝにそんな事でもあらうと、考へるともなく考へてゐた。それに塀の外に左の方の窓の下の家でも若い丸髷の嫁がゐて、時々思ひ出したやうに夜更けてから三味線を浚つてゐることがあるし、長屋の一番端の模樣繪かきの家では御亭主が淨瑠璃の稽古をするし、すぐ右隣りの二階では壁一重彼方で園はれ者が眞晝間からで

もお茶屋か待合の二階座敷のやうに『深川』や『奴さんどちらへ』を彈きつゞけると、向うの方の二階では蓄音機をよくやつてゐる。年中春のやうによく浮れる京都の人間どもだと平常から思つてゐるので、遲い御詠歌の合唱もそのくらゐの事に思つて、そのまゝ又いつか寢入つてしまつた。そして翌朝の――今朝起き出でゝ、一寸露路の外まで用達しに出やうとして、露路口の金網細工屋の入口の處をふと見ると、朝から五六人の人が坐り込んで家の中が妙にしんみりとしてゐる。露路の方に向いてあいてゐるお勝手口のところからも家の樣子が見えて、そちらには女連中が多勢立ち働いてゐて毎時とは違つてゐる。

『はてな!?』と不思議に思つて、私は戻つてから隣りの家主の隱居婆さんに、金網屋ではどうしたのですかと訊ねると、朝飯を食べてゐたお婆さんは、

『これが、たつた一日の急病で死なはつた。』と、箸を持つ手の小指を出して見せて、『百人に一人のめづらしい病どすて、ほんまに氣の毒な。一昨日の朝とか髪を結ひにいて居つて、そこでウンと倒れたきりお腹が痛んで、昨日の朝お醫者が二人も立ち合ふて、もう九分九厘あかん

といふのを承知で、それでもと注射を二本とかしやはつたさうにおすけど、どうしてもあきまへなんださうにおす。ほんまに氣の毒な事どす。平常から時々お腹が痛む〳〵云うてはつたが、やつぱり女は子宮が原因どすなあ。』

それで私も一つ露路の内のつき合で、今朝はしるしばかりの香奠を包んで持つてゆき、他人ながら一と言の弔詞を述べた。それは親しい人の死でないだけそれだけ一入無常迅速といふやうなことが歴々と胸に透徹して考へられるのである。

（九年五月一日）

死の幕の彼方

肝腎の學課が留守になるので小説の方には脇眼も振らぬやうにしてゐたのだが、明治二十六年の夏私が中學校の一年から二年に進級した時の暑中休暇には、かねて新聞の廣告などで見て置いた博文館發兌の帝國文庫第一編曲亭馬琴の八犬傳を讀む機會を得た。それまでにも頼山陽の日本外史は小學校の時から夙に愛讀の書であつたし、稗史のたぐひは殊に好きであつたが小學校ではいつも一番の成績で、そんな物を讀むには綽々たる餘裕があつたけれど、中學校に入つてからは、一年の時から原書の幾何だの代數などに苦められて、とてもそんな物を讀んでゐる餘裕はなかつた。

やうやく樂しい暑中休暇が來た時に、父に八犬傳を買ふのだからお錢を欲しいといふと、ま

だ中學校に入らない以前は私の讀書力の進むのを愛で、種々な稗史を授けてくれた父が、

『そんな物は學校が濟んでから、年を取つてから何時でも讀めるぞ。』

といつて却々うんと云つて定價四十五錢のお錢を出してくれさうになかつたのを年齢相應な生意氣な理屈を云つて、遂々買はしてもらうことにした。その時の嬉しさ！　そしてその暑中休暇には八犬傳三篇の中二篇しか讀まなかつた。翌年の夏には、もう疾に中學の學課に辛抱しきれないで、學校を止めてゐた　學校を止める時には、父は一應『もつとよく考へてから止めた方がよからう。』といつたのを、それほど大騒ぎをして、その頃一縣に一つしかなかつた、而も全國で頗る好評のあつた岡山縣立中學校に七八十人中五番の好成績を以て入學し、自分も夢のごとく意外ならば、父兄や鄕友まで驚いたほどであつたのを、私は深い前後の思慮もなく止めてしまつたのだ。

中學校を止めた一と年の夏はずつと父の傍にゐた。私の故鄕は岡山縣の片田舍で誠に不便で仕樣のない處であつたから、都會好きの父は晩年には岡山の街にゐて暮してゐた。十里ばかり隔

つた實家には長兄夫婦に、偶に父のところに來るだけで、母も主にそちらにゐた。私と父とは四つの釣手を二つゞつ吊るといつたやうにして一つの蚊帳に寢てゐた。私はその頃はもう八犬傳の第三篇をも讀み了つて、矢野文雄氏の經國美譚を讀んでゐた。蚊に惱まされて讀みづらいので、早くから蚊帳を釣つて私も父もその中に入つて横はつた。父はその時まだ五十四歳であつたが、虛弱な體質であつたし、氣持ちも年よりは十年くらゐはどうしてもふけてゐたやうである。

父がまだ田舍の家にゐた頃でも、どうかすると、父の傷ましいまでに老衰した形容が歴々と眼に立つことがあつて、その時、もう近いうちに死ぬであらう。假ひこゝ十年や五年には死なぬとしても、必ず死ぬる日が來るにはちがひない。さうした時に――父のあの傷ましいまでに窶れた姿や顏や眼が永久に消へ失せてしまつた時に、私はどんな心持ちで父の死に對するであらう。それは必ず遠からぬうちに私の上に落ちて來る運命にちがひない。それを思ふと私は氣が遠くなるまで、身も世もない心地がして、もはやそれ以上に、それから先きの事を想像して

みるに堪えなかつた。そしてその忌はしい妄想を強るて思ひ消さうと努めながら、やつぱり父の老いた眼元や姿を凝乎と見守らずにはゐられなかつた。

市街に住むやうになつてからは父も携はつてゐる事業などのことで心が緊張してゐるせゐか今までになく元氣づいてゐたが、それでも蚊帳の中に二つ寢床を並べて私は一心不亂に蚊帳の外に置いたランプの火光で經國美譚に讀み入つてゐると、父は眠つてゐるのか現でか、俄かに劇しい咳嗽に苦められて、絶え入るやうに咳嗽をはじめる。それが、いつまでも續くので、私は本から眼を離して向うに横つてゐる父の方を見る。父は薄い夏の褥の上に骸骨のやうな身體に鼠色の縮の單衣の寢卷を着て海老の如に曲りながら、傍で聞いてゐられないほど切なさうな息をして咳き入つてゐるのである。

晝間は經營してゐる店の方にゆき、夕刻歸つて來て夕飯を濟ましし、しばらく表の方の間で好きな煙草を吸ふてゐるかと思ふと、

『もう蚊帳の中に入らうかの。』

といつて私を誘ふて蚊帳をつる。父は煙草を吸ふてゐる間も、それから蚊帳の中に入つてからも暫らく煙管で灰吹をこん〳〵と叩いてゐるが、その間も何を考へてゐるのか、每時も凝乎と考込んでばかりゐた。

そして灰吹を叩く音が止んで寢入つたかと思つてゐると、その傷ましい咳嗽の發作が起つてくるのである。絶え入るやうな劇しい咳嗽の聲は私の胸にまで響いた。

私は經國美譚の佳境に入りつゝ、またしても氣になるので時々本の上から眼を放して父の痩せた海老のやうに曲つた寢姿を見やるのである。そのうち咳嗽も靜まつて、いつか寢入つたやうである。

私は、今までこんなこんなことを書いて來たが、これから父を中心にして、父のまはりにゐた、今はもう、父と同じやうに、夙に世を過ぎてゐる人々の印象を誌して置かうと思ふである。私は、自分が成人してから多くの人間を見、多くの人間に接した。けれども、それは、自分が

まだ稚くて、感情の純粋であつた頃に接見した人間の印象とは甚しく異つたものである。その頃見た人間のしてゐたことや、いつたことには、單に私と利害の關係を超越してゐたのみならず、何となくユーモラスなところが多かつたやうに思ふ。それは、二十幾年間の蒼い夢のやうな幕を隔てゝ思ふからであるかも知れぬが、私には其等の人々の容貌風采が今でも尙ほ明歷と眼に見るやうに記憶に殘つてゐるのである。

父の腰刀の如に、父の手先になつて常に働いてゐた甚藏といふ人間があつた。私はその人間のことをいつまでも忘れることが出來ぬ。彼は道樂肌の人間であつたが草深い田舍の者にしては商才があつて、目先の利く巧慧な人間であつた。油斷のならぬ狡い處もあつたが何事でも話しが早解りした。父は時々甚藏を信用しなくなることもあるが、どうも他の者では間に合はぬといつて、又しても甚藏に事を授けて用に使つてゐた。甚藏の嘘といつて大嘘吐きが村中の通り者であつたが嘘を云つてゐるなと知りながら、口の先きが巧いので誰れでも、うつかり話しに引入られてしまう。私の三人の兄の結婚に關して彼の關係のないのはなかつた。そして甚藏自身

は何度女房を持ち替へたか知れない。彼の女房で最初に私の記憶にあるのは、隣り村から來てゐた。いふまでもなく普通の順序によつて結婚したのではなかつた。その頃私の子供心に聞いてゐたことを後に思ひ出してみるに、兩方でひどく慕れ合つてゐた仲にちがひない。それでゐながら又この夫婦くらゐよく喧嘩をする者もなかつた。女房はお由といつて、私の子供の眼にも田舍の者にしては一寸垢汁ぬけのした小意氣な女であつた。

『甚ざんがまた夫婦喧嘩をした。此度はなか〳〵念が入つてゐるから一寸では仲が直りにくい。』

といふやうなことがいはれて、甚藏が暫く私の家へ來てゐるやうなこともめづらしくなかつた。それも喧嘩の原因はいつも嫉妬で、女房は大の嫉妬燒きであつた。甚藏はまた道樂者で浮氣をよくした。夜々中私の家の戸を叩き起して、甚藏がひどく夫婦喧嘩をしてゐるので直ぐ一寸來て頂きたい。といつて、寢てゐる父を呼びに來るのを私はよく知つてゐる。一度など亭主の甚藏が商賣にいつてゐて天秤棒を擔いで外から戻つて來ると、女房のお由は、『おかへんなさ

い。』と常のとはり愛相よく出迎へて、甚藏が肩から荷を下ろして、天秤棒を外すのを手傳ふやうにしながら、突如その天秤棒を引手繰つて、いやといふほど亭主の向脛を打ん毆つた。甚藏も手を出すのは早い方であつたが、女房には屢く打たれてゐた。その時の活劇の光景を彼は落語家のやうな面白い語調で私の母などに繰返して話して聞かせてゐた。

『おかへんなさい。と、毎時とちがうて、今日はえらい御機嫌が好いな。と、少し不思議に思ひながら、手を出して天秤棒をとらうとするから、此方は何の氣もなく渡すと、突如此處のところを、眼を廻はすほど打つた。……』

彼はさういつて、自分でも面白いやうに激昂した調子で笑ひながら話した。

また一度は、尺八を以つて亭主の肱のところを折れるほど打ん毆つた。その時であつたと思ふ。甚藏は、もう此度といふ此度こそは、どうあつても勘忍ならぬといつて、遂に別ればなしになつてしまつた。その時も喧嘩の起りはやつぱり嫉妬であつた。夫婦喧嘩は犬も喰はぬといふが、甚藏夫婦はとり分け愛の變形たる嫉妬が原因で毎時喧嘩をはじめ、到頭それが昂じて仕

舞に別れるやうなことになつてしまつた。女房のお由は眉を落して齒を染め、華奢な物腰に單衣の頃はよく黑と白との辨慶格子を着て居たのが今も眼に殘つてゐる。その頃未だ七つか八つの私の絲鬢にした頭を撫でまはしながら、『鹽辛さうな顏をして。』といつて、絲鬢を摘んで數へたりしてゐた。

甚藏が父の代理で、兄の嫁を聞合はせにいつたのは、尺八で女房に肱のところをいやと云ふほど毆られて暫く私の家に來てゐた時であつた。何か事があると、蜂の巣をつゝいたやうに仰山になる甚藏であつたが、女房にはよく劣けてゐた。およッさんおよッさんといつて、村中で評判の女であつたが、遂にそのおよッさんも甚藏のところから隣り村の母親のところへ歸つてしまつた。甚藏は村では、たつた一軒しかない荒物屋を營んでゐる者であつたが、商賣をしてゐる家に一日も家内がなくては立ちゆかないといふので、その後私の父の媒介でこれも近い處の町から二人の男の子の連れ子のある後妻を迎へた。先の女房には子はなかつた。甚藏は道樂者であつたから、自分にも子は出來なかつた。此度の女房は先のお由とちがひ、今こそ逼息はし

てゐるが色香こそなけれ、身元もよく、讀書筆算の術にも暗からず、氣質から物のいひ樣物腰まで大家の御寮さんといふても恥しくないおかみさんであつた。けれども時々向ッ腹を立てゝ、まるで狂人のやうになる甚藏は、そんな眞良な女房をも又しても苛責して出すの引くのといふ悶着をおつぱじめてばかりゐた。此度は先のおよしの時と違ひ夫婦喧嘩ではなかつた。此度はいつも甚藏の方から何か氣に入らぬことがあると云つて一寸したことにも癇癪を起しておとなしい女房を打つたり毆いたりした。村内にはその女房の遠緣でおぢさんといふ名目に當る老人があつて、その老人關係で、甚藏とも元々まるきりの退いた仲でもない緣つゞきの夫婦であつた。何か甚藏のところに悶着が持ち上るとその老人が驅付けていつたが、そんなことくらゐで甚藏の癇癪は納らなかつた。そして仕舞には私の父のところへ持込んで來た。ある時など子供の私は寒い〳〵冬の夜半母の傍に寢てゐて、ふと物音に眼を覺ますと、家の戸を叩き起して、戸外から聲をかけて七十をもう五六も越した老人のそのおぢが姪にあたる甚藏の女房と連れ子の弟の方をつれて來たのであつた。私は隣の部屋の話し聲にふと眼を覺まされた。私の傍にゐた母はおろ〳〵聲で、

『お前などは内で毎時無理ばかり云ふけれど、益さんを見なさい。お前よりはまだ三つか四つも小いのに、本當のお父さんが無うて、他人の父親の世話になつて居ると、あのとほりぢや。どんな夜々中でも出てゆけといはれゝば、お母さんに從いて貰はれて來た親の家から出て行かねばならぬ。……』

暖々と寢てゐる私に云ひ聞かせるやうに、さういつたかと思ふと、あとは獨言のやうに、

『いや、ほんとに、甚藏といふ人にも困つたものぢや』と、母は舌打ちをしてゐた。

座敷の方では、七十幾つの老人のぼそ〳〵した話聲が洩れて、甚藏が今夜の中に親子共出てゆけといつて、納まりませんのでといふやうなことを私の父に向つて話してゐるらしい。兄の方の子は去年から大阪へ丁稚奉公に出してあつた。

戸外は山里の冬の夜風が大きな魔物の息するやうに、がた〳〵と戸を搖つてゐる。——私は幼いころの冬の夜風の山里に荒れ狂ふ物音を、いつまでも忘れることが出來ぬ。長い〳〵冬の

夜その風の吹き狂ふ物音に屢々圓かな夢を破られてその風は何處から吹いて來るか知らぬが、消魂しい物音にふつと夢を覺まされて枕の上に耳を立てゝゐると、子供心にも神經のせいか、遠くの方から丁度人の足音が忍び寄ると思はれて、ざわ〳〵と近づいてくると思つてゐると、それが緣側の雨戸や入口の戸に來て颯と打突かると、まるで戸外から家の内に入らうとして隙間を見附けて搖つてゐるに違はない音がする。恐ろしい者でも押入つて來るのではないか、蒲團を引被いて寢床の中に深くもぐつてゐると、一と仕切り戸を搖つたあとは、又ざあッと水の退いてゆくやうな音を立てゝ遠くの方へ吹き狂ふてゆくらしい。どこへゆくのであらう。おほかた向うの山から、彼方の山へ吹いてゆくのであらう。そして搖られた入口の大戸が何時までも泣くやうな音を立てゝ、靜かな暗の中に鳴つてゐる。その戸の鳴る音に私の幼い神經は倍々冴えて暫く眠られないことが屢々あつた。私は寒い暗い冬の夜長に山里を吹き荒んで通る風の音の心細さを、いつまでも忘れることが出來ない。——

私はその風の音と母の今云つたことゝが寢覺めの心に沁みて暫く悲しさに胸が塞がつてゐたやうであつたが、それでも健かな子供の神經はそのまゝ鎭まつて、いつの間にか又すや〳〵と寢入つてしまつたらしい。私は、母親とゝもに養父の家から追ひ出された、可哀さうな男の子の夜半に私の家に來てその母のそばに坐つてゐることも夢現の間に聞かされたのみで、その後のことは知らなかつた。

そんなことが度々あつたが、甚藏がその後岡山の市街に出て別に商買を營むやうになつてから、あとは女房母子（おやこ）の者は狂人のやうな亭主が始終留守がちになつてゐるので結句水入らずの氣樂にその日〳〵を送つてゐた。

甚藏は一人で居られる人間ではなかつたから岡山の市街ではある料理屋の仲居をしてゐた女を早速女房にして置いた。私の記憶はその頃の事が最も明かである。甚藏は私の父と丸つちがひで、その時分が四十三四でもあつたらう。

中學校を退學した翌年の正月私は商業學校に入る志望で大阪に行つた。商業學校はその頃の私の目的の一つで、且つその方針は最も父の同意を得易い見込みがあつたので、中學校を退くにもその事を以つてすると、父は『それも可からう。』と云つてくれた。それで直ちに決行したのであつた。大阪に正月早々から三月の末頃までゐたと思ふ。勿論まだ東京を知らぬ時分であつたし、大阪では夢のやうに若い盛りの春三月を過した。それは今から二十六年の昔になる。その頃の大阪の市街を流れる大川の水は一層しにか今よりも綺麗であつたやうな氣がする。米俵や酒樽を積み重ねた三十石が泰平の御代を象るやうに、靜かに流れる水の上を往き交うてゐた。私は岡山の市から同じ志望を抱いで來てゐた同じ年頃の三四人の青年といつもその大川に短艇を浮べて遊んでゐた。寒い〳〵と思つてゐるうちに直き春が來て、生駒や六甲の山々が薄紫の霞を罩めるやうになると、大川の緣に立ち並んだ柳が淺黃色に萠えそめて、それが暖い春雨の降るごとに、見る〳〵繪の具を溶いて流したやうに靑くなつていつた。私はさうして遊びながらも勉强を怠らなかつたから、入學試驗には學科の方は優等の成績を以つて編入試驗にも

通過することが出來たが、體格が惡いと云ふのでいけなかつた。私は失望して、その日の中に行李を纏めて大阪から鄕里へ歸つてしまつた。梅田驛から汽車に乘つてゆくと、丁度その時の私の心持ちとぴつたり合つてゐるやうに、陰鬱に曇つた春の天から濕つぽい春雨がしと〳〵と大阪郊外の菜の花の野面にふり灑いで、冷たい風が窓硝子の中まで吹き込んできた。緩い傾斜地の南の方に海の見える風光明媚の住吉御影あたりも今日は朦朧たる雨に煙つて、沖は灰色に搔き曇り、芭蕉が西施の悲むに譬へた象潟の雨の景もかくやと思はれた。六甲の山も深い煙雨の彼方に姿を密め、菜の花に降りそゝぐ雨の雫を拂ふ風力は凄しい勢ひで丈の伸びた麥の野に靑葉の波を揚げて吹き狂ふてゐる。淡路島も立ち騷ぐ波の彼方に雨に鎖されて見え分かず、沖に立つた燈明臺がひとり黃色に混濁した波の中に搖まれてゐた。私は喪失した心を抱へて凝乎と其等の外景に見るともなく見入つて過ぎていつた。

岡山の父の處に歸ると、父は、私の大阪の方の事情を話して聞かしても別段何とも思つてゐなかつた。『さうか、それならそれでよい。もう何處へも行きなさんな。』と、いつたきりであつた。

私はそのまゝ父の傍にゐた。

甚藏はその頃父の營んでゐたある商店の方に勤めて、近い町に住んでゐた。歸つて間もなく私がそこへ遊びにゆくと、甚藏はゐなかつたが、今度持つた女房がゐて、

『宅は今ゐませんですが、……あなたは大將の若さんではありませんか。』

と、人づきよさゝうに云ふ。

『えゝさうです。』といふと、女房は、

『まあお上んなさいまし。あなたの事は宅からもよく聞いて居ります。昨夜もさう申して居りました。大將の處の若がお歸りになつた。そりやあ活潑なお方だつて。』

産れは備中の方の田舍から出て來たのださうであつたが、長い間藝者の出入する料理屋などにゐたので人愛想が好かつた。

『あゝさうですか。』と云つて、私は暫く上り口に腰を掛けてゐた。

父は不自由をも意に介せず、岡山では大抵男所帶でゐた。私のほかに私のすぐ上の兄が一緒

にゐた。そこは詰り兄の家にするつもりで差當り一軒家を借りて居つたものらしい。――その兄も死んだ、父も死んだ、甚藏も死んだ。私は死んだ人間の事を思つてみたいのであるから、此の追憶を書いてゐる。死を隔てゝ見る時、凡ての事と人と悉く詩となる。私は此の故に必ずしも死を厭はない。憎かりしもの、醜かりしものも一度び死の幕の彼方に、世に在りし頃の影を沒すると、其等の物が私には悉く點塵の醜さもなければ、憎しみもない、たゞ懷かしい、優しいものゝ如く考へられる。死を不淨として忌むは、永劫の唯一瞬間を占むるに過ぎない肉體の上について云ふに過ぎない。醜き肉體の消滅と同時に殘るものは淨化されたるその追憶である。況して感情の清純であつた少年時代に遭遇した人間の追憶は、取りも直さず清純なることは白紙の如き少年その人の創作である。私は、私の少年時代の腦裡に深く明かに印象を留めてゐる其等の人々の容貌風采、言語動靜、氣質性癖といふやうなものが、果して其等の夙に死んで去つた人間が彼等自身に固有に持つてゐたものか、或はまた私の少年の頭によつて主觀的に創造したものかさへ、そこに明瞭とした區別がないやうにも考へられるのである。

初めは父と兄とその甚藏と私と四人であつたが、後には父の古い親戚の者である不幸な中年の婦人を呼んで家事の世話をさしてゐたこともあつた。その不幸な婦人についても私は明かな印象を殘されてゐるけれど、今は追憶が多岐に亘るから強いて割愛して置く。――その婦人は暫らくゐたが、人が好いばかりで、父や甚藏などゝいふやうな日常の事につはても氣の早い人達には間に合はぬといふので、終はどうして歸つたか、遂に歸つてしまつた。そのゐる處はやつぱり市中で近い處ではあつたが。

その婦人の事は今割愛すると云つたが、私は、やつぱり少し書いて置きたいと思ふ。その婦人は父の家の舊い本家の人間の妻であつた。その本家の人間の一生がまた私にとつて一つの悲しい謎である。その人間は父とはもう大分血緣の薄くなつた從兄弟の關係であつたが、何代の昔から前後に隣りしてあつた本家分家の仲であつた上に、父は幼時から男にも女にも兄弟のない、そして父親にも早く別れた人であつたから、父とは十歳ぐらゐ年下のその本家の倅を兄弟と同じやうに愛して大きくなつた。それは色の白い、薄紅味のある顏で、眼にたゝぬほどの痘

痕があつて、上品な靜かな物の言ひ振りや體の動作をする人間であつた。私の母は後によく云つてゐた。『お父さんには兄弟がなかつたから、それは本家の阿兄さんを、若い時から弟のやうにして、まあ、あのくらゐ仲の好い兄弟は本當の兄弟といつてもないくらゐであつた。』昔の人で筆蹟なども美しい古風なものであつたが、元はかなりな田地持ちであつた古い家の傳統を享けて生れたゝめに靜な人間であつた代りに性質が善良過ぎてゐて、若い時から種々な事を企てゝは毎時も失敗ばかりしてゐた。後には九州のある島に去つてしまひ、何をしてゐたか故鄕にも十幾年ぶりかに一度歸つたきり、遂に歸つて來ず、最後は九州の方でも好いこともなかつたと思はれ、鐵道も通じない山陰道の方の、ある田舍の村役場から行路病者となつて土地の避病院に入れられ赤痢のために敢えなくなつたといふ通知が原籍地なる鄕里の村役場からその本家の實の弟の處へ屆いたのはつい數年前で、私の父が死んでから既に二十年も經つてからの事であつた。死ぬる近年までは、それでも一年に一度の年賀狀だけは父の相續者たる兄の許へ越してゐたが、後にはそれさへ越さなくなり、偶に何かにつけて聯想がふいとその人間の上に及ぶ

と、

『この頃あの人間はどうしてゐるぢやろ。』

といふ、まるで、もう遠い夢の中の人のやうに思ひ出されるくらゐのものであつた。そして何か夢のやうな不確實な事を目論んで實行も出來ず、實行仕かけても直ぐ失敗する人間の代名詞のやうにその人間の名が嘲笑的に屢々私の兄によつて用ゐられてゐた。そして向うの村役場からの通知狀によつて最後に何をしてゐたかといふ謎が始めて解けた。九州の方の島に行つてゐたのが後にはその地をも去り、終に賣藥行商人となつて風琴を彈きながら、鐵道も通はない山陰道の片田舍を村から村へと渡り歩いてゐたのであつた。死んだあとに遺された所持品は、たつたその手風琴が一提と銀貨入の中に錢が壹圓參拾幾錢とあつた、それつきりであつた。

私が母からそんな事につけ折々聞かされてゐたのに、その人間がまだ二十餘りの時分であつた。その人間とは一つ年上で、又兄弟のやうに仲の好かつた甚藏。その二人が明治の初年、今の時節にかうして田舍に燻つてゐてはつまらないと云つて、まだ汽車の通じてゐない時分の事

彼等は村を飛出して、異人が來て神戸がそろ〳〵開けようといふ時分播州のある港から汽船に乘つて兵庫に行つた。その時丁度商用で大阪の方に上つてゐた父のところへ鄕里から知らせがあつて、二人の者を取押へて連れて戻つてくれといふことで、父は兵庫で心當りを探して若い二人の居所を突止めると、彼等は差當りの口過ぎに舟人足になつて石炭を擔いで船に積込んでゐた。父はそれを連れて村に戻つて來て、男泣きに泣いて彼等に强い意見をした。母はその事を話してゐた。話の面白い甚藏も時折りその事を話して笑つてゐた。

『それを思ふと大將の御恩は一生忘れられません、二人が眞黑な顏をして石炭を擔いで居るところを丁ど好い具合に見付けられた……』

父はもう二十餘年の前に世を過ぎてゐた。若い時分から眞の兄弟と云つてもないくらゐに色々な面倒を見たその人間が、後にはする事爲すこと悉く失敗に了つてしまうのは、單に運の惡いばかりでない、本人の根性に確乎した處がないのだと云ふことに見切りを付けて、父も後には蔭では冷笑を交へて彼の噂をするやうになつてゐた。殊に九州の方に行つてしまつてからは、

向うからは朝鮮の牛を輸入しないか、見込みがあるが、とか、昆布をどうしないか、と云ふやうなことを云つて來ても、父は其等の手紙を見たきり、

『彼奴の云ふこと何をかいふやら。』

と吐き出すやうに云つて、碌々返事も書いてやらなかつたらしい。そのうち父は死んだ。けれども口ではそんなに罵倒してゐた人間の事でも内心では父は決してそんなに憎んではゐなかつたに違ひない。その人間は人に憎まれるやうな處は藥にするほども持つてゐなかつたのだ。先きに死んだ父は、彼が思ふも哀れな行路病者として、もう六十幾つの老後を乞食同然な死に態をしたことは知らずにゐるが、私は、兵庫で船人足をしてゐた彼を連れて歸つて男泣きに泣いて强い說諭をした時の腹の中を想像して、今でも其等の事をふと思ひ浮べると父及び彼の爲に、私は靜かな暗涙を禁じ得ないのである。併しながら殆んど一生遠國に迷ふてゐた彼も死んだ後は再び故郷に歸つて來た。遺骨と、もに壹圓參拾幾錢の入つた蝦墓口とが、あちらの村役場から此方の村役場をさして送り屆けられた。そして今は、父と同じやうに墓石を竝べて先塋の傍に

土となつてゐる。佛說の輪廻の說が眞ならば、基督の說く天國の再生が眞ならば父と彼とは再び何處かでめぐり會ふこともあるだらう。さう思つて私は、生涯惱みの多かつた彼等のために心の中で冥福を祈つてゐるのである。

甚藏は、父がある事業を始めて自分も其處に使はれるやうになつてから、時々幼馴染のその人間の事を云ひ出して頻りに懷かしがり九州の方へも手紙を書いて、歸つて來て昔のやうに父の傍にゐて共に仕事をすることを勸めてやつたが、その時も碌に返事を越さなかつた。娘の子の一人ある女房は岡山の實家の身寄りに殘して置いて行つてゐたので、父も甚藏も女手のない處から、その置き去られた彼の妻を不憫に思つて、父の處に呼んで家事の世話をさしてゐたのであつた。その時久しぶりに會ふまで私はもう何年か永い間その婦人を見なかつたが、いつも一身上にごた〳〵した事の持ち上る夫に連れ添ふてゐるお陰で、彼女はその時から顧みて十年ぐらいも前だつたらう、田舍の私の家へ暫く來てゐたことがあつた。その頃彼女はまだ三十前後でも

あつたか。草深い田舍の人間ばかり見馴れてゐる子供の私の眼にも、町育ちのその婦人が垢脫けがして美しく思はれた。いつも丸髷に結つて藍色と茶などの微塵格子の、襟のかゝつた着物に茶博多獻上の帶をよく締めてゐたのが眼に殘つてゐる。それが私の父を阿兄さんと呼び、母をお姉さんと呼んでゐた。私達はまた彼女をお姉さん〳〵と云つてゐた。私は、私の父母をめづらしくお姉さん阿兄さんと呼ぶ綺麗な人の出來たことが子供心にも賑かであつた。氣のさくい、よく氣の付く女であつた。それが、どうであらう。十年後に久振りで見た時には、これがあの女であつたかと思つたほど年を取つて、見違へるやうに汚くなつてゐた。十年前には、すらりとしてゐたと思つた背恰好が妙に猫背になつて婆さん〳〵してゐる。唯一つ十年前と變らぬのは、私の父を、やつぱり『阿兄さん〳〵』と呼んで、父に對しては素直で、飽くまでも敬ふてゐた。十年前に『阿兄さん〳〵』といつてゐた彼女には若々しい美しさがあつたが、今はもうその若さも美しさも彼女の顏や姿の何處からも跡もなく消え失せてゐた。異性に對して狡猾で、淫蕩で、その上口の惡い甚藏もその舊友の妻に對しては、自分の節制と愼みとからでなく、いくら

淫蕩な彼でさへ、放縱な心を唆る何等の眼を惹く點をも持つてゐなかつたくらい彼女は全く女としての艶を失つてゐた。そして甚藏は、彼女が臺所まはりの事を、何をしても遲鈍なので、蔭で『蛞蝓が錨を下ろしたやうなものだ。』といつて嘲笑してゐた。その比譬には、しかし父も贊成であつた。

『撫へば棒が折れる。揃ひもそろつた夫婦ぢや。』

と、父も笑つてゐた。甚藏も同意して哄笑を發してゐた。實際甚藏が敏捷で、狡猾で、多辯で、才氣喚發してゐるに引替へ、九州に行つてゐる彼の舊友は遲鈍で、温順で、寡默で、靜かな人間であつた。

私がまだ其處から中學校へ通つてゐる時分であつた。甚藏もまだ此方で、その內緣の女房を持つて居らず、甚藏とは年は十五六も違つてゐたが若い盛りの私の兄と二人は私の父の眼を忍んでは愉快な處を探し歩いてゐたらしい。そして、どうかすると今日は一つ陽氣にやらうかと云つて料理屋から口取りだの燒魚だの、甘い物を取つて酒宴を開いてゐた。それだけは父が道

を開いたのであつた。併し一度父が始めると、他の者は公許された如くやり出した。近い處に藝者屋もあるし、怪しい女を置いてゐる小料理屋などもあつた。そんな女は毎日家の前を通つて風呂にいつた。甚藏と兄とは表の店の間に坐つて道をゆく女の品評をよくしてゐた。顔を知つた藝者は聲を掛けて通つていつた。

一度父の留守の間に彼等は又酒宴を始めたが、酒があつて肴があつてみると、何かも一つ物足らない氣がして父の歸つて來るのを、戰々恟々で、とうどう藝者を呼んで來た。

徒戯者の甚藏は陽氣に哄笑を發しながら、

『鬼のゐない間の洗濯ぢや。やらう〳〵。』

父も藝事は好きで、淨瑠璃は素人にしては巧い方であつたが、甚藏も騒がしい聲でよく語つてゐた。兄はまた天禀の美音を持つてゐて、後には淨瑠璃の稽古をして、多勢の前に出て語つても素人ばなれがしてゐるくらゐになつたが、その頃はまだ若かつたけれど、流行歌を、なんでもござれで歌ふのは好きであつた。甚藏と兄とは、父のいつもゐる座敷に酒宴を開いて其處

で藝者に三味線を彈かして好きな物を歌つたり語つたりしてゐた。私もそこにゐて、口取りの金團や蒲鉾を食べて悦んでゐた。酒の好きな丁稚の仙公だけ詰らなさうに店番をしてゐた。例の本家のお姉さんだけは一人で最初から氣をもみ、

『阿兄さんの留守に可いんですか？』

と云つて、不安な顔をしてゐたが、甚藏は氣を咎めながらもやつてゐた。少しすると、彼等が好い氣になつて燥いで歌つてゐるところへお姉さんは爛德利を持つて來たついでに、

『もういゝでせう、もういゝでせう。』

と面白くない顔をしていつた。そこにゐる若い二人の藝者が變な顔をして三味線の手を止めたりした。

『あゝ〳〵』と、甚藏は生返事をしながら、『まだ鬼は歸つて來ん。もう少しくらゐは好い。』

といつては、語つたり歌つたりしてゐた。

後にはお姉さんが、顔を顰めて賴むやうに云ひ出した。

『もう〳〵これで宜しい。あんまり長うなると、却つて面白くありません。どうぞ甚藏さんこれだけでお仕舞にして遣あさい。』

彼等はそれでも容易にもういゝといはなかつた。私も、もつと愉快をつゞけたいと思つてゐた。するとお姉さんはまた座數に顏を出して、

『もう宜しい〳〵。阿兒さんもうお歸んなさる。』警告するやうにいつた。

それで遂々歸したくなかつた藝者だけをかへしてしまつた。藝者さへゐなければ、酒宴だけなら父が開祖であるから、父が歸つてきても別條はなかつた。藝者をかへして箱を形付けてしまうと、それと入れちがひに父が戻つて來た。父が座數に入つて來ると其處には酒盛りがはじまつてゐる。父はそれを見るといゝ機嫌で、

『ほう、やつとるな！』

酒と放歌とで昂奮した顏をした甚藏は、

『今日は休日で一杯やつてゐます。』

『偶には好かろう〳〵。詰らん處へ遊びに行つたりするより御馳走だけなら錢はかゝらん。』

といひながら、父はお姉さんに手傳つてもらつて着物を着更へて、

『どれ、そんなら御馳走にならうかの。』

甚藏も、兄も、お姉さんも氣もない顏をしてゐたから、父は、自分と入れちがひに、今までそこに坐つてゐた藝者が歸つていつたことは夢にも氣付かなかつた。父は丁度年頃の兄が惡い處へ足踏みをしないかといふことが一つの氣づかひでもあつた。

そのお姉さんが歸つてから當分また男ばかりで不自由をしてゐたところへ、油斷も隙もない甚藏がその內緣の女房を拵へて近い處へ家を持つた。その女は、飽くまで堅氣の上に世路に窶れてゐる例のお姉さんと異り、それより十ばかりも若くて仲居などをしてゐた女だからよく氣が付いた。

『大將が不自由だから時々いつて見て上げ。』といふので、甚藏の此度の女房は時々來ては洗ひ物をしたり、拭き掃除をしてくれてゐた。

私も一度そこへ行つてから、後には度々遊びにいつた。私はたゞ遊びにいつたのだが、父の店にゐる若い者が誰れも彼もよくそこへ行つてゐた。遊樂者の甚藏に仲居をしてゐたその女房。そこは若い人間が集つて來るのに最も都合のよい處であつた。――その年の秋の終りに父が死に、尙ほ一二年して甚藏が父の店にゐなくなつた頃には、私も其地にゐなくなつたが、その女房は肺病で亡くなつたといふことであつた。甚藏は更にまた他の女を內緣の女房にして置いた。そして岡山の市でも遂に面白い目も出ず、やつぱり生れ在所の村へ引上げて戻つて來る時に先の連れ子をした少しの落度のない本當の妻は何かの因緣を付けて叩き出してしまひ、その後へ街で一緒になつた內緣の女房をつれて戻つてきた。それは私が鄕里にゐなくなつてからの事で二三十年間に亘つての事である。その甚藏も十年ばかり前に死んだ。――

兄はその年の夏の初、懇望する所があつて、その市から近い處へ養子にゆくことになつた。父は五人の子を、それ〴〵形附けるために常に心を勞したのであつた。養家の樣子を見にゆく時

にも甚藏は父の代理をした。

『髮は少し薄いやうだが、惡い器量ぢやない。あれなら上等です。』

といふ報告を訊きながら、父は、

『髮の薄いくらゐ、禿でさへなければいゝ。』

その他、人手を以て血統の事、親戚の關係、身上の事など訊き合はして、『そのくらひならばまあ可らう。』といふことになり、愈々向う側の媒介者が最後の決答を求めて來た時に、父は

『遣はしませう。』

と、確答を與へた。その時傍には私がひとり居た。市から半里ばかり距つた市外の養家で婚儀や披露の酒宴があつて、あとは市の父の處で新夫婦は住むといふ條件であつたから一週間ばかりで兄夫婦は此方へ戻つて來た。その時父の座敷で親しい十人ばかりの客をした。甚藏は萬事の膳煎役であつた。

それからすぐ蚊の多い暑い夏が來た。父と私とは早くから蚊帳の中に入つて横になつた。私

は寢這ひながら八犬傳や經國美譚を熱心に讀んでゐた。父の苦しい咳嗽が腸を斷つやうに私に響いた。兄夫婦は中一つ置いた次の間に靑い蚊帳に寢てゐた。

私は九月の初めに父にも誰にも無斷で東京に行つた。そして三月めの十一月の二十三日に電報に接して、その夜の汽車で東京を發して戻つて來ると、父はもう死んでゐた。兄は結婚生活を滿十年過したゞけで、後にアメリカへ行つて客死した。兄の死後も、本家の賣藥行商人と同じやうに唯一壺の骨となつて歸つて來たのであるが、彼等の記憶は冷い一壺の骨の灰を以ては說明出來ないくらゐに鮮かに私の腦裡に永く生きてゐるのである。（九年三月廿九日）

老若

祖母の三十三年、父の二十七年、次兄の二十三年を延期したり繰り上げたりして此處で一度に弔ふといふ案內があつたので、私は暫くぶりで四月の末に京都から鄕里の方に歸省した。もう二十幾年といふもの私ひとり鄕里とは遠く懸けはなれた東京の方に暮してゐるので、可なり親戚なども多く大抵近いところに生活してゐるので、平常の往來なども頻繁で、親戚相互、身內の者の噂や、生死、嫁娶その他人の身の上につゞいて起つて來るいろ〳〵な出來事などが彼等の間には一つの世界を成り立たしてゐるのであるが、私ひとりはさういふ世界から自然遠ざかつてゐた。けれども私に最も肉緣の深い其等の過去の人達の年忌には、平生、段々遠くへ過ぎてゆく歲月とゝもに忘れがちになつてゐる其等の人々の記憶をせめてさういふ機會に思ひいで、

追憶にふけつてみたいのが私の志であつた。それゆゑ東京にゐても、近年はさういふ年忌の際にはなるべく歸省するやうにしてゐるのである。それに一つは、母が八十に近い老齢なので時々行つてみたいといふやうな都合から京都にゐると、遙々東京から出掛けてゆくよりも時間が十二時間位は短縮されてゐるわけである。

私は長閑な春の播磨路の野山を五時間ばかり汽車に搖られて、午過にはもう播磨と備前との國境の船阪山のトンネルを向うに通過してゐた。そしてトンネルを出はづれると近年煉瓦製造の工業地として繁昌してゐる三石驛で、三石の一部落に姉の家があつて、高い鐵道の下にその家が見えてゐる。私は毎時汽車の窓からその姉の家の裏側を見下して往來するのである。その日も此處の家からも誰れかゞ法事にゆくであらうと思ひながら見てゐたが、誰の影も見えなかつた。姉とは二十日ばかり前娘と婿の夫婦と一緒に京阪から伊勢路の方を見物し、その歸途に京都の宿に泊つてゐる時に私は會つた。昨年の春も丁度その頃やつぱり曾祖父の五十年忌があつて東京から歸つていつた時には姉も來てゐて會つてからまる二年ぶりで會つたのであつた。京都で

はその時三人づれで私の宿に訪ねて來てくれたのだが、生憎私がそこらへ出てゐて留守だつたので、その夜私は姪の夫が紙切れに書置きをしておいたのをたよりに七條の停車場近くの旅人宿に訪ねていつて三人に面會した。女連は丁度夕飯の箸をおいたところで、酒の好きな姪の夫がまだ膳の上の物をつゝきながら酒盃を離さずにゐる處であつた。私がまだ夕飯前だつたので姪の夫は女中を呼んで客膳を命じて序に酒の熱いのを持つて來させたりして好い氣嫌になつてゐた。彼はもう私と同じくらいの年輩で相當に教養のある氣の好い男であつたが、肥料の卸しなどを近頃可なり手びろくやつてゐるらしかつた。

『エスさん此の頃大變儲かるといふぢやないか。』私は盃を返しながら戯談のやうにいつた。

『えゝ、儲かりもしませんが、商買もこれでなか〳〵面白いもんです。』といひながら、彼は好い氣嫌で手酌をしてひとりで飲んでゐた。

『かうして二人で方々遊んで歩くところをみると、私には何にも分らんけれど、おほかた儲かるのぢやらうと思はれる。』

姉は傍からさういつてゐた。姪の身體が虛弱なせいか、彼等には子供がなかつた。

話は此度見物して歩いた處の事から、それからそれへと擴がつていつた。大阪にゐるエスの從弟の處を訪ねて一緒に浪花座を觀たこと、其日返へりに從弟達夫婦多勢で有馬にいつて温泉に入つたこと、大阪に二た晩泊つて、翌日電車で奈良にいつてそれからすぐ伊勢參宮をして昨夜は大津に泊つて三井寺や石山寺を見てまはつて今日早く京都に來たのであつた。

そんな陽氣な話が一とゝほり盡きると、姉はふつと私の方を見て、

『それよりワイが死んでなあ。』

と話しかけた。

『あゝさう。ワイが死んだ。』私もすぐ姉の心を察して、同情のある聲を發した。

ひとりワイばかりではない、姉の家では近年度々死ぬ者がつゞいてゐた。その時も姉は十年の間に八人とか九人とか死んだといふはなしをしてゐた。舅姑の祖父母は順序であつたが長男の嫁、次男の嫁、長男の子が一人、次男の子が二人、自身の連合ひが四五年前に五十六で死に、

去年の二月にまた三男のワイが二十九で亡くなつた。その中で長男の嫁と姉の夫と三男のワイとはいづれも明かに肺結核であつた。血統からいつてもさういふ病氣は出來さうもないやうに思はれてゐたが、いつとなく忌むべき病魔に姉の一家は襲はれてゐた。

とり分け三男のワイは中學校時分から、なか〳〵秀才で、どこか性質に野太いところもあつたが學校はよく出來る方であつた。中學校を卒業してから東京に出て外國語學校のマレイ語科を修めた。私は彼の學問の傾向から判斷して大學の法科をでもやることを勸めたのであつたが自分で志を立てゝゐて南洋にゆくのだといつて、その方をやつたのだ。しばらく私の家にもゐたことがあつたが、後には外へ下宿して、學校を卒業してから神戸の方のある汽船會社に勤めて濠洲の方へ二度ばかり航海したといつてゐた。尤も私は今のやうに、その頃も一年ばかり京阪の方へ滯在してゐたので、彼が外國語學校を卒業する時分から毎時かけ違つて逢はなかつた。死ぬまで逢はなかつた。が、噂だけは偶に鄕里へ歸つた時などに聞いてゐた。どういふ事情であつたか南洋へは二度航海したきりで會社の方は止めて主に大阪あたりにゐたらしかつた。その頃

まだ生きてゐた彼の父親や兄などが心配して折角學校を卒業して校長の周旋で就職した地位を自から棄て、大阪あたりに轉々してゐるのをやかましくいつてゐるらしいことも私は耳にしてゐた。學生々活からつゞいてさういふ俸給生活に入つていつた經驗などのない田舍の父親などの考ばかりでは分らないから私も都合よく會へる機會があつたら一度會つて事情を訊いてみたいと思つてゐるうちに父親はさういふ病で死んだ。その頃ワイ自身からも彼の兄からも手紙を越して何か好い就職口はないだらうかといつて、私のところに頼んでよこしてゐたこともあつたりして、會つて委しい事情を訊いてみねば分らないが、南洋は面白かつたぢやないか。最初から自分で志を立てゝその通りにいつた、それを止すやうぢや私の方からどういふことを希望に抱いてゐるのだか判斷しかねる。支那へでも朝鮮でもアメリカへでもゆく處はあるぢやないかといふやうな返事をやつておいた。

それからまた二年ばかり立つて一昨年の春歸省した時にワイはやつぱり大阪にゐるが身體が良くない、そしてそれは彼の父の病氣を傳へてゐるらしいやうな樣子であつた。それを聞いた

時ワイがそんな病になつてゐるかと思つて私は驚いたが、彼の父も身體は本來虛弱な方ではなかつたのだが、醫者は晩年殊に放縱になつてゐた深酒の爲に健康を害したのが原因であるといつてゐた。ワイも體格などは兄弟中で最も屈强に出來てゐた。南洋の方に行つたが事志と相違して、さうして失意の感を抱いて父兄の意に背き大阪あたりにゐて下宿屋に不如意な生活を送つてゐるワイが遂に父の病を繼承いでそんな貧乏くじを引いたのも、何だかそこに惡い運命のまはり合せがあるやうに、私には思はれぬでもなかつた。その時私の歸省を聞いて私を訪ねて話しに來たワイの小學校時代の友達である隣村のある豪農の息子は、丁度ワイが東京の私の家にゐる時分にその息子は早稻田の文學科に入つてゐて、やつぱり私の家に寄寓してゐたが、丁度ワイが私の家を出てゆく時分に、その息子は家の事情で學校を止めて歸鄕した。その時私を訪ねて來た息子はワイの話をして、

『ワイ君が南洋の航海を止められた事情も成程僕にお話しになつたので見ると、よく解るのです。ワイ君のお家では皆さんが、隨分誤解といつてはどうかと思ひますが――よくワイ君の

心持ちがお分りにならんから、一圖にワイ君がいけないやうに思つてお出になるらしいのですが、僕に語られた處によると、全く舟乘りなどには仕方のない、云はゞ破落漢のやうな者が多いんですからな。きいてみると、ワイ君などのやうに修養といふやうな人生問題などを考へてゐる人にはそんな仲間入りは出來ませんよ。』

その息子は、そんなことを私に向つて話した。さういへばワイはやつぱり文學などが好きであつた處を見ると、南洋などに出かけて男性的な企業などに從事するには適しなく出來てゐたのであつたかも知れぬ。大阪から一度越した手紙には大阪にゐて、そして(叔父)私のやうに文學がやりたいといつてセンチメンタルな事を書いてゐた。私はさういふ事をいふ親戚の青年(或は他人の子弟でも)の文學志望に對しては何時も反對を表してゐた。それは生活の危險を思つたからでもあつた。けれどもワイはやつぱり文學——廣い意味でいふ——にゆく人間であつたかも知れなかつた。彼は自分の心で自分の身體を食つた傾があつたらしい。

すると、去年の二月の初私は箱根にいつてゐる間に鄕里から來た手紙にワイがたうどう須磨

の病院で死んだ。二十九歳であつたといふことを書いてあつた。その時可哀さうなことをした、近いうち歸省するつもりであるから、しばらくゆかぬ姉の家をたづねて、度々の不幸の見舞をいはうと思つてゐたのだが、歸省するのが段々遲れて、歸つたのは夏の初めの六月であつた。その時は遂に會はず京都まで戻つてしまつたから、ずつと姉には會はなかつたのである。多勢の死んだ者の中で、ワイは彼女にとつて最も忘れられない悲しい追憶となてゐるのであつた。それは無理のないことであつた。彼女はワイが死んだ時のことをいひ出して、私に話してきかした。長男に二度めにもらつた嫁などに氣がねがあるので、家ではいくらいひたくつても堪えてゐるワイの追憶を彼女はそこで遠慮をせずに繰返へすことが出來た。彼女は、長男に二度目の嫁を貰ふ時に三男のワイが頻りに懐しい家庭に歸つてみたかつたことや、臨終の場に肉身の者がだれも傍に附いてゐてやらなかつたといふやうなセンチメンタルな話を繰返へしてゐた。

長男の婚禮の時に歸つてみたいが、どうしようかといふ手紙を越した時に彼女は、歸りたがつてゐる病身の息子を現在の自分の家に歸つて來るなといふことも云へず、歸つて來させたさ

は腹一ぱいであるが、長男の心の内を量りかねて何といつてよいか分らなかつた。そして長男の心まかせに委ねた。長男も弟の心や母親の心の内を思つて無下に歸りたい心を拒むこともできなかつた。殊に先の嫁が同じ病氣で死んだ後なので二度目に迎へる嫁については特にさういふ忌はしい聯想や不愉快な危惧から、すつかり別な新しい世界に入りたいのが母親やその子達の希望であつた。誰れの心も此度の再婚を回轉機として一家が幸福を招徠する新紀元を開かねばならぬといふことに存してゐた。長男の心もさうであつた。彼の母親の心もさうであつた。母子はワイの心に任せて歸郷を快諾するかどうかといふ點について胸を痛めて相談をした。

『私は、ワイが歸りたうてかへりたうてならぬのも知つてゐるし、さうかといつてエー（長男の名）が私やワイに對して、歸すことはならぬとも思ひ切つてよういはず、その心の内を知つて見れば、歸さしてやつてくれとも私はよう云はず、ほんとうに腹を傷めた。』

姉はそんなことをいつて、センチメンタルな話しをつゞけた。

私は默つて聞きながら、なるほどゝ思つてゐた。

「そして遂にかへらなかつたのか。』

『それで私は、エイに、私はどちらでも好い。お前が歸るなといつてやつても、お前を怨まず、また歸れといつてやつて、かへつて來ても何とも云はぬ。そこはお前のかうと思ふやうに計らつておくれ、といつてエイの考にまかしてしまうた。エイも餘程その時はつらかつたらしいが思案に餘つて居つたらしいが、委しい手紙を書いてやつたやうであつた。……たうどうそれで戻らなんだ。』姉はさういつた。

『さうか、可哀さうだが止むを得ぬ。どうもあの病氣に罹つたが最後常人の運の惡いのだと思つて遠慮をするよりほかにない。』私は定まれる家もなくして長い間旅の空に漂浪してゐる自分の身の事を考へ、そして私よりは十五六年も年若くして夭逝したワイの薄命をも考へて見た。

『それにしては、この私は案外に長命をしてゐるねえ、幼い時から、とても遠くへ出掛けて不自由な暮しをして活きてゆかれる人間ぢやないと思つてゐたのだが。』

『叔父さんの身體とワイの體とはまた違ふてをつた。』

酒で好い氣嫌になつてゐるエヌは傍から口を入れた。エヌはそんなことをいつたが、ワイは私などよりは遙かに强壯な體格の持主であつた。

『その代りエイも、ワイに手紙でもさう書いてやらし、ずつと惡うなつて私とエイと二人で須磨の病院へ見舞にいつた時にも、金はなんぼ入つても構はんから、その事はすこしも心配せんようにして養生をせねばならぬといふて、エイも金は何時も不足のないやうに送つてくれた。』

姉は、傍に訊いてゐる者に話すよりも、今まで何度も人にも話し又自分でも繰返へして思ひ浮べたことを、またおさらひして、じつと思つてみるために語るといふやうな調子でいつた。けれども私は、それを何度人に語らうとも、當分の間は、さういふ心持ちから全然忘れてしまうことの出來ぬのは無理もないことだと思つて默つて訊いてゐた。

『須磨の病院へ入るのが、自分では厭でいやで爲樣がなかつたのを、騙すやうに嫌かして入らしたのぢやさうぢや。』

大阪にゐる間は、東京の母校の校長の周旋で其地のある大きな商會に附屬してゐる外國語學

校の教師をして小使ひとりをしてゐたのだが、それも病氣が重くなつてから、自分の健康にも障るし生徒の爲にもよくないといふので、その方は休職になつてゐたが南洋語を敎へてゐたある金滿家の息子がひどく同情して肉身の者も及ばぬ心配をしてゐた。遂々病院に入らしたのもその人間が切に勸めて入らしたのであつた。

『まだ大阪に居る時分に此の冬は鹿兒島の櫻島にゆくつもりだといふから、何處でもお前の好きな處へゆくがいゝといつて、エイも金はいくらでも送るからといつてやつて、いよ〳〵ゆく時にはさういふから、その時金を送つてもらうとワイから云ふて來てゐたのに、何時までたつても、ねつから金を送つてくれと云ふて來ぬと思つてゐると、須磨の病院へ入つてゐるのぢやつた。』

須磨の病院へ入つてからは次第に病勢は募る一方であつた。その時母親は兄と伴つてワイを見にいつた。けれども病人はまだなか〳〵自分では死ぬるものとは思つてゐなかつた。それでも病氣のことはよく知つてゐて、兄にも母親にも自分から制してあまり傍に寄りつかせなつた。

病院に泊ることもさせなかつた。母親は病氣を恐しいとは思はなかつたけれど、悴達のいふとほりに病人の體や衣類にさはつたりすることを避けてゐた。彼女にはそれが何時までも追憶の種になつてゐた。宿に一晩泊つて翌日また見舞ふて、いよ〳〵歸るといふ時に『そんならもう歸る。大事にしなさい、惡かつたらまた直き來る。何にも欲しい物はないか。』といつて、病室を出る時に最後の別れをいふと、病人は何にもほしいものはないといつてゐたが、いよ〳〵病室を立ち去らうとして振顧つてみると、ワイは寢臺の上に這ひ伏つて聲を忍ばせて泣いてゐた。

彼女にはそれが今でもあり〳〵と眼の底に膠着いてゐるのであつた。そして十日ばかりして急に惡くなつたといふふ電報が來て、此度行つた時にはもう死んでゐた。若い深切な看護婦は臨終の模樣を委しく話してきかせながら、

『このとほり靜かに眼を瞑つておいでなさいます。』

といひつゝ顏に被ふた白い布をとり除けてみせた。

『それでも私、どなたも御肉身の方がひとりもお出でになりませんので、ほんとに御病人がたよりなさゝうで傍についてゐてお氣の毒でございました。』

看護婦はさういつて、親や兄弟のあまりに思ひ分けのいゝのを薄情がるやうにも感心するやうにもいつた。家に健康でゐる他の悴達の後々の事などを思つて、死ぬる者には可哀さうだと思ひながら、なるべく病人に接近せぬやうにしてゐた彼女の心では、その看護婦と、ワイが南洋語を教へてゐた金持の息子とで肉身に代るほどの深切を盡してくれたことが忘られなかつた。

ワイの臨終の際に傍に附いてゐたのはその二人きりであつた。

いよ〳〵息が切れる時にワイは仰けに寢ながら、看護婦に

『僕はもう眼が見えなくなつた。』

と、いつたさうである。それから間もなく死んだ。

私はもう此の上姉の、ワイの臨終の模樣や、東京にゐて外國語學校に通つてゐた時分の風貌

などを、明歴と私に思ひ起さしめるやうなセンチメンタルな繰りごとを言はせたくなくなつた。

『そして明日は京都を一日見物する豫定なのか。』

新聞の夕刊を女中に持つて來させて相場表などを見て歸國を急ぐやうな口調でゐたエヌに向つて、私は話頭を轉じた。

『え、歸れたら明日の午後の汽車でかへらうと思つてゐます。』

『ぢや、おねえさんだけ、どうだ。私のところへ來て泊つて一人殘つて、もつとゆつくり京都を見物(けんぶつ)しては。去年からの約束ぢやないか。』去年も手紙の往復では京都から大阪奈良の方を案内したり、してもらつたりするやうな相談だけをしてゐて、遂に果たさなかつた。けれども、う歸途の二等切符まで買つてゐるのを無駄にするのがつまらないといつて、明日の豫定は相談が纏らないまゝで私はそれから暫く話して自分の宿に戻つてきた。翌日立ち寄るかとおもつてゐたけれども寄らなかつたと思はれて、それつきり訪ねて來なかつた。

汽車はそれからも一つ中間にあるステーションを通り越して私の村の中を突切り、その次の私の降りるステーションの少し手前まで來ると汽車の窓から長閑かな春光の一面に漲り渡つてゐる田圃の道を三人づれの女が歩いてゆくのが遠くに見えてゐた。眞赤な長襦袢の裾を端折つてゐるのが人とほりの少い田舍道に浮き立つて眼についた。いかにも春闌の野景色である。と、思つて私は見てゐた。

やがてステーションに着いて、その近くに門屋の店を出してゐるエヌの家に立ち寄ると、先日京都で會つた姪がひとりゐて、

『あ、おかへんさい。今すぐ一と足先へオー市の連中が叔母さんとケイさんやエムさんの嫁さんをつれてエフへいつたばかりのところです。』

『あゝさうか。ぢや三人づれで此の先きの田圃を歩いてゐたのがさうか。』

『えゝ、それ〳〵。』

『ぢや、それに追ひつく處まで伸で急がう。』さういつて、私は店前に待たして置いた俥に飛

び乘つた。そこからエフといふ私の村までは一里ばかりの道であつた。

ォー市の連中といふのは、十二三年前にアメリカにいつゐるてて急死して果てた私の兄の遺族であつた。その時十二を頭に三人あつた男ばかりの子が今は成人して總領は去年の秋妻を娶り、次男はそれから一と月おくれて、親類つゞきの家へ養子にもらはれた。その若い息子の嫁達をつれて姑の母親がエフの村へゆくのであつた。私は先刻汽車の窓から見た春光の下をゆく華美な日傘を翳した赤い長襦袢の連中が私の甥達の若い妻であつたことを思つてゐると聯想は必然に十二年前の秋三十八歳を一期としてアメリカの果てゞ客死した兄の事に及ばざるを得なかつた。冷かな運命の手はまるで暗討ちを食はすやうに人の親、人の夫を一夜の内、一時間の内に死の世界に强奪してゆくが、その半面に於て、自然はまた强い無意識の力を以つて若い者を育てゝゆく。十二年は、過ぎた後から振顧つてみると思つたより早く經つた。先刻汽車の窓から見えた眞赤な長襦袢が十二年前にアメリカで、人の知らぬ間に急死して見出された父親の遺兒達の若い嫁であるといふのが私には夢のやうに思はれた。そして私は車夫に命じて春光の漲

つた野道を彼等に追ひ着くべく驅けさした。私は車の上に腰をかけて軟かい春の風に吹かれながら、何となく胸の迫るやうな心持ちがして熱い涙が流れてきた。それは早く死んだ者に對する氣の毒の感情であつた。それは清い涙であつた。やがてステーションにつゞく村落を通り越して、十町ばかりいつた時分に向うの村はづれを往く其等の女づれに追ひついた。

『おうい！』と聲を掛けて呼びとめた。

赤い長襦袢と白縮緬の長襦袢の三人づれの女は後を振顧つて車から降りる私を認めて立ちどまつた。白縮緬の長襦袢は死んだ兄の未亡人で、私と同年であることを私は思ひだしてゐた。三人の中では彼女だけが私を知つてゐるので、遠くから笑ひながら何かいつてゐる。彼女はもう二人の嫁の姑母らしい小型の丸髷に結つて、いかにも中年を疾に過ぎた年老いた婦人らしい樣子につくつてゐる。男と女の相違こそあれ、私もゝう彼女くらゐの初老の域に入つてゐるのである。田舍にゐる七十八の老母は、

『四十暮れといふことをいふが、お前はまだ眼は何ともないか。』

と、いつて訊くことがある。

『さうだなあ、眼はまだ何ともないが、今に老人の眼鏡が入るやうになるかも知れない。併し齒は大分惡くなつた。頭髮も大分白髮が出來た。』

『うむ、白髮は大分ある。』老母は何時だつたか、さういつて私の額のまはりを眺めたことがあつた。

私には白髮は案外に早く生えてきた。

丁度三十二になつた春の時分であつた。ふと左の額の上に私は五六本の白髮をはじめて認めて、老いといふことをはつと意識して哀愁の胸に迫るのを覺えたことがあつた。それは恰も洛陽少年惜顏色往逢落花長歎息といつたやうな心持ちであつた。その時私はこれから、まる五年ほど歸らない鄉里に久しぶりに歸鄉しようとしていよ〳〵出で立つ間際になつて立ちながら一寸鏡を見ると、今の白髮をはじめて自分の前額の邊に發見したのであつた。——世間の私に關する噂には、私がいつも鏡ばかり見てゐるかのやうに傳へられてゐるが、私は平常鏡をあまり見

ない方である。私は着物は、他人に見せようとてゞなく、自分で着てゐて氣持ちが好いから着るのだが、めかす爲に顏を鏡に映すやうなことは滅多にない。そんなにしなくつても親はさう醜い顏に私を生みつけてゐなかつた。髯などは殆ど自分で剃らない。人は大抵自分で剃刀などを用意してゐるが、私は母に『四十暮れ』といはれる此の歲になつてもまだ剃刀を備へておいて時々顏にあてるなど、いつたやうなおめかしをした覺えさへない。

六年前、學生々活を終つてまだ間のない時分に歸鄉して以來、その春の歸鄉までに私は可なりに生涯の苦艱を嘗めてゐた。白髮はおほかたその爲であつたらうと思はれた。田舍の家の緣側に寢轉んで暖い春の日を浴びながら、母は私の頭を撫でまはして、

『まだ白髮の生える時分ぢやない、これは若白髮ぢや。』

といつて、眼鏡をかけて私の額から數莖の白髮を拔きとつてくれた。——それも今からもう十二三年前の昔の春となつてしまつた。母が若白髮といつた私の額の白髮は、そのまゝ歲月とゝもにふえるばかりで、若白髮はもう若白髮でなくなつてしまつた。

私は元來體質の强壯ならぬ割りに不思議に眼は好い。若い生意氣さかりに、眼鏡をかけてみたいなどゝ思つたこともあつたが、今日までその必要はなかつた。そしてまだ老眼鏡を用ゐねばならぬこともないが、母の所謂『四十ぐれ』が今にも襲ひかゝつて來はせぬかと思つて、時々それが意識の表に浮び上つて一種の氣味惡い脅迫となつてゐるのである。

『えらい早かつたぢやないか。』

彼女は岡山言葉で遠くの方から聲をかけた。そこへ私は俥からおりて追い着いた。

『どこから？　東京から？』

『いえ、京都から。』

ステーションまで迎ひに出た作男が手荷物を擔いで附いてゐる。私もそれに荷物をくゝりつけて多勢で話しながら春の野道を歩いた。街道に沿ふた小川の水も暖かさうに春の日を浴びて土手の青草が蒸息れるやうに萠えてゐる。若い嫁達の赤い長繻袢も燃えたつやうに野邊を彩どつてゐる。私はまた胸が迫つて涙がにじんできた。アメリカに行つて煙のごとく死んでしまつた兄のことが聯想せられるのである。それは考へてみると、もう十五六年の昔となつてゐる。

『まあ御挨拶はどうでもいゝ。どちらが何方のお嫁さんです？』

私は春の野道を笑ひながら、さういつて振顧つて兄の未亡人に訊ねた。一同笑ひながら遲々とした歩みを更にゆるめた。

『これがケイの方です。こつちがエヌの方。』

といつて、姑母は笑ひながら教へた。ケイの方はもう先刻から、白い刺繡のある黑い蝙蝠傘を翳して顏を隱してゐた。

『これ、そんなに隱れんかていゝぢやないの。』

よく仰山に笑ひながら物をいふ癖のある姑母は賑やかにさういつて、道の眞中でさゞめいた。さういはれても頑强に黑い傘で胸から上の方を隱したケイの方は友禪の縮緬の長襦袢を着けてゐる。エヌの方はまだまゝで人見知りをせぬ子供のやうに青に白い蝶々を刺繡した傘をかざ

したまゝ物がいへないほど笑つて俯向いでゐる。眞赤な緋縮緬の長襦袢はこの方であつた。

若い者があんまり恥かしさうにしでゐるので、私はあまりじろ〳〵振顧つて見ないやうに遠慮をしてゐたので、どちらがケイの嫁どちらがエヌの嫁と、はつきり記憶するまでには、春の野道をもう大分歩いてゐた。途には清い水のせゝらぎつゝ流れてゆく小溝に沿ふた縄手があつたり、村と村との境に流れる川の堰の上を渡つていつたりした。ぐるりの山も遠くに濶けて麥の圃も白く霞を罩めて夢みるごとく長閑に煙つてゐる。

私は姑母と會話を交えながらも、時々蝙蝠傘の陰に顔を隠してゐる若い嫁達の方にも言葉をかけた。するとはじめ頑強に顔を隠したケイの方が返辭はエヌの方よりはテキパキしたそして最初は傘の蔭で口をきいてゐたのが間もなく後には顔をみせてきた。物をいふ聲もその方がいくらかませてゐる。

『いくつです？』

『どちらも十八。』姑母がいふ。

『同じ歳!? しかし二つくらゐは違つてゐさうだなあ。ケイの方が兄さんの嫁さんだけに年を取つて見える。』

『だれでもさういふ。』ケイの嫁がいふ。

『同じ年のわりに二つくらゐも古く見えて不服かね。さう見えて丁度いゝんだ。』

『さうでございます。それで丁度えゝんです。』姑母がいふ

道はそんな會話の中に涼しい藪蔭を歩いて小村の中を通つて、また麥圃の中を歩いてゆく。段々私達のゆく家に近くなつて來た。向うの青い麥の波の上に小い寺の屋根が見えて、白い塀の中から銀杏の樹が青く繁つてゐる。私達はその麥圃の中の小徑を傳ふて歩いた。

『こんなに束から西から一度に揃つてゆくと、家でもぴつくりするだらう。』

『またい、具合に一緒になりました。』

『先日ステーションのエヌが野谷の姉と京都の方へ來た時に、藤野の叔父さんは、もうお婆さんが親類まはりができんから、今年の櫻花見には自家で嫁品評會をする、いふて居られた。

といつてゐたが、此度はその嫁の品評會だ。』

『ほんとうに、お婆さんは多勢孫の嫁が見られる。』

『こんなに勢達の若いお嫁さんを見ると、私も嫁さんがほしくなつた。』

と、いつて笑ひながら振顧ると、若い嫁達はすぐまた蝙蝠傘で顏を隱してしまつた。小徑の兩側には菫、蒲公英、蓮華草などが黃や紅や紫の花を咲きこぼしてゐる。黃白の蝶々が道をゆく人とあとになり先になつて飛びむれてゐる。

と、見ると向うの田圃の畦に私達の兄が四つになる初孫を抱へて出て迎へてゐるのが眼に入つた。

『ほう、あそこに出てゐる、でゝゐる。』

『おうい！』

と兩方から聲をかけた。

春の日は廣い野面に滿ちてゐた。

老若續篇

一

内冷えといつて、いつまでも部屋の隅々に殘つてゐるやうな春の冷氣も四月の末になると軒端に迫る陽炎とゝもに蒸し暖められて、もう家の内には何處にも冬の名殘りを留めてゐない。晴々と開放された部屋々々には明るい春の光が隈なくさし込んでゐた。臺所や裏庭の方では俎板に響ぐ庖刀の音や、煮物をする匂が漂ふて隣家緣者の女房達や男連中が急しさうに立ち働くのも何となく陽氣である。

お祖父さんは持前の大きな聲を出して門の一町も手前から、

『そら、お姉さんが多勢來た〳〵！』

と、肩の上に抱きあげた初孫の榮坊を愛しながら、村の出口の田圃まで榮坊を抱いて出迎へた

O市の女客と一緒にどやどやと入つた來た。

この一家では今日から、二十年三十年前に死んだ昔の人達の回忌を營むので、方々の親戚から勤めの客がぽつ〳〵來着する時刻であつた。去る者日々に疎しといふわけでもないが、古人も五十年忌になれば朝は精進して暮は魚類になして謠、酒盛りといつてゐる。年忌とはいひながらもさういふ遠い昔に世を過ぎた人々に對する生々しい悲哀や追悼の情は、もういつしか苔蒸した寂となつてしまひ、今となつては唯其等の人々の系統を享け繼いだ多勢の若い人が位牌の前で賑かに談笑するのが、とりも直さず何物にも優さる手向草となるので、本當ならば秋冬の頃がどの佛にも祥月命日になるのを、かうして、餘所ゆきにも客をするにも雙方に都合のいゝ陽氣な晩春の頃に日を選んだのである。

それのみならず客の中でも今來たO市の女客は、姑のほか二人の若い嫁達は、いづれも初めての客なのでその一行が入つてくると、互の挨拶や會話などが入り亂れて明るい家の中が一入陽氣になつて來た。

『おゝおゝ、お出でなさつたなあ。』

お祖母さんは、さういひながら奥の佛壇の前から、四年前の中癇以來すこし跛になつた左の脚を引擦りながら出て來た。この家で現在最も年少の榮坊を基にして振顧ると、そのお婆さんは、榮坊の曾祖母で今年七十八の長壽を保つてゐるのである。今茲で三十三回忌に相當する榮坊の祖父さん達の、そのまた祖母さんは榮坊の曾祖母の姑にあたる人で六十七で世を去つた。今二十七回忌に相當してゐるのは、七十八の曾祖母の連合ひで五十四で亡くなつた。今茲で二十三年忌にあたるのは榮坊の實の祖父になるのであるが、それは榮坊の父が丁度今の榮坊と同じ四歳の時の冬二十九歳で夭逝した。今の榮坊の祖父さんはそれの兄で、二十七年忌に當つてゐる曾祖父には五人も子があつたが、今の祖父さんには子供が一人もなかつた。それで、榮坊の父を一人遺して二十九歳で死んだあと、その甥を自分の相續者にしたのであつた。今の祖父は自分に子のなかつたところへ榮坊が生れたので、その悦びは一とゝほりではなかつた。子供の五人もあつた先代の末子が今四十を三つ四つも越してゐるのだからこの家に呱々の聲を聽く

のは一代飛んでゐるから四十幾年振りに聽く一家繁榮の聲だといつて、どんなに喜んだか知れなかつた。それで四歳の榮坊と七十八になるお祖母さんは、この一家族を賑はす老幼の兩端なのであつた。

O市の女客といふのは、その曾祖母に五人あつた子供の四人めの息子が養子にいつて出來た孫の嫁達で、その息子はもう十二三年前に三十八歳で夭逝したのであるが、その時十二歳を頭に三人遺された子供ざ、今では成人して上の二人には去年の秋それ〳〵嫁が出來たのである。死んだ倅の養家ききへは曾祖母もまた脚の達者な時分には時々孫を見にいつてゐたが、中癇を患つてからは、僅か一時間ばかりの汽車の里程の處へも自由に往來が叶はなくなつたので、幸ひ二番めの孫が尾の道の方の養家先から若夫婦でO市の實家へ逗留にきてゐた折柄、まだ見ぬ孫の嫁達が見たいといふ曾祖母の希望で、この回忌に多勢でやつてきたのである。榮坊の祖父はもう先達てから、曾祖母の前で親類中の嫁品評會をするのだといつて、尚ほその他に曾祖母の一番上の子が娘で、それは今五十九歳になる好いおばあさんで、近い處に嫁してゐる。その

倅の嫁をもその時は連れて來さす筈にしてゐた。

二

明け放した春の座敷に居並んだO市の女客と祖母や伯父との話はいつまでも盡きなかつた。伯父さんと姑母とは、代る〳〵お祖母さんに若い嫁達のことをいつてきかせた。

『これが政吉の。こちらが鐵男の。』

『さうか。あんまり同じやうなから、間違へさうぢや。名は何とかいふたなあ。』

『どちらも菊いふんぢやらう。名まで同じやうな名ぢや。年も同い年ぢや。はゝゝ。』

と伯父さんは高い聲で笑つた。

『一人は菊惠、それから此方が菊枝。菊といふ字まで同じ字なのです。』

連れて來た姑母は伯父さんのあとを受け次いでお祖母さんに説明した。

『さうか。名まで同じ菊。年も同じ十八。』

お祖母さんはさういひながら、花のやうな孫の嫁をまじ〳〵と見てゐたが、

『同じ年にしては、政吉の方が一つか二つ大きう思はれるやうな。』

『だれでもさういふんぢや。』

伯父さんと姑母とは一度に聲を揃へて笑ひながら云つた。

『今も謙さんがさういふた。』

O市の連中は、汽車を降りてステーションからこちらへ來る途中で、やつぱり鐵男や政吉等の叔父にあたる謙吉が東京の方から久しぶりに歸鄕したのと一緒になつた。

『さうぢや、そんなら誰れの眼も同じぢや』お祖母さんはさういひながら、春そのものゝ姿のやうな、若い二人の孫の嫁を見てゐると、十二三年前に遠い外國へ行つてゐて三十八で死んだ三番めの自分の伜のことがぼいと浮ぶやうに思ひ出された。そして、ひとりでに眼瞼が熱くなつて涙が湧いた。

『志磨が生きてゐたら、どないに悅ぶぢやろう。親は死んでも子は育つといふが、そのとほ

りぢや。死んだ者は何にも知らずにゐるが、後に遺つた子にはこんな嫁が出來るやうになつた。』

お祖母さんには、十二三年前に亡くなつた伜の志磨次のことが新しい記憶となつて呼び覺まされて來た。

『志磨が生きて居ると、もう樂隱居ぢや。』

志磨次の兄にあたる伯父さんはさういつて、此度は膝の上に抱き上げた孫の榮坊を愛してゐた。

『えゝなあ榮ちやん、綺麗なお姉さんが多勢居つて何處のお姉さんぢやらう。榮ちやん知つとるなあ。どこのお姉さんか、いふて見い……O市のお姉さん。』

榮坊はお祖父さんに、放さぬやうに抱き上げられて、そんなに執固く訊ねられて、今まで見たことのないお姉さんの顏を見たり見られたりしてゐたが、いつまでもほかの大人と一緒にそこにゐるのに飽いて、早くお祖父さんの膝から放れたくなつて、祖父さんの膝の上で小い身體をむ

づ〳〵さしてゐた。榮坊は今日は不斷着を荒い銘仙の絣に着更へさせてもらつて、羽二重絞りの扱帶をしてゐた。

『榮ちやん！』と、若い嫁の何方からか聲が洩れた。

今まで挨拶のほかには、姑や伯父さん達の話を傍で聞いてゐるだけで、時々たゞ面羞さうにして笑つてだけゐた二人の嫁達は、やつと自分達の事から話が解放されたので、さういつて少しづゝ打解けた心持ちになつて來た。

『榮ちやん、さあおいでなさい。』

兄の嫁の方がさういつて兩手を差出した。

『あら、お姉さんが榮ちやんを抱いてやらうて。抱いてもらうか、好いなあ。』

榮坊は祖父の膝の上で、どうしようかと思案するやうな顏をしてゐたが、身體を動かして抱いてもらはうとする態度をしてお姉さんの膝の上に乘り移つていつた。

『いゝなあ、お姉さんに抱かれて』さういつて、祖父さんは漸く用事の方へ立つていつた。

『それでもさすがに女子には人見知りをせん。どうも知らん人には人見知りをするんぢやけえど。』

今祖母さんの胸に淡く滲んでゐた亡くなつた倅のことは、いつの間にかまた陽炎の如く消えて眼の前の曾孫や若い孫兒の嫁達の方に心を奪られてゐた。その時臺所の土間の方から、

『榮ちやん、お姉さんの着物の上に小用をせんようにせんど。』

と、いふ若い祖母さんの聲が聞えた。

『おゝ、小用をもうする時分ぢやないか。』

曾祖母は話に氣をとられて忘れてゐたといふやうに『どうもまだ小用をいはぬので困る。』

『するのは、つい先刻しました』土間の若い祖母さんからまた聲がした。

『まだ分りませんか。』O市の姑母さんはさういふ。

『どうもまだ、それをいはんので。いや、なか〳〵云はんものぢや。』自分の子供、それから孫、長い間何人と數の知れぬほどの幼兒を手にかけて來た曾祖母はいふ。

『どれそんなら一つおばさんがさして上げませうか。』

O市のおばさんは、さういつて榮坊を抱いて起ち上つて縁側に出た。そして『しいッ』と聲をかけて榮坊の小用を促した。庭には暖い春光が漲つて、前栽の嫩葉が庭一面に清々しい薄緑の蔭を翳してゐた。

榮坊が小用をさしてもらうのを機會にそこに坐つてゐた皆も漸く起ち上つて、此度は奥の床の間にしつらへた佛壇の前に入つていつた。床には釋迦如來を中央に、大日如來と阿彌陀樣の繪像が右左に懸けてあつて、蓋袱に被はれた佛壇の一番上の壇には中央に二十七回忌の――榮坊からいつて曾祖父の位牌が置いてあり、その左右に三十三回忌の、その曾祖父の母の位牌と、二十三回忌の、榮坊の本當の祖父の位牌とが置いてあつた。その下の壇の片方にはこの家に何代前からあるか分らぬ眞鍮製の龜の上に鶴の立つてゐる蠟燭立てに幽かな燈燭の火が、遠い冥府からの路を照らすかのやうに搖々と燃えてゐる。片方の天井から吊り下げられた古風な御輪燈には燈明の光が覺束なけに點つてゐた。そして一番下の壇には方々の親戚から供へたお供物

の菓子箱などが積み重ねてあつた。皆その前に行つてまたそこに輪になつて坐つた。佛壇の世話でもするよりほか何にも出來ぬお祖母さんは中瘋で自由の利かぬ手でO市から持つて來た菓子箱やお祖母さんの末子の謙吉が東京から持つて來た菓子などをまたお供物の處に載せたり、滅入りさうになる輪燈の燈心を搔き立てたりして佛壇の上の物を、あつちへ弄つたり、此方へ動かしたりしながらO市の亡くなつた倅の妻と何か斯か絶えず話してゐた。曾祖母の長男であるお祖父さんは、あちらの用事の方へ行つてゐるかと思ふと、時々座敷へ入つて來て少しの間話してはまた出ていつた。新しく羊羹を切つてお茶が入れかえられた。

家は百年ももつと前に建てた小い家にあとから補足して修繕した小い家であつたが、もう何年か前から幾度も模樣變へをして手を入れて石を多く使つた庭が、そこの縁側から見ると一層引立つて見えた。楓や樫の若葉が目覺めるやうな黄緑に萠えいで、、泉水のふちに川楊や菖蒲が洗つたやうな緑を着けてゐる。蒼い空にはちらくらするやうな春の太陽が輝いて、野良の方に上つてゐる雲雀の聲が一日聞えてゐた。

三

檀那寺には代々のお坊さんがいつも肺結核で死ぬので近頃は留守番の寺男がゐるきりで殆ど無住のやうになつてゐた。しかし曾祖母の甥が幼い時、もう何代か前住の弟子に所望されてその寺で修業して今は六七里離れた處の寺に住職をしてゐた。知らぬ他人の僧侶などに讀經してもらうよりも俗縁のあるその法印に來てもらふ方が却つて好ましいので當日は祖父には從兄弟にあたるそのお坊さんが來ることになつてゐた。

裏庭の料理部屋の方で精進料理の御馳走が出來上る時分になつて、長い晩春の日は遲々としてやうやく暮れそめて來た。いら〳〵暑いほど暖かつた氣温が幾分か和げられて、冷々した風と、もに家のまはりの菜園畑から物憂いやうな果樹の花の匂や、刻々に芽を伸ばしてゆく青草の香を吹き送つて來た。風呂が沸く頃になつて遲い〳〵といつてゐた從兄弟のお坊さんも入つて來るし、二里ばかり離れた親類から五十九になる曾祖母の娘も歩いてやつて來た。

謙吉は從兄のその僧とは殆ど記憶せぬくらゐ長い間會はなかつた。今から丁度三十年ばかり前のことである。謙吉は、父親やその從兄に勸められて、自分にはまだはつきりした意向を持たなかつた時分僧になるつもりでその頃從兄が坐つてゐた七八里離れた處の山寺に伴はれてゆかれてお經を讀む術を敎へられたり、習字の稽古をしたりしてゐたことがあつた。二た月ばかりゐて又父親の心が動いて寺から戻つて來たが閑寂な山の中に在るその寺の印象は、その後謙吉が段々成長して故郷の地を遠ざかつてゆくにつれて一層懷しい追憶となつて殘つてゐた。三十年の歲月は振顧つてみると隨分長かつたが、今になつて又その山の中に寂しく建つてゐる寺の隱遁的な生活が眞實の生活であつたかのやうに、動もすれば謙吉の頭の中に考へられるのであつた。必ずしもその寺とはいはないが、三十年前の記憶となつて彼の頭に殘つてゐるその寺の印象に似たものが何處かに彼の、今後の生活を休める場所として待つてゐるのではないかといふやうな氣もするのである。それは單なる空想として終るかも知れないが、さういふ心持の影を潜めてゐることもまた事實であつた。

『あんたとは隨分長いこと會はん……併し前とさう變つて居らんがな』

從兄の僧は微笑しながら、さういふ。

『いや、變らんこともありません。變つて居る筈です。あなたとはもう隨分長く會はないんですもの。前に居られたあの寺から戻つてから後も時々會ふには會ひましたが。』と、謙吉は頭の中で過ぎ去つたこと想ひ返へしてみながら、

『私が二十歳くらゐの時に會つて、それから一度も會はんのだから、二十三四年にはなりますが。……さういへばあなたもさう變つて居られんが。』

三十年前に二十四五で住職を勤めてゐた從兄の僧は今は五十四五になるのだが、大きな二重瞼の眼のまはりに皺が多くなつて、眼が以前よりは小くなつたやうに思はれるほかには、やつぱり若い時分の面影はそのまゝ殘つてゐた。

『いや、私は變つた。が、あんたは本當に少しも變つて居らんが何時までも若い。それに弱さうで壯健ぢや、どうも不思議ぢや、兄弟の中で一番壯健ぢやつた阿兄さんが二人とも若うて死

んで、弱い〳〵といふて居つた者ばかり三人殘つとる。さうぢやないか。……なあ、今もさういふとるところぢや兄弟の中で弱い者ばかり生存つて居る。』

お僧さんはそこへ入つて來た五十九歳になる從姉や曾祖母（僧の叔母さん）に向つてさういつた。

『いやあんまり壯健でもありませんが、まあこれまで生きてはゐます』謙吉はいふ。

『生きてゐれば壯健に違ひない。』

『内のお祖父さんは、まあそれは壯健です。』曾祖母は長男の倅の息災なことをいふ。

『うむ、壯健ぢや、あなたも壯健ぢやありませんか。』僧は從姉に向つていふ。

『へえ、まあ私の身體だけは今のところ達者でございますが、法印さん死ぬる者が後からあとから出來て困りました。』

『ほんにさうぢやつた。まあ、併しあんたは不思議に達者ぢやないかな。』

そこへまた入つて來た主人のお祖父さんは、もう幾日も髯を剃らない血色の好い顏をして、

『私は近頃壯健ぢや。去年の風邪も引かず、少し何處か悪いところがあつて寢てみれば好いといふくらゐに達者です。』

『ほんとにさうぢや。若い時はあんたも弱い〳〵いふとつたものぢや。それがそんなに壯健になる。』

そんな話が一と仕切りつゞいて座敷の隅々に夕暮れの色が這込んで來る頃になると、佛壇の御明しはまた明るくせられて、お僧さんの讀經がはじまつた。

夕飯が濟むと女客はみんな座敷の脇になるお曾祖母さんの部屋に寄り集まつた。そこには四月の末でもまだ炬燵が取らずにあつて、一同それへ集まつた。

夜に入つて座敷の佛壇の間では二十人ばかりの村内の近隣緣者の集ひがあつて十三佛の誦名を唱へられた。蕭かなたゝき鉦の音に和して、安らかな假睡を誘ふやうな厭世的な禮讃の合唱には寂滅爲樂の響があつた。夜のお齋がはてゝ一としきり花の咲いてゐた同行衆の四方山ばなしがまた靜になつて、村の人々が退散して往く頃には春の夜も大分闌けた來た。

おばあさんの居間では五十九になる伯母さんとその義妹にあたるO市の姑母などが女ばかり炬燵を取り卷いていつまでも皆の思ひでばなしがはづんでゐた。五十九になる伯母さんは五六年經たぬ間に長男の嫁、それに出來た二つになる初孫、次男の嫁、それに出來た二人の子供、自分の連れ合、二十九になる三男。そんな多勢の死人が續いた不幸に傷けられた哀痛がまだ新しく胸に痕跡を殘してゐた。それでも、どうかすると面白い嫁達をよく笑はした。その伯母さんも、嫁品評會に連れて來る筈であつた長男の二度目の嫁はい嫁達をよく笑はした。その伯母さんも、嫁品評會に連れて來る筈であつた長男の二度目の嫁はある會社に勤めてゐる長男が俄に他行せねばならぬことがあつて、留守がないので嫁は連れて來なかつた。伯母さんは氣輕に面白いことをいつてゐるかと思ふと、死んだ者の事だの、それから家事經濟のことなどをそれからそれへと話した。

今から四十年ほど前に伯母さんが嫁していつたその村は、舊藩時代から石筆用の蠟石材の產出を以て知られてゐる土地であつたが、石筆などを用ゐぬ今日の時代になつては、その石材が耐火煉瓦の優良なる原料になるので、一時衰微しかけてゐた石材の採掘事業が近年俄然として勃

興して、耐火煉瓦の製造會社などもその附近に澤山出來、職工や坑夫が無數に入り込んで來て、以前村であつたその土地は人口が增加して町制が施かれるやうになつたけれども、その家の身代を肥した伯母さんの舅にあたる人は先祖代々不易の農を何よりも重んじてゐた人で、一徹頑固で通つたその老人が山林田畑をどんなに愛護してゐたかといふことは知つてゐる人間の間に評判なくらゐなものであつた。その老爺さんの簡單明瞭で、そして強い確信を以つて奉じてゐた經濟說は專ら實語敎一つに在つた。老爺さん自分の持ち山が常に自慢で、得意で、『山高きを以つて尊からず、木あるを以つて貴しとす』といふのが口癖であつた。倅の嫁——伯母さん——の實家や自分の娘の嫁してゐる緣家先きから客でもあると、いつも松の老木の鬱茂した持ち山に案內して見せて、それを誇りとし、そこに一家の幸福が保證されてゐることに滿足してゐたくらゐであつた。それほど山林田畑を愛護し、農業を尊んだ老爺さんだから、商工業は大の嫌ひで無資產の村の者などが薄資本を工面淦面して輕薄らしい商人の眞似みたやうなことをするものがあると、まるで吐き出すやうにいつて嫌つてゐた。そして息子や嫁に向つて常に、世の中が

どんなに變つても自分の一家だけは老松の鬱茂した山林と田畑とを子孫代々守護してゆくことを家憲のやうに言ひ遺してゐた。けれども今から十四五年前老爺さんが七十幾つかで安らかに死んでゆく時分から次第に盛になつてゐた其土地の工業は近年になつて一層繁榮になつて來た老爺さんが木あるを以つて尊しとすると自慢してゐた山よりも仕樣のない禿山で、老爺さんの眼には一文の價値すらなかつた山が優良な石材を含有してゐるので何萬圓といふ高價な價額で賣買された。昨日まで素寒貧で少しの信用もなかつた者が忽ちにして何千圓何萬圓といふ金を握つた。村の者は田畑で小作をしてゐるよりも工場へいつて勞働する方が遙に好い勞銀になるのでみんな其方へいつた。以前は百姓の片手間に石山を働いてゐた者がすつかり百姓を止めて工場の勞働者になつてしまつた。伯母さんが嫁してゆく前から二代も三代もつゞいて小作農をしてゐた者が耕作地を返へして來た。

『私の祖父の代から作らしてもらふて居りました田圃ですがら、私が死にましても、どうぞ又私の孫の代までも作らしてつかあさい。いふて、拜むやうにいふとつた者がこの間その田地

を返へしに來たがな。』

伯母さんは、そこまで話して來て、熱したやうな顔をして、聽いてゐた弟達の顔を見た。

『誰れかまた作る者があらう。』

『いゝや、なんであるものか、その人間だけぢやつた。村のほかの者がみんな石山へ稼ぎにいて好い賃銀を儲けて來るいふのを知つて居りながら、今まで百姓をして居つたのは。その人間が百姓を止めるくらゐぢやあから、もうよく〳〵の事ぢや。』

『困つたものぢや。まだ此の邊ではそんなことはない。』弟のお祖父さんはさういつた。

『それでその田圃はどうしてをる。』

弟の謙吉叔父さんが訊ねた。

『仕方がないから今までそのまゝにしてをる。六月になつて稻を植える時分になつて誰れも借り手がなかつたら、自家で日雇をしてゞも作るよりほかに仕樣がないいふとる。』

伯母さんはそれからまた、去年の洪水の爲に田地が二三段も押流されて白磧になつたまゝ

復舊工事をしようにも手が着けられなくつて、そのまゝに放棄してあることや、以前から餘り好くなかつた土地の人氣が工業が盛になるにつれて他國者が入込むうへに土地の者までそれに化せられて一層惡くなつてばかりゆくことや、小作人が年貢米を嚴重に持つて來ぬことや、借りた金を綺麗に拂つた例のないことや、少しも人間らしい人間がゐないので住み心地の惡いことなどを、それからそれへと數へて、

『いつそ岡山か神戸へでも行てしまはうかと思ふことがある。』

と、さも〳〵先祖代々の居村が厭はしくなつたやうにいふ。

『ぢやあからそんな土地や病人の出來た家は思ひ切つて行てしまうた方が好いと云ふのに。何も斯も賣つて、いつてしまひなさい。』

弟のお祖父さんは、一と口にさういふ。

さういはれると、それでも流石にそれを實行する氣になつて考へ直してみると、さう一と思ひにも出來なかつた。

『何も物がなければ却つてそれが出來るけえど、今でさへ山の木を盗まれたり、藪の竹や筍を取られたりしてをるのを、遠い處へでも行てしまへば、それこそ悉皆人にとられてしまう。』

伯母さんは、少し離れた處に持つてゐる竹藪が附近の土地の者に、恰も彼等の所有物のやうに勝手に竹を伐採られたり 筍 をとつて食はれたりして、此方から何かいふと反對に彼等に暴言を吐かれて、

『何ぢやい。誰れの藪か知らんが、此處に在るから、此處にゐる者が切つて使ふのが惡いか。惡けりや警察へでも何處へでも連れてゆけ。この間もさういふと、藪の傍に居る者の嬶がそんなことをいふた。竹を伐るのは吾れ一人ぢやない。此の邊の者はみんな切つとる、皆警察へ連れてゆけ。さういふことを云ふ。

『そんなことぢやあ、早くどうかしないと、折角お祖父さんの代から持つてゐた物を水に流されたり、人にとられたり、無くしてしまうぞ。』弟の謙吉は心配さうにさういふ。

先刻から姉の話を聞きながら炬燵に横はつてうと〳〵としてゐた祖父さんは、いつの間にか

快よさ〻うに鼾を立て〻ゐたが暫らくして、ふと自分で眼を覺まして、

『あ〻眠むたい。もう寢よう。』といつて、起き上つて曾祖母の部屋から出ていつた。

伯母さんの話はまだ止まなかつた、二十日ばかり前に娘の婿夫婦と奈良、京都から伊勢、近江の方へ遊覽にいつた時の話。その話をしてゐると、その時大阪で電車に乘つてゐて、ふと去年の二月に須磨の病院で二十九歳で死んだ三男に死ぬまで附き添ふてゐてくれた看護婦に出會つたことから話題はまた種々な事を話したり思つたりしながらも、胸の底ではまだどうしても忘れ切ることの出來ぬその三男の倅の若死したことに舞ひ戻つて來た。

『こちらは知らずにゐると向うで氣が付いたか、知らん女が挨拶をする思ふて、よう見ると、それは須磨の病院に居つた看護婦ぢやつた。』

伯母さんは、倅がいよ〳〵息を引取る時、傍に肉親の者は誰れも附いて居らず、たつた一人きりその看護婦が附いてゐて末期の水まで、その看護婦がひとりで死んだ倅の唇を濡らしてくれたこと。それから電報が來て、自分達が行つた時には、もう死んでゐて、その看護婦が臨終

の際の孤獨であつたこと、またその時の模樣などを委しく話して聞かしてくれる者はその看護婦のほかになかつたことなどを思ふと、倅の最期の事を知り、またそれを倅の追憶として、何時までも永く自分の胸に留めて置くには、その看護婦に話してもらふよりほかになかつた。さう思ふと、その看護婦のことは忘られなかつた。伯母さんは、京大阪の見物を果て、歸國する時には娘夫婦にさういつて、須磨を汽車の窓からよく見てゆきたいからとて書間の汽車に乘つた。須磨を通りながらあそこで倅が死んだのだと思つて、須磨の山の形を汽車の窓から見えなくなるまで見返へしてゐた。』

『あれには私も死ぬ前一度會つてみたかつた。いろ〳〵聞いてみとくことがあつた。東京の學校に入つてゐる頃、自分の處にもその姉の倅を置いてゐたことのある謙吉は、甥の存外早く死んだことを、姉の物語につれていろ〳〵思ひ出してゐた。

『何か知らん、澤山書いた物があつて。箱に入れて取つて置いたけえど、そんな物は置いとかぬ方がえゝといふからまた出して悉皆燒いてしまうた。』

『梓巫に何か云はしてみるといゝんだ。本當か嘘か、とにかく面白いよ。』

謙吉がさういふと、

曾祖母さんも、伯母さんも、自分がまだ漸く三十を出たばかりの時に夫に遠方にゐて死なれたO市の姑母も口を揃へて同意した。

『さうぢやあ、あれを誰れでも悪くいふけえど、まんざら嘘ばかりいふもんぢやないぞ。お前の處にいはすと、多勢いふ者がある』曾祖母は伯母さんの顔を見ながら笑つていふ。

『自家でもほかの者のいふことを訊いて見たいとも思はんが、××だけは訊いてみたいがなあ。』

さういふ伯母さんの言葉の終り際は忽ちもう鼻聲になつて、顫えて來た。

『私の處では一遍梓巫にいふてもらうたことがありますんですぜ。』さういつて、O市の姑母は、十二三年前アメリカで客死した自分の夫の死後近い處の市子に呼び出してもらつた時の事を話した。義太夫が上手で、彼地の日本人の間に評判になつてゐた時に、それより以前から上

手と評判されてゐた者が、自分よりもまだ上手な者がゐると知つて、自分の評判が抑さへられさうになつたのを含んで、ある日本人の歸國の送別會の席上、強い西洋酒を盛りつぶして、その爲に腦出血のやうな徵候を呈して急死したのだ。

『殘念ぢや、殘念ぢや。子供を大切にしてくれ、子供を大切にしてくれと、それを何度も繰返へしていひましたぞな。』さういひながら彼女も、義姉と同じやうに段々鼻聲になつてしまつた。曾祖母と三人は同じやうに鼻をすゝりはじめた。

『それ、××が死んだ時にお前の處で呼び出してもらうた時にも、××が生きていふとほか思はれんことを云ふたぞ。』

曾祖母は今日年忌を弔ふてゐる二十三年前に亡くなつた自分の次男の死んだ後娘の處で市子を招いて呼び出してもらつて訊いた時の事をまた思ひ出してゐた。遠い過去の事がそれにつけてまた思ひ返へされて曾祖母はまた一入鼻をつまらせた。三人の老いた女達は涙聲になつてそれ等の死んだ者のことを話し合つてゐた。傍に坐つてそれを聽かされてゐる若い二人の嫁には

それが遠い距離のあることのやうに思はれた。春の夜は次第にふけてまた冷くなつて來た。

（八年十二月七日）

小石川の家

私は今度東京に歸つたら小石川の方に家を持たうと思つてゐる。なるべくならば長く居馴れた牛込の方にゐたいと思ふのだが、京都の遠距離にゐて東京に借家を探すのに、そんな勝手なことをいつてゐてはとてもありはせぬ。幸知つた人が小石川の奥の方に今住んでゐて、四五月になつたら、そこが空くことになつてゐるので、その跡へ入らうと思つてゐる。

私が二十幾年の長い東京生活の六七分までは牛込で過されたが、あと三四分は殆ど小石川で送られたのである。それゆゑ小石川もなか〳〵古い馴染の土地である。そして私の精神生活に織り込まれた心の波の最も泡湧した時代はむしろ牛込時代よりも小石川時代の方に多かつた。小石川の丘や谷、林や人家や街筋は私の過去の心の生活の種々なる場合に常に芝居の背景や大

道具のごとき舞臺の裝飾となつてゐた。私の心に土用波の如き山なす波濤が崩れかゝつて來たり、陰鬱な空の下を、恰も白馬の奔騰する如く凄じい心の波の立ち騒いだ時も、或はまたその反對に絶えざる不安定の生活の間にも、やゝ心の小康を得てゐた若い日も、多くは小石川の高臺の上で過されたのであつた。私は、過去の胸の創痍を振顧つて思ひ見るに耐えない。私の過去は悉く不滿足である。少しも樂しく過されなかつた。いつも不安と焦躁に充ちてゐた。多くの人はさうではなからう。何故自分がさうであるのか自分でも解らない、もし、これから先もその通りであつたならば、最早自分はそんな苦惱に充ちた生存を續けてゆきたいとは思はない。自分はどうかしてさういふ本體の分らない苦惱から少しも早く解脱したいと思ふ。

さういふ不安と焦躁に惱まされ苛まされた私の過去は殆ど小石川の丘の上で過されたのであつたことを思ふと、今度またその小石川の奥に居を卜しようとするにつけても、過ぎ去つた色々の事が自から新しく回想されて來る。今度の小石川の住居はさういふ意味で特に選定したのではない。偶然にさうなつたので、今東京を離れた京都にかうしてゐても、牛込ならば何と

なく故郷に歸るやうな氣がするが、小石川はそんなに思へない。むしろ過去の心の創痍を、われと觸つてみるやうな氣持がするのである。それにもかゝはらず小石川のあの丘や溪や草野原などは、私の二十代のおはりから三十代の終まで、人間の最も精神力旺盛であつた時代の精神生活から取り除くことの出來ないまでに、私の過去の心の歴史の中に血液となつて染め込まれてあるかのごとき心地がするのである。

それは、私が二十八になつた年の春もまだ寒い頃であつた。私はその時はじめて、長い間の下宿生活から離れて小い一軒の家を持つたのである。そこは小石川の小日向臺町の奥まつたところで、廣い畑の中に、たつた一軒きり建てられた家であつた。私は其處へ、今はもう別れた妻と些かなる同棲生活を始めたのである。その時からまた溯つて十有餘年前郷關を出て以來殆ど下宿屋の飯ばかり食つて來た私は、そこで初めて食べ物らしい食物を食べることが出來たやうな氣がしたことを記憶してゐる。その頃はまだ電燈を用ひないでランプを使つてゐた。その

あたりにはまた水道もなかつた。廣い空地の庭先に井戸があつた。それは、家主が二百坪ばかりの借地をして古木を使つてその借家を新築すると同時に井戸は新築の家に必ず附屬するものとして畑の中に掘つたものである。三月の初だからお正月の頃のお葉漬が終になつて、大きな莖の京菜が漬けられる時分であつた。口に合ふ漬け物が食膳に上ることにまづ從來味はれなかつた家庭味を味はふことが出來た。新しい生活の珍しさに心を奪はれてゐる間に日は流れるやうに過ぎた。さうなくてさへ草深い畑の跡に拓かれた庭先には春雨の降るごとに綠の雜草が到る處に蔓つた。効々しい彼女は裾を端折つて、蛇でも棲みはしないかと思はれるやうな、膝まで沒するその雜草の中に入つて行つて、草を片端から拔きとつた。そして拔いてもぬいても雜草は伸びた、それでもだん〳〵夷げてゐる間に、いくらか庭が綺麗になつた。荒い竹垣を取り廻はして庭は家の建坪よりも三四倍も廣かつた。竹垣の外の空地には家主が蠶豆を植へてゐた。裏の方の地主の畑には蒔いたのか自然に生えたのか菜の花が咲きかけてゐた。何時までも底冷い春の雨がびしよ〳〵と降る中に窗から眺めると黃色い菜の花が霧のやうな雨飛沫の中に微かにふるえてゐた。私達は火鉢を擁して早く寒さのとれるのを待つた。

そこは大塚の火藥庫の裏門に近い處で、その傍には牛込の方からでも遠く目標になる、樹齡數百年と覺ゆる老いた銀杏の巨木が大きな枝を翳してゐた。家のまはりの畑の空地は、一方火藥庫の土手のところに盡きて、一方は竹藪に仕切られてゐた。そつちの方にゆくと畑の果には茶の木などがあつた。藪は向うの方に緩い勾配になつてゐるらしく、此方に立つてゐると、藪の彼方で人の話し聲などが聞えた。竹の間を透かしてよく見ると、そつちにも人家があつて、紙の製造でもしてゐるか、白い紙を板に張つて乾かしてゐるのが見える。これが、日本橋のやうな繁華な市街と同じ東京市の中とは到底信じられぬくらゐ、奥まつてひつそりとした處であつた。

芭蕉と野坡と二人で讀んだ俳諧には私の好きなのがある。

梅が香にのつと日の出る山路かな　芭蕉

處々に雉子の啼きたつ　野坡

家普請や春の手すきにとり付きて　野坡

上のたよりにあがる米の値　芭蕉

宵の内はら〳〵とせし月の雲　芭蕉

藪越しはなす秋のさびしき　野坡

藪のむかうで人が話してゐるのは何をはなしてゐるのかわからないが、これが東京の市中とは思へぬほど閑靜に小隱れた處であつた。丁度梅の咲く頃で、藥屋の庭に白い花を開いてゐるのが藪越しに見えてゐる。

私は家の中に靜としてゐるのに倦んでくるとよく畑に出てそのまはりを歩いてゐた。今から十七八年の昔であるから、その邊もひどく變つてしまつたらうと思ふ。私がそこを退いてから間もなく家主は空地を遊ばして置くのが惜しくつて借地の畑に、また此度は先のより大きな家を立てたし、地主も畑一面に瞬く間に借家を立てゝしまつた。

今から十七年前、即ち明治三十六年の三月は五代目菊五郎の死んだ時であつた。その年の秋

にはまた團十郎がづゞいて歿した。菊五郎の死はいかに滿都の好劇家をして哀悼追惜せしめたか知れぬ。すぐ四月には六代目の襲名披露をかねた五代目の追善興行が歌舞伎座で催された。九月にはもう自分も亡き數に入ると神ならぬ身の知るよしもなく、その時團十郎は對面曾我の工藤祐經に扮し、六代目と梅幸とが五郎と十郎を演じた。その時團十郎の二の役は毒饅頭の加藤清正であつた。太閤の遺孤秀頼を擁して、清正が雄々しい涙に咽びながら踊るところ、淀川堤で加藤清正の馬上の勇ましく凛然たる姿が十七年の歳月の幕を隔てながら今も尙ほ眼に見るやうに私の記憶に殘つてゐる。その後五月には團十郎はもう舞臺に立つたか、立たぬか私も抛(もう)には覺えて居らぬ。とにかく私が芝居を心から強い興味を持つて見なくなつたのは、それからであつた。演劇がさまで私の精神生活に重要なる要素となつてゐるとは考へられないが、團菊兩名優が尙ほ共存して常に歌舞伎座に出演してゐた時分は演劇に表はされてゐるやうなローマンチックな生活が現實の一部として常に私の精神生活の中にも存在してゐた。しかしその兩名優が現實世界から去つてしまふ時分から漸く私の心の眼にはローマンチックな物が見えなくなつて來

つゝあつたのだ。

三月はぢきに四月になり五月になつた。裏の畑の菜の花が段々末になつて、物愛いやうな五月の日光とゝもに前の畑の蠶豆の莖は眼に立つほどに伸びて可愛い花をつけた。日々にまはつて來る八百屋の車にはその頃の季を表象するやうな筍や夏蜜柑がいつも積まれてあつた。今はもう其處も一面に人家が建てられたであらうが、その頃荻荷谷の崖下の低地に廣い畑があつて、畑の中の一軒家に老いた百姓が住んでくさ〴〵の野菜を作つてゐた。私は近い處に住んでゐた同窓の先輩アイ氏に連れられて其處へ大根や胡瓜を買ひにゆき、歸りに大根の束を二人で差し棒にして持つてかへつたことを覺えてゐる。アイ氏は夙に平和な半農生活を實行してゐる人で、自宅の空地に茄子や胡瓜の菜園を拵へて、そこで上手に野菜を作つてゐた。私もそれに習つて庭の隅に一疊敷ぐらゐの土を掘り返へして畝をつくり、それに胡瓜を植へた。アイ氏は去年は胡瓜を植へて成功したが、胡瓜は容易くつて面白くないといつて、今年は茄子を丹精して、それ

にも成功してゐたのであつた。私には、入り易い胡瓜から試みるのがよからうといつて、胡瓜を植へることをすゝめた。下肥は汚いので水口の脇の下水を汲んで時々苗に灌いでゐた。晩春から初夏の晩夕飯を濟ましてもまだ夕明りの長く殘つてゐるやうな暖い夕方など私達は、その頃私の家に寄寓して中學校に通つてゐた田舍の甥と三人で、よく庭に立つて食後の時間を過してゐた。ぽつ〳〵梅雨が始まらうとする頃の物憂い〳〵眞晝間遠くの方から苗賣りの聲が聞へて、近くの横丁を通つてゆく、何だかもどかしいやうな氣怠いやうな、氣候はその苗賣りの歌ふやうな聲とゝもに梅雨を呼んで來た。そこら中の木々が鬱蒼として重苦しいやうな綠を滴してゐる。薄墨を流した如く天の一方に澱んだ雲から雨がぱら〳〵と降つてきた。

胡瓜の苗は梅雨の間にみる〳〵成長した。手を立てゝやると、刻々にも伸るかと思ふやうな纖細な蔓はすぐそれに卷き付いた。やがて花を付けたかと思ふと、その花の根もとが次第に膨らんで、それが實になつていつた。私達はその胡瓜を取つて清新な漬物にして食べたり、爽かな胡瓜もみにしたりした。

さういふ生活はしてゐながらも私の焦燥する氣分は決して鎭靜する機とてはなかつた。私は何だか常に物に追掛けられてゐるやうな心持ちで日々を過してゐた。その家は六疊と八疊と三疊と板の間との他に廻り緣などがあつて疊數のわりには廣い家であつたが、その内燃へるやうな眞夏の苦しさに襲はれるやうになると、私の病的に惱ましい頭は倍々靜に落着いてゐられなくなつてどうかして其處から變つた處へ移轉したら、もつと心の落着く處があるやうに想像せられた。そこで私は暑いあつい日中を汗水流しながら足を塵埃だらけにして牛込、小石川又は麴町の方まで借家を探して歩いた。そこに來る前は牛込の肴町の近くの下宿屋に長くゐたので長い間居馴んだそつちの方に歸りたいと思つて北町、仲町、南町のあたりを探して遂に南町のとある家を探しあて、そこへ移ることにした。

それは七月の末土用の眞最中であつた。明日はいよ〳〵引越しをするといふ前日は劇しい風雨で、長い間雨を見なかつた照りつゞけの暑氣を一掃してしまうかと思はれるやうな風雨が凄じい勢で晩から夜に入ると、もに倍々募つてきた。劇しい暑氣に虐げられて殆ど氣息奄々として

ゐた私は暗い夜を吹き捲くる凉しい雨飛沫にあたりながら緣側の運動椅子に疲れ切つた身體を托して心地よい風雨の音を聽いてゐた。便處の脇の廻り緣の突き當りの開き戸が劇しい風力に煽られて、何度締めても直ぐ開いて、かたん〳〵とけたゝましい音を立てゝゐた。後には諦めてしまつて風の煽るまゝに棄てゝ置いた。そこが開くとゝもに南北が吹き通しになるので、風は一層強い力で緣側を吹き拔けた。土用半ばに秋風ぞ吹くといふが、そのとほりである。今宵一と夜の暴風雨でもう夏が去つてしまつたかと思ふほどの凉氣が緣側から軒端に襲ひ寄せた。庭の梧桐や百日紅が時々巨人の吐く太息のやうに發作的に吹き募つてくる强風にしたゝか梢頭を吹き撓められるとゝもに、ぱら〳〵と音を立てゝ雨滴が吹き拂はれた。まだ秋にもあはぬ緣の葉が風に吹き千切られて緣側の上にまで吹き込んで來た。

妻は、明日の引越の荷車を、三月に此處に來た時に賴んだ荷車挽きが荷物を深切に取扱つてくれていゝと云つて、自分の母の處へも明日の手傳に來てくれるやうに賴みに行つたついでにそつちへも廻はるといつて出ていつたのは、まだこんなに風雨の劇しくならぬ前だつたが、少

し小降りになるのを母の處で待つてゐると思はれて、まだ戻つて來ない。いよいよ斯うしようといふ最期になつて却つて取捨に迷ふ癖のあつた自分は、こんなにもう秋のやうな涼しい夜が來たと思ふと、このまゝ此處にゐて明日の引越しはもう中止にしようかといふ考が浮んで來た。連日の暑氣に、運動椅子に凭つたまゝ冷い風雨に吹き曝らされながらそこを動くのさへ臆劫になつた身體が、さうしてゐると、やゝ蘇生したやうになつて來た。家の中のラムプは二つとも、とつくに風のために吹き消されてゐた。まだ暗くならぬ時分に胡瓜がさぞ傷められてゐるだらうと見にゆくと、家の軒までも手を伸ばした蔓や葉が風のために揉みにもまれ、雨には打ちたゝかれてゐる。黄色い花は地びたに散り落ちてゐる。明日は引越すといふので、もう昨日のうちに食べられる實はちぎり取つて置いたのだ。折角丹精したあの胡瓜にも後髪を引かれるやうで、さらば明日他へゆくのだとなつてみると、もうこんなに涼しい秋が來たのに何もゝう移る必要はない。どうしよう？　妻が戻つたら、此の變心を打明けて云はうかと思ひ迷ひながら私は何時までも縁側の運動椅子に身體を投げかけたまゝ、やつぱり庭樹に風雨の騒めく音を聽

いてゐた。夜が更けるとゝもに涼味は段々冷氣に變つて來た。そのうち雨はいくらか小降りになつて風だけはまだ縁側の突あたりの開き戸をがたん〳〵とけたゝましく煽つてゐた。そこへ妻は効々しく裾を端折つて傘を翳して戻つて來た。

『あなた眞暗な處にゐるの。』

『うむ、何度點しても消えてしまうんだ。』

妻は三疊の間の方にいつてマッチを擦つて火をともした。そのうち風も次第に弱くなるし、方々の雨戸も閉めた。昨日までは夜遲くまでも雨戸を閉めては蒸暑くつて堪へられなかつたのが、今宵は閉め切つても堪へられなくはない。ラムプの燈までが、初秋の夜のやうに澄んで見える。私はもうこれで夏は去つてしまつたやうな落着いた氣分になつた。

『いゝ鹽梅だなあ。私はもう此家をほかへゆきたくなくなつた。』

妻に向つてまともにそれを云ふには何だか、あまりに自分の決心がぐらついてゐるやうで流石にいひかねたので半ば沈吟したやうに、さういつた。

すると物解りのいゝ苦勞人の彼女は、すぐ私の心持をのみ込んだやうな眼をしながら、
『それは私だつて、あなたが變らないといへば、別段こゝを變りたくはありませんよ。』
自分も思案をするやうにいふ。
『また雨が晴れたら暑くはなるだらうが、こんなに涼しいと此家にゐたい。胡瓜もあのまゝに殘してゆくのは何だか心のこりだ。』
もはや實の生る、ならぬよりも梅雨の頃からこの地に、そんな物の愛着に因つてゞも親みを持つやうになつたのを、生木を割くやうに棄てゝゆくのが惜まれた。
『どうします？　止めますか。もう荷車を頼んで明日の朝涼しい内に來てくれるやうにいつて置いたのですが、止めるなら、今晩のうちに又さう云つてゆかないと先方に氣の毒です。』といつて、やつぱり考へてゐる。
妻は、私が半月ばかりの間あれほど一寸もじつと落着かないで、物にでも憑かれたやうにそはそはして一刻も此の家にゐるのが堪えられぬやうにいつてゐたのに、いよ〳〵となつて又

氣分の變つて來たのを敢て笑ひも咎めもしなかつた。
『さうさ。……しかし此處にゐるとするとエムが厭なことは厭だなあ。』
『えゝ、私もさうなの。』妻は聲に應じてさういつた。
エムといふのは、前にいつたアイ氏など、同じころに矢張り吾々の學校にゐたことのある人間であつた。エムは眞面目な文學者になりそこなつた人間で、使ひ道によつては隨分役にも立つが、その行狀に信用がなかつた。人間も厭味で癖が多かつた。後には文士俳優にならうとして——今日でも現に某一座に加はつてゐるらしいが——それでもあまり成功しさうになかつた。そのエムが近い處にゐるがために何だか私達の日常生活の平靜がいつも脅かされがちであつた。
『やつぱり變りませうよ。』妻は、私の決しかねてゐた心に、さう云つて遂に最後の決心を與へた。
雨は夜の中に止んで、暴風も靜まり、翌朝は涼しく明るい夏の朝になつてゐた。荷車は早く

からやつて來た。妻はもう此の間から手廻はしよく形付けてゐた荷物を運び出して荷車に積ました。母親も早くから來て手傳つた。

今でも私の忘れることの出來ぬのはその頃文鳥を飼つてゐた事である。その時分小日向臺町の服部坂の下に小鳥屋があつて、私はそこを通るたびに佇立つてよく小鳥を見ながら、老いた鳥屋の主人と話してゐた。そして無聊を慰める一つの方法としてある夏の朝文鳥の番を買つて來た。文鳥は緣側の軒端で囀りながらよく生きてゐた。引越しの時に籠の上から風呂敷に包んで荷車の下にくゝり附けて持つていつた。

南町へ越していつて、其處にゐたのはたつた八月一と月であつた。初は、小石川の方へゆく前に、牛込の南町に近い處に長く下宿してゐたので其方が懷しかつたが、一旦小石川の方に行つて此度もとゐた方へ戻つて來てみると、今度は却つてやつぱり小石川の方が懷しく思はれた。それに、あちらの方が土地にゆとりが多いのが何より好ましい。私は南町に來てからも、またちつとも家に落着いて居らず毎日もつと居心地のよい處はないかと探して歩いた。あてどもない一種の憧れである。空想である。そして先にゐた小石川の家の傍を何度も通つてみた。家は殆ど八月一ぱい借り手がなかつたやうである。

『先の家にかへるなら、まだ空いてゐるが。』

と思つたり、口に出して妻に話しかけたりしたが、やつぱりエムが近處にゐるので毎時決心が鈍つた。そして、何處か少し離れた處でやつぱり其方の方に歸りたいと思つてゐるところへ八月の末になつて、此度は小日向臺町の三丁目の、とある小い家が空いてゐたので遂にそこへ戻つて來た。前の時のやうに文鳥もやつぱり風呂敷に包んで、連れて來た。そこへ歸つて來たのは八月の末で、月を越してからも殘暑はまだ大分つゞいたが、それでも九月の五日だつたか一日眞夏にもなかつたやうな蒸暑い日があつて、夜も暑くつて、とても靜と寢てはゐられないほど苦しかつたと思ふと、私はその夜突然嘔吐を催した。翌朝近い處の醫者に車に乘つていつて診察を受けると、暑氣中りの急性胃カタルであつた。暫時服藥して食物の養生をしてゐる間に氣候も追々涼しくなつて、健康もそれにつれて回復した。——それは前にも一度いつたとほ

り私が二十八の時で、今の四十五歳とは大に違ふ。本來體質の虛弱な自分でも、その時分は元氣旺盛であつた。秋涼が加はると、もに私は夏の間怠けてゐた讀書や執筆の精力を集中することが出來るやうになつた。私は朝から夜まで打通しに机の傍に坐つてゐることが出來るくらゐ神經の元氣が回復して來た。――あゝ、十七年後の今日の自分の健康と比べて殆ど別人の相違がある。私は十七年の長い間徒に風塵に追ひ捲くられてゐる間にかうして空しく老いて來たのであらうか？

その家は、家主の住宅の裏の狹い空地に建てられた鼻を突くやうな家で四疊半二間、三疊と二疊と、たつたそれだけの部數であつたが、私は奥の二疊の間に机を置いてゐた。そこで私はゴルギイやツルゲネーフなどの飜譯をしたりしたことを記憶してゐる。秋闌けて十月十一月となるに從ひ精神も肉體も倍々健康狀態になつて、とり留めのない希望が雲霧のごとく湧いて來るのを覺えた。私は遠くへ散歩しない時は、その三丁目の正方形な一廓に東西に幾條か通じてゐる樹木の多い閑靜な小路を歩いてよく鼠坂の上の空地に立つた。そこから音羽の溪、關口

から高田の方が見渡された。護國寺の大きな甍も見えてゐる。秋が深くなるにつれて附近一帶の雜木林が黃ばんで、處々に櫨や楓の雜つてゐるのが霜に染められて燃えるほど赤くなつて見えゐる。その時分はまだ日白の方の岡にあまり人家が建たなかつた頃であるから雜木の岡がその處女美を汚されずにゐた。狹霧の罩めた寒い霜の朝などその高臺に立つて向につゞく雜木林の丘陵を眺めてゐると氣分が凛として、自分は何か大きな抱負に向つて勇進してゐるかのやうな想ひが湧然として起つて來るのであつた。――しかし十七年の後の今となつてみれば、何もかも大半夢であつたやうである。私は最早さういふ夢を見ることは到底出來ない。私の成し遂けたいといふ目的や理想は、其時分から比べると遙かに範圍が狹められたと、もにまだ遙に具體的なものになつて來てゐる。その、今の目的や理想も亦た過ぎ去つてみれば頼みがたい一場の夢の如きものにほかならないかも知れぬが、私はもう人間の力に限りあることを知つた。殊に自分の力は最も限られてゐる、私は夢幻のごとく過ぎた十七年の間に無價値なやうであつて、自分で體驗しなければ、とても味ひ知ることの出來ない尊い經驗を得た。

やがて正月が來た。私達が些かな家を構へて初めての正月である。自分の生活の過去現在、將來を見廻はすと、一時腰掛けに凭れてゐるかの樣な氣持ちがしたが、そして、其は僞りのない眞實の腰掛けであつたが、そんな生活にも亦絶ち難い愛着のあるのも僞らざる事實で、それをどうすることも出來なかつた。

やがて去年の三月から一周年になつて、また春が循ぐつてきたけれど、私の生活は樂しみを以つて迎へられなかつた。私は妻と別れることになつた。その前後の私達の氣分や經緯については、今こゝではいひたくない。

それは、たしか四月の二十日頃であつたと記憶してゐるが、私達はもう近いうちに別れようとしてゐながら、その半面には離れてゆくのを惜むやうな心持に強く支配されてゐた。で、その四月の末私は先月から忙がしかつたある雜誌の編輯事務を濟ましてしまうと、心が解放されたやうに樂になつて、例の鼠坂の上から遠くの方の雜木山の春霞に煙つてゐるのをみると、何處

かへ春を趁ふて浮かれて出たくなつた。つい此の間四月の八日だつたかにも今年になつてないくらゐの暖かく穩かな天氣だつたので、私達は一日鴻の臺から市川の方をぶら〳〵歩いてきた。その時の豫期しなかつた興趣が長く殘つてゐて、ぜひもう一度どこかへ行つてみたかつたのだ。その日はどこかそこらへ一寸出てみるつもりで二人で鼠坂を下りて音羽の護國寺の方へ歩いて行つたが、その頃はまだ今のやうに大塚の方が市街にならなかつた。護國寺前の廣い通りを大塚の通りへ上つていつて、少し先へゆくと、もうその邊は一帶の畑で、丁度菜の花の眞盛り。いかに閑靜な小石川の奥の方に住んでゐるとはいひながら、やつぱり市中にゐては廣い野の趣などは不斷味はふことはできない。久し振りで私達はその伸々とした野趣を味はふことが出來た。妻は取りわけ子供のやうに嬉々として悅んだ。今は人家に埋まれてその後形も見わけが付かなくなつたらうが、大塚のステーションに向つて左手の方は緩い勾配の丘で、圓味をもつた一帶の畑には黄白の菜の花が宛がら春の精とでもいひたいやうに麗かな日光の下に咲き溢れ、造化が保護色として授けたものか、特にその花の色とまぎらはしい黄白の蝶々が花から花

へと浮かれて飛んでゐる。物憂い、春の暖かさにつれて、むつと鼻を打つやうな甘酸ぱい匂が襲ふて來る。何の聲とも聞きわけられない蜜蜂などの唸るやうな蒸すやうな一種の靜かな物音が野邊に立ち濕んでゐる。どんな、人生の苦味を嘗めさせられた皮肉家でも、この長閑な、柔かいありとあらゆる自然を包むやうな春景色の中に放たれては、何人も心の底から造花の惠みに感謝をせずにはゐられないであらう。

私達は、はじめはたゞ此の邊まで來てみるつもりであつたのだが、あまりの美しい自然の色に、つい蝶々のごとく浮かれてしまつて、も少し遠い處へ、どこまでゞも春を趁ふて行つてみたくなつた。向うの方の雜木林は黃綠色の新芽を吹いて、まるでターナーの繪畫の如く春霞を罩め、うつとりと遠く立つたゐる。私はその造化の神祕めいた雜木林の間を分けていつてみたくなつた。私達は隅田川のほとりまで遠つ走りがしてみたくなつた。

『いつてみようか。』

『行きませうか。』

さう一決して、大塚ステーションの下の小い鐵橋をくゞつて飛鳥山の方へゆく田圃道を辿つた。そのあたりは、それ以來殆ど歩いてみぬが、十七八年後の今は大方人家で埋まつてゐることであらうと思ふ。菜の花の黃白と麥の綠とのほか何物も眼を遮るものゝない野道を、私達は群れ飛ぶ蝶々と後になり先になりしてぶら〳〵と歩いた。私達のほかには道をゆく人間が殆ど一人もなかつたのまで私達の氣を散らさないでよかつた。たつた一人十四五の男の子が歩いてゆくのと一緒になり、それに道を敎へられつゝ行つた。道端には孟宗竹の藪があつて、威勢のよい筍がのぞいてゐたりした。淸い水の流れる深い溝の緣に蒲公英や蓮華草が咲きこぼれてゐた。道はひとりでに飛鳥山に出た。今と違ひ電車はもとより通じてゐず、そのあたりが一帶に俗化しないで野趣が深かつた。飛鳥山で一と休みすると、山を向うに越して王子から田圃の畦をつたひ水と白帆の影を慕ふて隅田川べりを志して歩いた。道を問ひ〳〵して、遂に尾久の渡しに來て、大川の水を前にして立つた時には私は聲を揚げて悅んだ。のんびりとした大川の水を眺め、白帆のいくつとなく群れて上下するのを見ると、私はまた渡しをわたつて向岸に行つてみ

たくなつた。荒川堤の櫻の好いことが先日から頻に新聞に書かれてゐたからである。そして向岸に上ると、その荒川堤を向うへ〳〵、どこまでも歩いて行つた。遂に西新井のお大師さまゝでも行つた。そしてさしもの長い春の日が、遠い武藏野の彼方に傾きそめて、青磁色に澄んだ靜かな蒼空に何處ともなく冷い晩方の風が動いて來たのに氣がついて、私達は、もう歩く足に疲を覺え、俥で大師さまから、田圃の中にある東武線の西新井のステーションに走らした。そこから淺草驛まで歸つて、吾妻橋を渡つて戻つたことを記憶してゐる。

その晩春の郊外あるきをして間もなくであつた。私と妻とは別れることになつた。その二三日前、どうした時であつたか、奥の一と間で向うをむきながら。妻は、

『歸つて、私一生をつまらなく暮らすんだ。』

といつた。その言葉が何ともいへない强い力で私の胸を刺した。その言葉は十七年の後の今までも私の耳の底に尙ほ殘つてゐるかのやうに思はれてゐる。

三三日過ぎて彼女がいよ〳〵私の家から出ていつたのは、國の方から私の母と、横濱から乘

船してアメリカへ渡航する兄とが上京して來たその前日であつた。彼女は出てゆく時まで、自分が出ていつた後私の家の始末をして置いた。明日の午過ぎには母と兄とが新橋へ着くことになつてゐるので、差當り晝の食べ物の副食物の準備などもして置いた。尤も彼女が歸つてゆく十日ばかり前から小女を一人雇つて置いた。

一年の間に少しづゝ、彼女の母の處から運んで來た種々な小道具のやうな物が一度に持つてゆかうとすると、それでも大分あつた。それは前日までに、餘り遠くない、母と兄と同居してゐる彼女の此度歸つてゆく家へ持つて歸つた。私はそんな物を荷車で持ち運んでゆくのを、何とも云へない厭な佗しい心持で凝乎と見てゐた。それにも拘らず、その厭な心持ちを取り拂ふべく別れようとする自分の心をとり戻すことを私は敢えてしかなつた。

いよ〳〵歸つてゆく日になつても朝から晝に、晝から夕刻に時を移しつゝ彼女はじつと心を落着けおちつけ火鉢の傍に坐つて煙草などを吸つてゐた。

『そんなら私もう行きますよ。』

といつて、彼女はやうやく起ち上つて、荷物の都合で殘してあつた物尺や針仕事の道具のやうなものを少しばかり小風呂敷に包んだのを腕に載せて抱へるやうにして外に出ていつた。

彼女が二三歩いつたあとから私は座を起つて急いで外に出て彼女の後影を追ふた。もう直ぐそばの曲り角に形は見えなくなつてゐた。その曲り角までゆくと早や十四五間も先に彼女の歩いてゆくのが見えてゐる。遂に去つてしまつた。……永久に去つてしまつた。（九年三月五日）

冬の夜

一

東山の方から、底冷えのする寒い夜風を切つて二臺の俥をつらねて京都驛に來ると、二人は急いで上りの一二等待合室に入つていつたが、そこからまた人目を忍ぶやうにして婦人待合室の方に入つていつた。眞冬の夜更のステーションの中は寂然（しん）として旅客の影はどのクションの長椅子にも見附からなかつた。婦人室の長椅子には何か密談でもしてゐたらしい洋裝の二人の男が、彼等の入つていつたのと同時に談を中止して入れちがひに起ち上つて、出ていつた。

男は落着かぬやうに、

『私は切符を買つて來るから、こゝに待つておいで。』

と、優しい言葉でいつて、切符を買ふために待合室を出ていつた。間もなくまた戻つてきて、身ぶるひをしながら、僅かに燃え殘りの石炭が、ちろ〳〵焔を立てゝゐる暖爐の傍に寄つてゆきながら、

『おゝ寒いさむい。』

と、言葉を發したが、女は沈んだ顏をしてストーブに近い長椅子に腰を掛けながら默つてゐた。年の頃二十四五。銀杏返しの鬢がほつれて、長くとつた髭が襟卷にくづれかゝつてゐた。蒼いほど白い額に鮮かに刷いたすなほな眉の下にはぱつちりとした眼が微かに潤んでゐた。

『私一遍東京にゆきます。』

女は沈默を破つて小い聲でそれだけいつた。するとストーブの方に片手を翳し、女の方に斜に體を向けてゐた男は、

『一遍東京にゆくんぢやない、商買を止めたら東京にいつてしまうんぢやないか。』

さういつて女の顏をやさしく見た。

女はそれきり默つてしまつた。

間もなく改札をはじめる鈴の音が暗い冬の夜のプラットフォームに響き渡つた。各等の待合室から、ぞろ〳〵旅客がプラットフォームの方に出ていつた。それを知らずに、少しの間も別れを惜んで時刻の移るのを忘れてゐた男は、ふとプラットフォームの人の足音に氣がついて、

『あッ、もう汽車が來るのだ。』と聲を發したが、女の方に向つて、

『お前は寒いから、もう外に出ないで、此處においで。』

『えゝ。』女は、すゝるやうな低い聲を洩した。大きな二皮眼は赤く充血して露を宿してゐた。

『ぢや私はもうゆくよ。これから寒いから身體を大事におしなさい。』

『えゝ、あんたはんも。』

男はそこの扉を押し開いてプラットフォームの方に出ていつた。汽車はもう來てゐるのであつた。

男はボギィの二等車の中に入つていつて、一つの空席を見出すと、そこに自分の席をきめて

小い鞄を一つ棚の上に載すると、すぐまた乘降口の方に出ていつて、そこから薄暗いプラットフォームの彼方の婦人待合室の方に眼配せすると、硝子窓の中から袖口に手を持ちそへて、窺いてゐた女は、それと氣が付くと中から扉を押して邊々プラットフォームに出て來て改札口の埼に寄りそふて立つた。男も車臺から降りていつた。

『あんたはん、ずつと東京へお歸りやすの。』

『ずつと歸るさ。どこへもゆきあしない。』

『おかへりやしたら、手紙をおくれやす。』

『そんなことを改めていふまでもない、すぐ越すさ。今年はどうしてももう踊りのあるまでに引いてしまはないといけないから、私も一生懸命に急ぐ。』

『店ではやつぱり不可まへんから、ほかの處へおくつとくれやす。私がまた手紙で送つとくれやす處がきまつたら、手紙でさういひます。』

長い間默つてゐた女は、いよ〳〵汽車が發車する間際になつて、せめて名殘りを惜むかのやうに、自分から口を切つてそれだけ言葉を交はした。

『ぢやお前からもすぐ手紙をおくれ……ぢや左樣なら……』

男はさういつて、急ぎ足にプラットフォームを戻つて來た。そして車室に入つてゆくと、今度は自分の座席から窓を開けて、も一遍プラットフォームの方を見た。

女はやつぱり埼に凭れて元のところに立つて此方を見てゐた。

薄暗いプラットフォームには、もう物賣りの影も絶えて冷い夜は死せるがごとく更けゆかうとしてゐる。やがて發車を報ずる電鈴が響きわたるとゝもに列車は靜に搖ぎだした。汽車は彼等二人のためには胸を搾るやうな離愁を載せて暗夜の中に遠く影を消してしまつた。

二

男は窓の戸を閉めて、こちらに向き返つて腰を掛けながら長い車室の内を一順見廻した。誰れの席も大抵窮屈さうで、僅かに横になれるだけの席を占領してゐる者は足を曲げて毛布にくる

まりながら寝てゐる。婦人のある者は座席の上に坐つて窓枠に小形の空氣枕を置いて、それに額を支えながら假睡を求めやうとしてゐる。さうかと思ふと睡魔にはまだ襲はれてゐる樣もなく、姿勢正しく起き上つて講談雜誌か何かを脇目も振らずに一心に見入つてゐる洋裝の容もある。

男は先刻プラットフォームで買つたその日の東京の新聞の賣り殘りと大阪の新聞の夕刊とを二三種披いてざつと眼を通してゐたが、心は新聞の上にとゞまらぬらしく、その日夕方號外に出た各府縣知事の更迭に干する記事と春場所の相撲の記事とに暫時眼をとめたきりで新聞はそのまゝ折り疊んで外套の袖の下に置いた。

彼れの頭には、今別れたばかりの女の可憐しい姿が新聞の文字よりは遙に鮮かに、その影像を殘してゐるのである。……思ふ事が叶ふならば、今一緒にこの汽車で東京に連れて歸ることも出來るのであるが、それが意の如くならぬためにかうして盡きぬ別れを悲んで、ひとり佗しい思ひにとざされながら夜汽車に搖られて歸つてゆかねばならぬのである。何といふ意苦地なしで、自分にはあの女を自由な身にするだけの物が調はぬのであらう。……彼は胸の中で、何時

も屢く思ひ耽ける同じ愚痴な考をまたしても繰返して、果ては太息とゝもにそれを思ひ消さうとするかのやうに對手もないに一人で頭振りを振つた。

けれども女の影像は幾度となく彼の頭の中に見えた。

文通は絶えず交はしてゐたが、もう半歳の餘も逢はない女から急に、ぜひ逢ひたいから來てくれといふ切なさうな手紙を越したので、俄に思ひ立つて一昨日の夜汽車で京都まで女に逢ひに來たのであつた。岐阜、大垣あたりで、乘客のすいた二等車の中で轉寢の眼を覺ますと、彼は別段空腹を覺えたわけでもないが、意屈をまぎらすために食堂に入つて日本食の朝飯を取つて腹の中を温めてからまた好い心地で微睡してゐた。赭土の見える近江境の美濃の山々に麗かな冬の朝日が照り映えて、漸く眼を覺ますと冬枯れの野を流れる小川は氷に白くとざされて厚い霜の降りた茅舍にはまだ人の起き出る氣配もない。さういふ景色を窓の外に眺めながら米原あたりの西に向つて馳せる汽車に身を托して刻々に近くなつてゆく京都の空を懐しんでゐた。關

ケ原から米原あたりの雪景に此度はすつかり眼を覺まされてしまつた。伊吹山は全山雪を被つて眞白にそゝり立つてゐる。それから近江の野を走つてゆく頃には美しい朝日の光が霜に凍てた野末に漲つて、比良が嶺は遠く湖水の彼方に朝日を受けて雪を帶びた肌を輝かしてゐる。やがて逢阪山のトンネルを向うに越すと、彼は心臓の鼓動を胸に感じながら京都のステーションに下車した。そして寒いプラットフォームを渡つて構外の廣場に立ちいでた。去年の五月に來たきり見ぬ東山は今しも漸く眠りから覺めて朝霧の中に靉靆とした顏を露さうとしてゐた。

米原から汽車の中で電報を打つておいたので、ステーションから電車で四條に近いある料理屋にともかくもいつて、そこで女から電話の掛つて來るのを待つことにして電報で知しておいた。その料理屋までゆくと、朝の遲い遊廓ではまだ何處の家でも表の戸を閉ゐてゐるので、彼は近くの洗湯に入つてゆつくり暖まりながら時を移してゐた。やがて風呂から出て料理屋に戻つてくると、もう店は開いてゐた。冬枯れの加茂川や東山の景色を見晴す座數に通つて仲居を對手に酒盃を手にしてゐると、電報がとゞいたと思はれて女から電話が掛かつて來た。

『日那はんお電話どつせ。』と仲居が慌しく知らする聲に應じて彼は起つて電話室に入つていつた。

『もし／＼。あゝ分つた。何處か他のところ。あゝ分つた。さあ何處にしようね……ぢや彼處はどうだ。お前の都合は惡くないか。あの眞葛が原のあそこの家は。』

『えゝ、あそこなら構ひまへん。ほんなら取りあえずあそこにいて待つてとくれやす。二時から三時頃までに私がいきますよつて。』

『ぢや、さうするからその時違へないやうに。』

『あんたはんも違へんやうにしとくれやす。』

『私はちがへる氣づかひはない。それでわざ／＼東京から來たんだから。』

『あゝ、もし／＼。』

『何に？』

『いはうと思ふたけど、ほんなら、また後でいひます。』

それで電話は切つた。

二時までには大分まだ間があるので彼はそこでゆつくりして酒の後を飯にした。思へば、東京と京都と遠く離れてゐるやうでも、昨夜一夜を汽車に明かして今朝はかうして京都の朝飯が食べられる。首尾よく逢へるかどうかと氣づかつた女とも電話を交して久しぶりに聲をきいたので、いかなる名醫の授ける妙藥を服したよりも心が清々して氣が引立つてきた。一月半ばであるが、冬の日は麗かに照り映えて、座敷から見渡す東山智恩院の山から清水、阿彌陀ヶ峰一帶の山つゞきはやんはりと、もう春霞を罩めたやうに糢糊として朝靄に烟つてゐる。彼は其家でゆつくり時刻を移して微醉を帶びた顔を心地よい加茂の川原の風に吹かれながら、そこから尙ほ二つ三つ下の橋を向岸に渡つて女と約束の東山の裾のとある料亭の方へと足を向けた。

長閑なやうでも日晷の短い冬のことゝて、それでもさうかうするうちに二時が廻つてきた。彼は道を歩きながらずつと以前に一度馴染になつてゐる、とある席貸しの家を思ひ出したので、そこへいつて見る氣になつて入つてゆくと向うでも顔を見覺えてゐて快く通した。それで座敷

に通つて今晩の宿る處が定つたので小い風呂敷包みを一つそこに置いて、女中の持つて來た茶を一杯飲んでから、そこからはあまり遠くない、先刻女と約束した料亭の方へ出ていつた。

そのあたりは京都でも殊に閑靜な土地で、別莊とか、靜かな席貸しとか金持ちの隱宅などのあるところで知られてゐるほどあつて、彼はその蕭かな道を山の方に歩いてゆきながら時計を取出して見るとやがてもう三時になつて、靜かな通りには早や夕暮れの蔭がさし添ふてきた。彼は高臺寺の裏門の通りから眞葛ヶ原の方に出てきた。そこから西の方に見えてゐる愛宕山は靜かな冬の蒼空の彼方に淡く暮靄の中に夕陽を浴びてゐる。三時といふ約束だつたからもうやつて來る時分だらうと思つて、彼は餘り遠くへはゆかないやうにして其處をぶらついて時を移して待つてゐた。そして再び約束の料亭の入口のところに戻つて來て立つてゐると、やゝだらだら阪になつた道の、向うの方から同じ道をこちらに歩いて來る人間に交つて彼女の細そりした姿が見えた。いつもの銀杏返しに結つて、向うでも此方が眼についたらしく近づいて來るに從つて微笑してゐるのまで分つた。

『よく私を覺えてゐたねえ。』
『そら覺えてます。』女は笑つてゐる。
『ほかに、すぐこの近くに好い宿を今定めて來たんだ。お前知つてゐないか、彼處の、松の家といふ家を。』
『知つてます。』
『ぢや、これから此の家へ入らないで、すぐあそこへゆかうぢやないか。』
『そやけど、まあ一寸こゝへ入りまよう。』
二人は連なつてすぐ其處の門を入つて敷石を傳つて入口の方にいつた。
女中に案内せられて長い廊下をつたうて中庭の植込みを前にした奥まつた座敷に通された。
女中が座蒲團を薦めておいて一寸退つてゆくと、二人は顔を見合はして互に微笑を浮べた。
去年の五月見た時に比べると、女は顔に肉が付いて血色が好くなつてゐた。
『私ちよつと肥りましたやろ。肥つて色が黑うなりましたやろ。』

『うむ、肥つた。色は黑くはない、丁度好い色だ。健康さうになつた。』
『何やしら變なものが出來ましたやろ。』さういひながら女は頰のところのニキビのやうなものを頻りに氣にして甘えるやうな氣分で指尖で搔いてゐた。
『何でもないぢやないか。そんなに弄らない方がいゝんだよ。』
といつて、彼は手を出して宛がら自分の顔を大事にするやうに女の手を制した。
二三品ばかりで形ばかりの酒盃を酌み交しながらそこで暫く話してゐた。
『足許から鳥が立つやうに急に來てくれつて、どんな用があつの？ぜひ逢はねばならぬ用事といふのは何？』
『あの手紙を出した時にはさう思ふてましたけど、もう用事といふ用は格別におへん。』
『おい、戯談ぢやないよ。京都の地の者や大阪神戸の人間とは違ふよ。少しの間も待てないやうな手紙だつたから、急に思ひ立つて、昨夕の夜汽車で百三十里の道をわざ〳〵やつて來たのぢやないか。何んな用があつたのだ、いつて聽かしてもらはないと氣が濟まない。何んな用事？』

女は唯微笑してゐるばかりで何にも別段改まつた話もない。
『私あんたはんにもうお斷わりしよう思ふて。』
男は凝乎と女の顔をみた。
『お斷しようと思ふて?!……ぢやお前は私とこれきりになる話しをする爲に、私をわざ〳〵東京から呼んだの?』
男は本氣とも戯談とも何方付かぬ調子で强ひて微笑するやうに云つた。
『そんなことおへん。』
『そんなことおへんて、そんなことをいふには、いくらか其處にそんなやうな氣分でもないと云ふわけがない。お前そんなことにしたいわけでもあるの? あるのならば、明白にいつた方が可いよ。厭々ながら引張られてゐるのは、私の方でも馬鹿々々しいから。』
男は少許過した酒に眼のまはりをぽつと紅くしながら、轉りと横になつて、肱を枕に、顔を女の方に向けて表情のない女の顔を見守つてゐた。女は、男に餘りにむきになつていはれた

ので、
『私、あんたはんに、たゞさういふて見ただけどす。私そんな氣おへん。』さういつて、彼女は靜かに笑つた。
『いや、さうでもないだらう。何か譯があるにちがひない。ありさうなことだもの。』
『何にもわけはありまへん。私がたゞ、あんたはんにさういふて見たゞけどす。』
女は戯謔ふやうな顔をして笑つてゐた。
『私、今あんたはんの處へ本間に來たのと違ひます。まだお花がついてゐるのを、一寸屋形へいんで來ることにして來ましたんやよつて、また後に出直して來ます。』
『ぢや、待つてゐるから早く來ておくれ。お樂しみの最中をお氣の毒なこつたが。』
『嘘! そんな人とちがひます。』
そんなことをいひながら、其家を切り上げて外に出た時には、東山の麓の靜かな街にはもうすつかり夜の暗が被ふて、高みから見おろす彼方の京都の街の方には美しい電燈の火影があち

らにも此方にも澄んで見えた。

二人は人通りの少い街を縫ふて、すこしづゝ賑かな通りの方へと出て來た。男は先刻定めた宿の見える處まで來ると、

『あそこがその家。知つてるだらう。ぢや歸つて待つてゐるから早くおいで。』

『えゝ、知つてます。』

そこで別れて女は歸つていつた。

三

建物はさう新しくはないが、掃除のよく行きとゞいた靜かな六疊の部屋の隅ではガス暖爐がぼッ〳〵と微かな音を立てゝ青い紫の焰を揚げて燃えてゐた。彼は暖爐の前で暫らく身體を暖めると、やがて其家の主人の自慢の一つである浴室に入つて心地よく暖まつた體を褞袍にくるまつて出て來た。

氣の利いた女中は、早速遠い廊下を小走りに急いできて、板の間に膝をついてそつと襖を開きながら、

『あの、お夕飯はどないいたしまへう。すぐお上になりますか。もうお支度はチンと出來てをります。』

京都の土地の者だからといつて、今日の世の中では必ず純粹な京都言葉を使ふとはきまらない。まして東京あたりの上等の客の多く泊る旅館の女中などには好んで東京辯を用ゐようとするのが多い。以前息子が自分の家の女中と心中をした有名な、ある旅館の女中などは東京の物といへばお客さまにお土産に貰つた三越のボール函さへ京都大阪あたりの物とは品がちがつてゐるやうな氣がするので大切にしてゐると語つてゐたことがあるほど、彼等は東京に憧れてゐるのである。昔とちがつて交通の頻繁な時代、自然純粹な京都言葉が追々廢れて調和のある新しい言葉が出來て來るのも道理である。それは京都言葉にしても新時代の京都言葉であつて、さういふ言葉を使ふ女中のゐるやうな旅館や料理屋などは適者生存の理をよく辨へてゐるのであ

る。古臭い因循を生命としてゐるやうな京都人よりも、どんなに外來の旅客に快い感じを與へるか知れない。

彼は、湯上りに暖まつた顔を艶々光せながら、瓦斯ストーブの傍に寄つて靜に煙草を燻らしてゐた顔を女中の方に向けて、

『さあ、……もう來る時分だが……もうすこし待つてみせませうか。』

『ほんまに、えらい遲うおすなあ。ほんなら宜しい時にどうぞさういふとくれやす。』

女中はさういつておいて又遠い廊下を小走りに退つていつた。

彼は昨日の晩九時に東京を立つて汽車の中で一夜を明かし、今朝早く京都に着いて、それから電話で女と話しをしたり、先刻圓山の小料理屋で女と逢つたりしたことをもう一遍繰返へして考へるともなく考へてゐると今日が昨日から連續してゐる一日の出來ごとのやうに思はれて、長い一日の間に心を使つたゝめに、快い心地の身體が暖まつて來るとともに、疲れが出て來てそのまゝストーブの前に褞袍に膝をくるみながら肱を曲げて横になつてしまつた。やがて

八時九時も過ぎ十時になつても女は來なかつた。彼はうつら〳〵してゐた眼をふと覺ますと、風邪を引くのが恐くなつたのに氣がついて、すつかり正氣に返りながら、

『あんまり遲い、氣のあかん、蛞蝓のやうに悠長な彼の女のことだから、出先のお茶屋で留めて置かれゝば、そのとほりに向うの云ふまゝになつてゐるのだらう……』

そんなことを思つてゐると、東京からこんな草疲れ儲けをしてわざ〳〵京都くんだりまで出て來た自分が馬鹿のやうに思はれて、どうしてやらうかと考へてゐると、丁度そこに呼鈴の球が轉がつてゐたので、それを押した。

廊下に忽ち足音が聞えて女中がやつて來た。

『お召しになりまして？』

『えゝ、待つても來ないやうだから、どうぞ御飯をそろ〳〵持つて來てもらひませうかね。』

『ほんまにえらい遲ござりますなあ。ほんならぼつ〳〵お支度いたします。そのうちにお越しになりますどつしやろ。』

彼は女中のお酌で三つ四つ快く過したあとを田舍亭の料理で御飯にした。そして陶然とした心持ちになりながら昨夜の睡眠不足で今度は本當にとろ〳〵となりかけてゐるところへ女は女中に案内せられて、すらりとした姿を襖のところに顯はした。

『えらいおそなつて濟みまへん。』

『ほんとに遲かつた。御飯は？』

『あんたはん、もうお上りやしたん？』

『いくら待つて、も來ないんだもの、お腹が空いたから食べてしまつた。お前まだいつたらさういはう。』

『ほんならもうえ、のどす。姉さん私は入りまへんよつて、また後で欲しい時に何かさういひます。』

女は、男が、自分と一緒に御飯を食べやうとて待つてゐるものと思つてゐたのが、もう食べてしまつたときいて、さういつて女中を退らした。

男は、自分の來やうがあんまり遲いんだもの、いゝ氣味だと腹の中で一寸思つたが、女は口說のない、表情の乏しい、靜かな女なので、男の方でも女が來てしまへば、腹の立つてゐたのも、どこかへ消えてしまつて、それは、それつきりで濟んでしまつた。

翌朝女は早くから眼を覺して、男が遣らぬといふのを、ちよつと家へ歸つて、序にその邊の庚申さまへお詣りしてきますといつて、寒い雨の降つてゐる中を出ていつてしまつた。いくら止めても聽かなかつたので、終には、勝手にするが可いといふ氣になつて、男は一人寢の蒲團を頭からすつぽり被つて、寢暖まりのした廣い夜具の中にぐつすり二度寢をした。

何處へ出ていつたのか、女の心持ちを測りかねて、歸つて來るまでは、氣になつてとても再び快く寢入られないだらうと思つてゐたのが昨夜の疲れに、二時間三時間は熟睡して知らぬ間に經つてしまつたと思はれて女が襖をあけて入つて來た物音に漸く眼が覺めた。

四

男は嬉しくつて堪らないやうに、心地好く長々と寢伸びを一つして、

『早かつたねえ。』

『早うおしたやろ。そこの庚申さまへおまゐりにいて來ました。今日は御緣日でおまゐり大勢どつせ。』

といひながら、女は帶の間から八阪の庚申堂の御守を取出して、

『あんたはんにも一つ上げまへうか。』

『うむ、おくれ。』

『もう起つきおしやす。』

『まだ寒いよ。お前、あんな早くから何處へいつたんだよ。昨夜ぜひ逢はねばならぬ約束の人があつたのを私の邪魔者が來たゝめに今朝まで一人で待たして置いたといふわけなの？』

『ちがひます。屋形へいんで來たのどすがな。』

『何んだか。わかりやしない。』

『屋形へ去んで神さまへお燈明上げて來たのどす。お燈明は毎時私が上げることになつてますのどすさがい。』

『あゝ、左樣か。さうか…雨が降るのに、寒かつたらう。御苦勞さま。』

『起つきおしやすたら。もう遲おすせ。』

『ぢや、起きて風呂に入らう。』

彼はさういつて、思ひ切りよく起き上つて寢卷の褞袍のまゝ、すぐ廊下から浴室の方へ出ていつた。

木の香のまだ新しい湯槽には木理の透通つて底まで見えるやうな湯が緣を越して流れるまで波々と湛えてゐる。彼は楊枝を啣へたまゝその中にづぶと頸のところまで漬つた。

『あゝ好いお湯だ。南無阿彌陀佛々々々々々々々。』

女も後から脱衣室の戸を開けて手拭を持ち添えながら入つて來た。

『お湯どうです。』

『好い湯だよ、お入り。』

やがて、男が上つてからも女は何時までも磨いてゐた。そのうち女中は菊水から取寄せた鳥の出前を運んできて、煮はじめた。

『隨分長い湯だねえ。そろ〳〵始めよう。』

といつて、彼は女中の酌で酒盃を取り上げた。女はそれからやゝ暫く立つて、顔をぽうッと淡紅に上氣して湯から上つてきた。白い廣い額に素直な濃い眉が引立つて見えた。銀杏がへしの鬢が湯氣を含んで艶々してゐる。

『さあ、お上りやす。』女中は聲を掛けた。

『へえ、おほけに姉さん。』

飯が濟んでから按摩を呼んで男はまた床を敷かして横になつた。女はその間机の前に坐つて

遠くにゐる叔母に長い手紙を書いてゐた。

『隨分長い手紙だねえ。何を書いてゐるの。』

男は時々頭を擡げて女の方を見た。女はそれには答へず膝から疊の上にまで卷紙を伸しながら一心になつて手紙を書いてゐる。淡い藍色のお召の着物に、ところどこに櫻の花片を織り出した黑縮緬の羽織を被てゐるのが顏の色が白いのと、姿がすんなりした痩形なのとで一層粹に見える。細く長い左の指に白い卷紙を持つて、右の手でさら〳〵と筆を走らせてゐる。男は按摩に揉ませながら女の姿を眺めてゐた。

戸外は靜かな冬の日が風もなく照つてゐると思はれて、高い塀で圍まれた南向の狹い前栽には明い日が當つてゐるのが障子に映つてゐる。

やがて男の療治が終ると女が代つて床に横はつた。

短い冬の日は、先程まで明く輝いてゐると思つてゐる間にもう餘程西に傾いたと思はれて、障子の桟に映つてゐた日影はいつしか消えてましひ、腰硝子から見透される庭の木蔭には薄暗が

忍び寄つて來た。その頃になると、男の胸には刻々に壽命の縮まつてゆくやうな遣る瀬ない悲しみが夕汐の湧く如く滲んで來た。その晩の汽車でどうあつても歸つてゆかねばならぬのである。先程まで美しい蜃氣樓の如く眼に映じてゐた幻の影は、恰も冬の日影のやうに果敢なく消えて灰色の暗はひた〳〵とおひ被さらうとしてゐるのである。

『あゝ、一日寢轉んでばかりゐたので何だか生欠伸ばかりが出てきた。すこしその邊を歩いて來やう。』

『寒いから、もう往かんとおきやす。』女は肩を揉まれながら枕に載せた顔を横に向けてさういふ。

『運動しないので、食べた物が腹に溜つてゐるやうでいけない。ちよつと歩いて來る。』

『もう往かんおきやすたら。あんたはん、どうでも今日おかへりやすいふとゐやしたから、あとで停車場にゆく時におしやす。ほしたら私も一緒にゆきます。今は止めときやす。』さういふ女の眼には微かに露が宿つてゐた。

『うむ、それはその時のこと。ちよつと出て外の風に當らないと何だか頭が痛い。』

別れを惜んで暫時の間も傍にゐて欲しいと思ふ心は男も女に讓らなかつたが、男は兎も角も、

『すぐ歸つて來るよ。』

といつて、外に出ていつた。外には風はないが夕暮の寒さは頰を斬るやうに身にしみて冷かつた。それでも彼は一日家の中に閉ぢ籠つてゐた體を外氣に觸れるのが心地よくつて、冬の暮れ方の人脚稀れなる下河原の靜寂とした街路をすこし下へいつて、席貸しや妾宅風の小意氣な家の新しく立ち並んでゐる石塀小路の露地を向うに拔けて松の茶屋の前を石段を踏んで高臺寺の境内に上つていつた。春の花見の時分でさへ寂やかな境内は樅や松の巨木に蔽れて、もうすつかり宵暗が被ひかゝつてゐた。木立ちの茂みから遠く下京の方の街の火が淡青い暮靄の底に瞬いてゐる。

彼はその木下暗を通り拔けて南門の方を阪を下つてもすこし歩くつもりで足の向くまゝにそれから產寧坂を上り清水坂までいつたが、一月も二十日近いそのわたりの冬の夕暮れの寂しさ

に彼はもうそれから先き歩いてみるに堪えなくなつて、日限地藏の處から折れ曲つて八阪の方を廻つて下河原へ戻つて來た。

按摩はもう濟むところで、女は肩先を揉んでもらひながら、男が戻つてきたのを見ると嬉しさうに潤んだ眼を輝かして笑ひながら、

『おかへりやす。えらう早うおしたなあ。』

『外はやつぱり寒い。』

さういふ彼の胸の中には、搾るやうな悲みが逆上げてゐた。八時の汽車を待つ間の時間は、あと三四時間といふところになつて瞬く如く過ぎた。

いづ宇の蒸し壽司が來るのを待つてそれを食べてから門の外まで見送りの女中達に、

『さいなら、御機嫌よう。どうぞお近いうちに。』の聲々で送られたのは、それから間もなくであつた。

五

車内の人々はボギィ車の、ずつと先の方にたゞ一人洋裝の客が、彼もまだ心地よく寢入られぬと思はれて起き直つて何か讀み耽つてゐるばかりで、あとは何れも皆眠りに入つてゐるらしく滿車の客の間から話聲一つ聞えて來ぬ。晃々たる電燈の光のみ其等の寢穢い姿を照らして車輪の線路を軋る音と大きな車體の搖れる音のみが靜かな夜を領してゐるばかりである。四邊が靜かであれば、あるほど彼の頭の中には昨夜から今日にかけての女の殘像が明歷と何時までも見えてゐた。彼はその欝結を拂はうとしてか遂に座席を起ち上り長い車内を、兩側に置き並べた鞄や信玄袋や或は不作法に投げ出された人の脚などを避けつゝ通りぬけて二車を隔てゝ後方に連結されてゐる食堂車の中へ入つていつた。夜が闌けてゐるので飲食する客も大抵去つたあとで、中央の卓に四人づれの洋裝の旅客が珈琲を飲みながら雜談をしてゐるばかりである。その中の一人と彼は偶然顔を見合はして互に、

『やあ！』といつた。

洋裝の紳士は彼の知れる代議士であつた。間もなく彼等は席を起つて去つた。あとで渠は一人二三の品を命じて暫く食堂車の中で時を過してゐた。列車は今米原驛に停車して北國線の旅客を上下して發車したところで、食堂車の窓から透してみると車道は漸く近江と美濃との國境なる關ヶ原の隘狹に分け入らうとしてゐる。この邊は東海道線路中で一番雪の深い處として知られてゐるので昨日の朝も沿道に厚い雪の消え殘つてゐるのを見たが、京都ではあんなに晴れてゐたのに、此處では雪模樣と思はれて、ちらちら白いものが窓硝子に吹き付けて來た。その間に遠くの野も近くの山の裾も一目白皚々として暗の底に靜まつてゐるのが見えゐる。彼は一二杯の芳烈な西洋酒の機嫌で全身の血液が波を打つて循環を速めてくるのを覺えると、もに陶然たる醉心地が快い睡眠を誘うて來た。窓外の曠野は荒寥たる吹雪の中に眠つてゐる間を暗を衝いて怪物の如き列車は外の世界から暖に保護せられたる多くの旅人の樣々に異れる夢を載せて驀然に疾走してゐるのである。彼は睡魔に襲はれるとゝもに、涙ぐましいやうな諦めと、譯

もない強い自信とが湧き上つて來た。

やがて食堂車を出てもとの座席に戻つて來たが、丁度前を通りかゝつたボーイに訊ねると幸ひ寢臺が一つ空いてゐるといふので、それを命じて寢臺車の方へ移つていつた。どうかして何もかも忘れてぐつすり快く一と寢入りしてゐる間に、東京まで着きたいと思つてゐるのである。彼は闇暗を手さぐりに寢臺に上つて外套と羽織を脫ぎ、帶を解いて毛布の中に横はつた。驛夫が岐阜、名古屋と呼んで歩く聲が窓の外に聞えてゐるのは知つてゐたが、それから先は何も知らなかつた。今度眼が覺めた時にはもう沼津に着いてゐた。こゝまで來ればもう函嶺を一つ向うに越しさへすれば東京に歸つたも同じである。彼は熟睡の後の快い感じを覺えながら腰から上を起き上つて寢臺車の窓の被ひをはねてまだ微暗い外の景色を眺めたが、長い冬の夜はまだ昨夜の眠からすつかり覺めないで、凡ての物が早曉の薄暗の中に靜かに眠つてゐる。彼は再び横になつて眠らうとした。車室の中はスチームのために七十度を越すほどの暖さで、それが眞冬の夜の旅にゐるものとは到底考へられないくらゐである。兩側に上下二段になつて連つ

てゐる寢臺は何れも海老茶色の帷帳（カーテン）の奥に凡ての祕密を包まれてゐるから、如何なる旅客がその内に眠つてゐるか、またいかなる美人が寢床の上に横はつてゐるかかいくれ分らない。何處のカーテンの中でも深い眠に陷つてゐると思はれて、列車の搖れる音に掻き消されて、寢息さへ、聞えて來ぬのであるが、たゞ一つ彼の眞向うの寢臺では時々カーテンの奥で密々（ひそ〳〵）女のさゝやく話聲が洩れてくるのをみると二人寢臺と思はれた。彼等も目覺めて眠られぬらしくやゝ暫らく囁きが聞えてゐたが、

『ほう、熱！　あつうて寢られへん。』

と、つぶやくやうにいつて、カーテンを掲げて便所にでも立つたらしく、出ていつたのは、言葉訛りからも大阪者とおぼしく微暗（ほのぐら）い電燈の明に透して見ると、三十過ぎた丸髷の、お茶屋の仲居でもあるらしく、大島の綿入れに伊達卷一つ締めたまゝ。も一人その奥に寢てゐるのはおほかた多分藝妓であらう。日那は大阪か、それとも東京か？

するとちやうど欠仲が傳染するやうに、その隣でも亦た眼が覺めたと思はれて、筋向うでも

カーテンをかゝけて寢臺の上に起き直り、マッチを擦つて煙草に火を移してゐるその間にこれもやつぱり一と眼にしるく大阪顔の頗る美人である。それも仲居と二人づれらしい。彼は再びカーテンを下してベッドの上に横はりながら向側の女づれの旅行の目的や樂しみを考へるともなく考へてみた。そして昨夜京都の驛で女と別れて來た自分達のことを思ひ比べて見た。取り留めもないそんなことを、眼を瞑りながらじつと考へてゐるうちにまたうと〳〵して好い鹽梅に、刷れては汽車の搖れる響も添乳を聞いてゐるやうな心地になつて寢入つてしまつた。此度眼の覺めた時には、もう函嶺は通過して國府津に來て停車してゐた。相模灘の彼方からさし昇つて來る暖かな朝暾は淡紅色の光線を後の山の松林にさし映えて、靜な黎明（あけがた）の蒼靄の中に凡ての物が霜の雫に潤ほうてゐる。彼はやゝ寢過して跳起きてみると、もう何處の寢臺でも眼を覺まして、ボーイは片端から毛布やシーツを取つて臺を折り疊んでゐる。昨夜の女づれの旅客はと見ると、トイレット・ケースなどを持ちそへて洗面所の方へゆくところである。朝日は金色の光線を窓硝子一ぱいに照して、海の面には快晴を報ずる水蒸氣が一面に立てこめてゐる中を

金泥を流したやうに和やかな水の上をもう漁船があちらにも此方にも見えてゐる。海岸につゞく畑地の彼方には松林から太陽の昇るにつれて朝霧が時を移さず明るい空に向つて上騰してゐる。汽車はその中を新なる勢ひを以つて走つた。どの旅客の面にも睡眠不足の表情にまじつて快活な悅びの色が認められた。

このまゝ乘つてゆけば東京には九時一寸前には着くのであるが、彼は物足りない昨夜の離愁の遣る瀨なさをどうかしてまぎらさなければ、そのまゝ東京に歸つてもつまらないので、急に思ひ付いて横濱で下車することにした。

六

横濱には去年の夏の頃から關係のある女がゐるのである。去年の暮ちよつとした感情のゆきちがひから、もう一と月餘りも逢はずにゐるが、兩方で手紙を出すのを、互に意地のやうになつて止めてゐるので、此方から訪ねてゆくのはいくらか降參したやうで厭だけれど、もしさう

解しても、それは先方で勝手にさう取るばかりであつて、此方では、彼女よりも、もつと好きな京都の女に別れて、今戻り途の別れの遣る瀨なさを彼女によつて暫らく慰めようとするのであろ。

それで横濱に下車して、まだ朝霧のすつかり晴れやらぬ麗かな冬の日を浴びながら彼は伸にも乘らずに女の家を訪ねてゆくと、女のゐた家は空家になつてゐて、貸家札がはつてあるが、先の住居人の越していつた先きは書いて貼つてない。彼はその家の前に立つて考へた。あんな祕密な生活をしてゐる女だから移轉してもいつた先きを明さぬのであらうか、それとも若しや自分が訪ねて來はせぬかといふ氣づかひがあるために特に自分に對して今後の居處を不明にしようとするつもりであらうか。併し女の今の身體では、假ひそれが祕密でもあり、また十が十まで明瞭したこと、は云へないとしても、二人の中で出來た姙娠に相違ないと思はれてゐる以上は、あれくらゐの一寸した感情のゆき違ひで、女の方からあれつきりにする氣はない筈である。けれども、それならば、移轉すればして、それだけのことは知らして越しさうなものなのに

知らして來なかつた處を思つて見ると、こいつは、矢張り自分に對して居處を不明にするつもりであるかも知れない。折角堪へ難い佗しい心を抱いて訪ね寄つたのに、このまゝ此の女にも逢ふことが出來ないとなると、どうしよう？　若し向うが果してそんな考へでゐるならば、尙ほのこと、引越していつた先を探し出さずには置かれない。

それから空家の近くで家主を訪ねようとしても何處だか知つてゐる處がないので、交番にいつて訊くと家主は分つた。勝手を知らぬ横濱の街を朝つぱらうろついて漸く家主は探しあてたが、今度越していつた先は家主でも分らない。けれども關内の何處そこに何某といふ洋服屋があるから、そこにいつて訊くと知つてゐる筈だといつて、洋服屋へ往く道順を委しく敎へてくれた。

『左樣です。……お借りになる時にも萬事その洋服屋が引受けて話しに來たり、あつち此方もしたので、私の方は、どんな方かよく知らなかつたくらゐです。』

さう聞くと、居處をなるべく祕密にしようとしてゐるのは、必ずしも自分に對して特に用心

をしてゐるわけでもないといふことは肯けたが、洋服屋といふのが、ぢや、旦那との間に立つて凡てを仲介してゐるのだな。それにしては洋服屋が自分に向つて卒直に居處を明かすか、どうかと氣づかひながら、その關内の洋服屋を家主に敎へられたとほりに訪ねてゆくと、表構へを西洋作りにした、なか〳〵好い店である。彼は外からドアを押し開いて訪ひながらも、自分から氣が咎めてゐるのと、彼は自分の風采がどうしても唯普通の用事で女の居處を訊ねてゐる人間とは認められないことを十分に意識してゐるので、その言語と態度に一層胡散なところが見えてゐるのを、强ひて何氣ない風に裝ほひながら、言葉を鄭寧にして女の引越した先を訊ねると、今起き出たばかりで寢呆けたやうな顏をしてゐた小僧は、自分では分らぬと思はれて、奥に聲を掛けて、何かいふと、奥から寢起き姿のおかみさんが顏を出して、此方の問ふことだけを聞いて、あとは、たゞじろ〳〵と對手の顏を見てゐたが、

『あの方のお處は……えゝ、手前どもではよく知つては居りますが……一寸お待ち下さい。』

さういつたまゝ奥に入つたが、此度は主人と一緒に店に出て來た。彼は、こいつは、愈々樣

子が六ヶ敷くなつて來たぞと思つてゐると、主人は氣輕さうに、

『ゐらつしやい。あの、田口さんのお處がお訊きになりたいんですか。』

『え、さうです。』

『あの方の住所は、私共で分らないことはありませんが……あなたは、何方樣ですか。』といひながら、主人は胡散臭さうに彼の樣子を見てゐる。彼は此處だと思つて、此方でも、さつぱりした調子で、

『御心配ありません。あの婦人の一身上については、私の方でもよく存じてゐる者ですから一寸祕密を守らなければならぬわけのあることも承知して居ります。』

彼は何氣なき體に巧に言葉を繕つてさう言つた。すると對手の方でも稍安心したらしく、

『さうなんです。一寸譯があつて、私の方でも何方にもあんまり申さないやうにしてゐるんですが。』

『え、〳〵、それはよく知つて居ります。祕密にして置かないといけないのです。』

『と、あなたは、田口さんの御親戚でも?』

『え、、深川の兄です。』

いつぞや女から深川に兄がゐることを噂ばなしに聞いて知つてゐたことを、ふと思ひ出して出鱈目をいひながら、妹を妾などにして置く兄の身の意氣地なさを恥らうかの如き面持をしながらいつた。

すると、洋服屋の方では、對手が何だか惴々(おづおづ)してゐるのは全くその爲であると合點したらしく、夫婦とも段々打解けた顏になつて、

『あ、左樣ですか。田口さんの處はね、……つい此の間お引越しになつたばかりです。まだ一週間にもならないくらゐです。……×町×丁目四十三番地です。先のお宅……御存じですかさうですか……あそこの三四丁まだ先に行くと、左に折れて、すこし坂道になつたところを何處までもゆくと、大分いつてから一寸賑やかな通りに出ますからそれが×町です。そこの通りをまた左に折れて三四丁もゆくと、そこが×丁目ですその邊で一度お訊きになると四十三番地

は一寸横丁に曲つた裏通りで、その曲り角に甲州屋といふ呉服屋がありますから、それを目印に入つてゆくと、新築の家ですから、すぐ分ります。』

餘り委しく教へてくれたので、空では一々覺えてゐられなかつたが處番地さへ分つてゐれば大丈夫だ、あんまり長居をすると屑が出る。

『あゝ左樣ですか有難うございました。よくわかりました。早速これから探ねてまゐります。左樣なら。』

と、ドアーを押して洋服屋の店を出た。出て來た後で何と噂をしてゐるか分らぬと思へば、何だか後を蹤けて來られるやうな氣持ちがして、彼は近くの四辻に客待ちしてゐる車に早速飛び乘つた。それから知らぬ道は大分遠かつたやうに思はれたが洋服屋から聞いた甲州屋といふ呉服屋の前で車を降りて、四十三番地は何處かと訊ねながら、そのあたりを何度となく、ぐるぐる探し廻つたが、それより多い番地と少い番地とは幾らも眼に付いたが四十三番地はどこにも見付からないので、終には焦つたくなるとゝもに段々昨日からの疲れが出て來て探ねあぐんでゐると、其處からすこし飛び地になつゐる處に、やつと田口と表札を打つた新しい二階建ての家を發見した。門を入つていつて入口のところで靜に訪ふと、いつもの女中が出て來て、

『おや、いらつしやいまし。』

『奥さんは？　おいでゝすか。』

『もう一寸前にそこらを一とまはり散歩してくるからと仰有つてお出掛けになりました。でももうお歸りになる時分ですから、どうぞお上りになつてお待ちになつてゐらつしやいまし。』

若い女中は愛相よく上れあがれと云ふ。併しいくら構はないにしてもさうした境遇の女の住家に訪ねて來るといふのが既に好くないのに、女主人の留守に上り込んでゐるのは餘り思慮の無い仕方であると思つたので、

『でゐや、私もその邊を一寸歩いて、また出直しますから、奥さんが歸つたら、さゝいつて置いて下さい。お留守に上るのも失禮ですから。』

『なに、お宜しいぢやありませんか。お出ましになつてから、もう大分になりますから、上

つて待つてゐらつしやいまし。構ひませんです。』

女中は、水戸の方の女の遠い姻戚から來てゐるといふ田舍者であつたが、堅氣な旦那の好みが女主人にうつり、女主人の不斷の教訓がさうであると思はれて、至つて鄭寧な言葉でさういつて勸める。

『さうですか。でも上つてゐる間にもし奥さんが歸らない内にお母さんでも遣つて來たらいけない。』

『滅多にそんなことはございませんです。今日は多分ゐらつしやらないでせうと思ひます。』

『ぢや、一寸お邪魔をしてゐませうかね。』

といひながら、彼は少し大膽で、女の思惑もどうだかと思つたが、通されるまゝに二階に上つて火鉢の傍に寄つて煙草を燻らして待つてゐた。二階は八疊と六疊の二室になつてゐて、なか〳〵立派な住居である。

かうして待つてゐる間に女が歸つて來ないで、他の者が入つて來たらどうしようかと、そん

なことを思ひ過したりしながら、やゝ三四十分も待ちくたびれてゐるところへ、

『隨分待つてらしつたんですつてねえ。一寸そこらを歩くつもりで、つい長くなつて濟みませんでした。』

女が嬌笑しながら、のつそり階段を上つて來た。

『貴女の留守に上つてゐるのは、どうかと思つたのですけれど、私實は、もう、あれは一昨昨日の晩です。急に思ひ立つて京都まで行つて、昨夜彼地を乘つて、今朝はその歸途です。』

『あゝ、さう。』女は靜かにいひながら、

『どうして？　お逢ひになつて？』

『えゝ、一寸。それで歸りに急に貴女に逢ひたくなつたものだから横濱で下りてしまつたんです。』

『でもよく此處の家がお分りなつて、どこでお訊きになつて？　あなたの處へもお知らせしようともう此間から思つて氣にはしてゐたのですけれど、まだつい越したばかりで、何だ斯だ

と下らない用事があつたり後形けに忙がしかつたりして失禮してゐました。』

『先の家にいつたら、空家になつてゐるんでせう。これはもう、貴女に見限られたものだと思つた。』

『どちらが？』

『貴女が私を。……もしさうだつたら、どうしてやらうかと思つてゐた處です。』

『あゝれ……』女は輕く睨む眞似をして、火箸でちよつと男の方を突く樣子をしながら、

『だつて、あなたは厭あな事を手紙で仰有るんですもの。』女は拗たやうな甘い聲を出した。

『へえ、どんなことを？』

『どんなことつて。御自分でよく知つてゐらつしやるでせう。去年の暮にだつて、あんなことをいつてお越しになつたぢありませんか……私、厭。あんなことを仰有つては。』

『それで處を變つても知らせないといふのでせう。ですから、貴女の心はよく分りましたよ。そんなものですかねえ。横濱なんぞへ下車する時があつたら、もう一日京都にゐればよかつた。』

『えゝ、ゐらつしやればいゝのに。……そちらで憎らしいことを仰有るなら、此方でも申します。……それより貴郎此家を何處でお訊きになつて？』

『關内の洋服屋で訊きました。』

『それで洋服屋で、あなた御自分を何を仰有つて？　屹度、彼處で變に思つたにちがひない。』

女はさういつて、一寸考へる顏をした。

『あのまた、洋服屋がよくお分りになつて。……うむ家主で、あゝさう。……洋服屋の奴きつと變に思つてゐるに相違ない。深川の兄つて、深川の兄は向うで一寸知つてゐるんですもの。そんなことをいふと却つていけなかつた。』女は終を獨語のやうにいひながら、

『だれが居りました。おかみが居りましたか、亭主が居りましたか。……二人で、あのおかみが何でもすぐにいふ女ですから……構はない、分つたら、分つたその時の事だ。』女は遂々諦めたやうに云つてしまつた。

『大分眼に立つて來ましたねえ。』
男は低聲で話頭を轉ずるごとくいつた。
『えゝ、もう動くのがわかつてよ。』
『厭だなあ。』
『義母つてばねえ、あんな人でせう。出來る兒が女であればいゝと云つてゐるんです。自分が苦しんで產むほどならばねえ、誰れが女の兒なんか望むものですか。それを義母はそんなことをいつて。……あんな人に何も出來た兒の教育なんかを賴みやしないから。』女はまた終を獨語のやうにいつた。
『でも喜んでゐるでせう。』
『義母が一人喜んでゐる……あら、また動く。』女は口を噤んで顏を顰めた。
外は靜かな冬の日が照つて、二階の障子に明い影をさしてゐる。
『好い天氣が續きますねえ、さあ、もう歸へらう。どうです。東京に遊びにゆきませんか。』

『ほんとに好いお天氣ですねえ。……えゝ行つてもいゝけれど……』
『いきませうよ。そして御飯を食べませう。今日は私が案內します。』
『えゝ、ぢや歌舞伎座にゆきませうか。』女は浮いた調子でいふ。
『芝居はいや。觀たくないこともないけれど、あなたが遲くなるといけない。たゞこれから東京にいつて、何處か小奇麗な處で、ゆつくり御飯を食べるぐらゐが丁度好いんですよ。』
『ぢやゆきませうかねえ。』
それから女が顏を洗つたり、女中に手傳はして着物を着更えたりして連れ立つて出たのは、もうかれこれ二時過ぎであつた。
ステーションから、風の立たない靜かな街をぶらぶら歩きながら吳服橋を渡つて日本橋通の四辻から中通にぬけて、末廣の本店に入つた時分には、日の短い冬のことゝて、もう電燈が點つてゐた。圓髷に結つたお靜といふ女中に案內せられて二階のずつと奧まつた三疊の間に入つて落着いた。女は部屋を見まはしながら、

『私も隨分田舍者になつたものですねえ。此家は初めてゞす。ちつとも知りませんでした。うむ好いところです。』女は感心したやうにいつてゐる。

『だつて、すぐ此の近くにゐた人ぢやありませんか。』

『えゝ、ですけれど、それは十年も昔の事ですもの。併しその頃からもうあつた筈でせうがねえ、どうして知らなかつたか知ら?』

女は小頸を傾けて考へてゐた。彼女は仕込みの時分から十九になるまで五六年日本橋に居つたのであつた。

『尤も斯う繁昌し出したのは、あんまり古いことぢやないでせうから、或は知らなかつたのかも知れませんね。』

『私もいつまでも横濱なんかの田舍にゐないで東京に歸りたうございますねえ。東京はよござんすねえ。』

彼女は、男から受取つて小い酒盃を一寸嘗めるまねをしながら箸をも執らないで、そんなこ

とを話してゐる。小づくりな、そんな美しいといふほどの女でもないが髪が好いので、その頭髪の形一つで自分の三十女としての貫目を持たしめることを知つてゐる彼女はいつもその點に全力を注いでゐるのであつた。近頃は大抵束髪ばかりであるが、その束髪の流行すたりの急激な形の變化には斷えず細い注意を拂つてゐた。今日は先刻着た時にはじめて仕附糸をとつたばかりの生壁色の地に麻の葉形の小紋の錦紗の着物。濃紺の高尚な錦紗に裾の方にあらく細雨を銀絲で刺繍したコートを着てゐる。顏の地色も白い方だが、その上に尙ほ自宅にゐる時でも厚化粧の方なのに、外に出る時には一層塗る方だから、以前藝者などしてゐた者とは思へないくらゐ野暮らしくつて、その代りにどこか高等に見えた。

男は種々の珍らしい料理を取つて、

『毎時御馳走になつてばかりゐますから、今日は私が御馳走致しませう。』といつて、女に薦めてゐた。女はそれに少しづゝ箸を着けながら、

『これからどうなさるおつもり貴郎は。』

『どうするつもりつて。私は是から牛込に歸ります。』
『……』
『今から歸れば、貴女も早くかへれますよ。』
『さて考へてみると別に行つてみたいやうな處もありませんねえ。』
『さうですよ。私が知らないせいか、そこになると大阪や京都の方に却つてそんな處は多い。一昨日泊つた家なぞは好い所ですよ。一度貴女と一緒に京都までいつてみたいな。』
女はそれには答へず、何か考へてゐたが、
『どうです、これから私の家においでになるのはお厭？』
『いやぢやありませんが、折角東京まで戻つてゐるのを、また横濱へ引送へすの。』
『えゝ、でもあなたお疲れになつてゐるでせう。』
『昨夜寢臺でよく睡つたせいか、そんなに疲れてもゐませんけれど、これから貴女の家にいつて、そしてまた歸つて來るの。』

『宅へお泊りになつては？』
『いやそれはいけない。』
『二階にお一人お寢みになれば。』
女は抑へるやうにいふ。
末廣を出て來ると、さすがに冬の夜は、晝間の靜かさとちがひ、少し風立つて來た。けたゝましい響きを揚げて乾燥した空氣の中を電車が軌つてゆく大通りには、まだ宵の口ながら人脚稀れである。通四丁目の松屋の傍に客待ちをしてゐる俥が一臺しかゐないので、も一人呼んで來させて、其處から東京驛まで走らせた。
横濱の女の家に歸つてゆくと一人留守をしてゐた女中は嬉しさうに玄關に出迎へた。
『芳、今日はお客さまも御一緒だよ。お前がよく自家へお連れ申せば宜敗いぢやございませんかといつてくれてゐたから、それでお連れ申したんだよ。』女は好い機嫌でいふ。
『どうもお邪魔さま。』彼も調子を合はせた。

『おや、お歸んなさいまし。』お芳は微笑しながら云ふ。

『おかへんなさいましだつて、まるで家の人見たやうだねえ、芳。』

女は、はしやいだ聲でさゞめいた。（をはり）

春興

東京へも少しも早く歸らねばならぬのだが、それは此度小石川の方へ構へやうとする巢を造る準備のためで、たゞ春興を趁ふには、東京へはさまで歸つてみたくない。けれども是非一度は歸つて他家へ預けてある荷物調度の類を始末せねば、預つてゐる家でも迷惑してゐるであらう。しかし東京へかへるにしても、この春興闌の時に、飽いた東海道の車行を事務家のやうにして乘つてゆくのは、心から興會を覺えない。それで、私はまだ一度も通つたことのない北陸道から信越線を經て上野驛へ入らうと豫期してゐるのである。さうして考へて見ると、東京へ歸つて行く旅行もそゞろに樂しいものに思はれ、そゞろに旅情の湧いてくるのを感ずる。それで、近江の米原から先は清新な印象を以つて私に迫つて來るそちらの方の山河や都會の事など

を日日夢に畫いてゐるのであるが、さりとて畿内の春興にも背き難い。私の夢魂は夜な〳〵美しい、この五畿内各地の山川市邑にさまよひ歩いてゐる。四月の十七日、もう四月も半ばを過ぎると、名にし負ふ圖山の夜櫻は十日ばかりも前の美しい夢と散り、清水、嵐山の噂も追々遠ざかつてひとり御室の八重櫻が都城にゆく春の名殘りをとゞめてゐる。畫から御室へいつてみようかな。東京へ行く前に急いで濟まして置かねばならぬ文債に追はれて半日の暇も惜しいのであるが、畫癖も奉公とやら却つて御室あたりを歩いて來ると、あとは捗るかも知れぬ。と、遊意がむら〳〵と動いて來た。しかし御室も餘りめづらしくはない。とにかく洛中洛外の附近一圓はさまで清新な感興を與へさうにない。どうもそんなに氣が進まない。五畿内のゆく春を惜まないで、このまゝ東京に行つてしまつたのでは、多年夢寐に思つてゐた南河内の方の春を又今年も見ないで過ぎることになる。それが何よりも殘念である。ほかは兎に角南河内の方の春はぜひ一度見て置きたいと思つてゐたのに、どうかすると今年も行きそびれてしまひさうである。文債は二三日怠業にしてもよい、東京行が從つて二三日延期になつても、そのくらゐの

犧牲は拂つて、今一刻千金の南河内の春を見よう。年々歳々花相似たるも歳々年々人同じからず。又來年その地の春が見られるか、どうか分らない。さう思ひ出して來ると、今の機會をとり外づしたら、永久に捉へることの出來ぬ大切な物を取り逃がすやうな落着かない心になつて來た。明日など、いつてゐては、油然と湧き起つた此の感興が又消え失せて、あとは無興味な、冷い、仕事や時間の打算になつてしまう。今の此の感興に任せて騎虎の勢で起たねば興味がない。行きたいなあ。と思へば思ふほど、もうとても止められなくなつた。私は早速衣服を更め一時五十五分の京都驛發奈良廻りに乘るつもりで家を出た。もう二十五分しかない。まゝよ遲れたら、その次の三時四分でもよい。

柴門を閉ぢて花見に獨り者

河内の觀心寺

河内の觀心寺へ行つてみたいと思つてゐたのは久しい前からであつた。寺は楠氏累代の菩提寺で、南河内郡の東南隅金剛山麓の川上村に在り、本堂は特別保護建造にして寺寶に楠氏の遺

物數多あり、國寶も十數點に達してゐる。古い美術と、光輝ある歴史傳説と、美しい自然とが夙に私の憧憬の的となつてゐた近畿の名勝區の一つである。

滿員のを二つばかりやり過して電車の中で時計を出して見ながら車掌に訊くと、此處から平常は八分か十分で行けますが、今頃は滿員ですから十二分くらゐはかゝりませうが、きつと間に合ひますといふ。廣場の前で電車を下りて急ぎながら見るとステーション●ホールの正面の大時計はまだ四分ある。自分の懷中時計は丁度發車時間になつてゐる。乘車券を買つて改札口に驅けつけると、もう改札係りはゐない。

乘り遲れ食堂に入る春の旅

初から三時のにすれば家で晝飯を食べて出てよいやうにひとりで御馳走を拵へてあつたのだが、それを放つて置いて出かけて來た。腹もよい加減に空腹を覺えて來たので階上の都ホテルの食堂に入つてゆく。

乘車券を買ふ時關西線の柏原までと云ふと、賣り場の女事務員が、大阪廻りですかと訊ねたので、馬鹿なことを訊く奴だと云ふやうに奈良まはりです、と云つて、自分は先刻家で汽車の時間表を繰つてみた時から先入的に大和の方の春景色ばかり頭に浮べてゐたが、食事をしながら落着いて考へると、成程大阪を經ていつた方が遙に時間と錢の經濟だと氣が付いたが、いくら早くつて錢が少しくらゐ儉約になつても大阪を市内電車で通過することは遠州灘を渡るよりも恐ろしい。やがて湊町ゆきに乘込むと、こゝにも春は遍ねく丸髷に結つた茶屋女を連れた二三人の客が男も女も顏を紅くして大きな聲で狐拳をやつてゐる。此方の方では眼鏡を掛けた色の淺黑い、三十四五の、思慮のありさうな妻君が、男の子を三人に女中をひとり連れて腰掛けながら、そんな騷ぎを氣がついてつかぬやうに微笑を嚙みしめて外方を向いてあると、十一二を頭の男の子達がまた珍しさうにその方を見ようとしてゐる。眼を放つて窓外の遠景を眺めると、稻荷山から阿彌陀ヶ峰、音羽山一帶の東山は模糊とした春靄を隔てゝ、清水の堂塔知恩院の大甍が漸く色づいて來た新綠の間から幽かに隱見してゐる。眼近の鳥羽野の平野は一

圓麥の綠と菜の花の黃とでさながら柔かい絨氈を敷きひろけたやう。

奈良で客が殆ど入れ代つてしまうと、此處でも、いづれも五十を越した五六人の男が好い機嫌で瓢簞などを携へながら、どや〳〵と入つて來た。年增の茶屋女が二人附いてゐて傍若無人に大口などを利き合つてゐるのも春の旅と、私はそれを餘處に聞き流しながら携帶の旅行記や地圖などを繰り披いて見てゐた。

菜の花の中に城あり郡山。今は城はもうないが黃菜綠麥の春は永へに新らしい。奈良から乘つたその花見づれは郡山で降りてしまつた。法隆寺、王寺と春は殊にも長閑な窓外の景色である。停車場近くの水田ではもう若蛙が優しい啼き聲を立てゝゐるのも一入懷しい。私はそんな聲を聞き田甫の方から微かに春草の匂を吹いて來る軟風に頰を撫でられてゐると、かうして、つい此間まで寒威に虐げられてゐた自分の弱い生命が再び凡ての生物と同じやうに造化の惠みに浴し、一陽來復の悅びを享け樂むことが出來たといふことを、しみ〴〵と五體に遍ねく意識してそぞろに感涙の溢れ出づるを知らなかつた。春の日が葛城山脈の彼方に漸く春きかける

と、薄絹の如き白霞を罩めて大和の平野は次第に蒼茫として來て、麥浪の彼方には遠く吉野の山上ヶ嶽や大臺ヶ原山の頂が蜿蜒として天際に連つてゐる。西南の方には葛城脈の續きに金剛山も靉靆として峙つてゐる。初瀨や三輪の方の山も見えてゐる、法隆寺で汽車が何かの故障で二十分も停車したので豫定よりもひどく遲れた。私は遲れたらおくれてもいゝと思つてゐた。それが春の旅である。今晩は南河内の長野に行つてそこへ泊るつもりである。夜までに其處へ行き着けばよいのだが、時間どほりにゆけば五時三十八分に柏原に着いて、それから又すぐ五時五十三分の河南鐵道に乘り換へて一時間で長野に着く筈であるが、これでは一時間ばかり柏原で次の汽車を待たなければならぬことになりさうだ。實は丁度大阪平野の果てに夕陽が沈みかける頃の葛城山や金剛山の蒼茫とした暮色を左方の車窓から心ゆくばかり眺めながら向うに着かうといふ豫定であつたのに、此の上一時間遲れると、もう日が沈んでしまつて、すつかり夜になつてしまう。それのみが殘念であるが大和川の溪に沿うて大和と河內との國境を通過する頃の窓外の山の形やその樹林の布置や色はどうしてもまぎらふよしもない土佐繪である。そ

して丁度今時分に見るべき處である。此の派の開祖春日基光がいかに此のわたりの自然から學んだかといふことが思はれる。圓い輪廓を成した松の木山のところ〴〵に小さな山畑が切り開かれて、そこには今桃の花が眞盛りである。大和川の溪に臨んで窓に顏を出してゐると寒くも暑くもない軟かい春の風が香はしい嫩草の匂ひを送つて來る。

案の定柏原で一時間次の發車を待つてゐる間に、まだ二間ばかし地平線の上に殘つてゐた茫つとした夕陽も遂に麥と菜の花の野の彼方に沈んでしまつた。私は葛城山脈は、今日はもう見られぬものと諦めてしまつた。やうやく發車したマッチ箱のやうな悒き汽動車は臭い煤烟を吐き散らしながら暗の中を騷々しい音を立てゝ駛せる。薄暗い電燈の光では新聞も讀めないので、私は何だか明日にかけて今日の旅が醜い幻滅に終らねばよいがと云ふ不安に襲はれつゝ少しも早く長野に着きたいと祈つてゐた。最後まで一人殘つた老爺の客に教へられて、やがて長野驛に下車し暗い構内を立ち出でゝ足場の悪い道を探つて歩きながら、老爺に聞いたとある旅館に辿り着いた。宿は大阪附近でよく見る伽藍として薄汚い料理屋兼業の家で、

『風呂に入つて夕飯を食べて、一晩寢せてもらへばよいのだ。』

と云つて、風呂に下りてゆくと、長野温泉など、廣告してゐながら、二三日も取りかへないのかと思ふほどに汚れて臭くなつた湯がおまけに又微温い。こんな事で風邪でも引込んでは犬死するやうなものだと、倍々幻滅の豫感が本當になりかけて來たのを不快に思ひながら、その汚い湯に長く漬つてゐて座敷に戻つて來ると、女中が膳部を運んできた。鯉膾に鰆の煮つけなど大阪近くにきまり切つた御馳走だが、眼の醒めるやうな鮮綠色をした蕨の軟い風味は珍しい。

『こいつは好い。』

『たんと出來ます。』

明日觀心寺へ行く道などを訊きながら、丁度好い加減の空腹においしく夕飯を濟まして、やがて床の中に横ると、遠くの座敷で鄙びた三味線の音がしてゐるのを聞きながら、いつしか寢入つて了まつた。

翌朝七時頃にふと眼を覺まして、雨戸を閉めてない廊下の方を、枕の上に頭を捩ぢ向けて硝

子越しに見ると、外は濕つぽい陰氣な空模樣である。これは雨かなと思ひながら又蒲團を顏に着せ掛けてゐると、外の亞鉛の屋根にぽつり〳〵と音がしてきた。

そら見た事か。昨日の京都驛でたつた四分のことで乘り遲れた時から、何だかつけが惡いと思つてゐたのだ。それに乘り遲れたればこそ、法隆寺で二三十分も停車する列車に乘ることになつたのだ。その列車だから柏原で空しく一時間待つ間に日が暮れて、プログラムの一つに書き入れてゐた葛城、金剛の暮色も暗に沒して仰ぐに由なく、宿へは延着したゝめに一層風呂の湯が冷めて臭く汚れてゐだのだ。一刻の時も惜んで爲る事を颯々と形付けて早く東京に行かないから、こんな事になつてしまうのだ。此度の二日旅は時間と金錢を徒に消耗して代りに疲勞と不愉快と後悔とを贏ち得たに過ぎなかつた。蒲團の中で眼を瞑むつて、そんな事を忌しく思つてゐると、亞鉛に當る春雨の音は一入高くなつた。チエッ！　まゝよ、かうなつたらもう何處をも見ずに早速午前中京都へ歸つてしまはうと、さう諦めて尙ほ一時間ばかりも床の中に身體をのばしてゐて漸く起き上り、洗面所に行つて、冷水で體を拭いて戻つて女中が注いで出す

茶を啜りながら一本靜に吹かしてゐると、氣まぐれな雨は段々疎雨になつて明るくなつた。西北の空に碧いところが透いてきた。

『おや、晴れるぞ、これは。』

『おほかた晴れますやろ。』

『ぢや御飯を急いでくれ。』

九時頃になつて、女中に山裾の近道を案内せられて宿を立ち出でる頃には一と雨洗つたあとの散り殘つた山櫻や新綠の木々が麗かな旭日に匂ふてゐた。

女中に敎へられたとほり、道芝に置く露を踏み分けて間道を傳ひ、やがて本道に出ると。しるべ石が立つてゐて、右觀心寺道と刻してある。だら〳〵登りの坦々たる一條の街道、三十町ゆけば觀心寺、二里行けば千早の古城址まで迷はずつゞいてゐるのだ。丁度打ち水をしたほどの春雨の後の道が雪駄穿きに好い踏み心地に濕つて風塵揚らず、道の左右松の木山と山との溪澗に雛段の樣に重なつた山畑には麥と菜の花とが半々に黃綠を彩つてゐる。白い山櫻が松の木蔭

にまだ處々咲いてゐる。麗かに照り渡る朝陽に暖められた爽かな朝風が襟頸を撫でるやうに觸れる。私は幾度か佇立して美しい蒼空を仰ぎ、四邊の風景を眺めた。

塞翁が馬とはこれか日和運

まだ早いので人通りは稀れだが、千早の方から出て來るのであらう、雨傘を開いて乾かしながら下つて來る人間がある。薪木を積んだ牛車が下つて來る。下からは雜貨を積んだ牛車が登つてゆく。長い道を連れもなく上つて來た牛は遠くに自分の友を認めると、やつぱり懐しい狂はしい聲で吃驚すをほど吼えながら脚を疾めてゐる。三坪にも足らぬ小さい菜畑ば丁ど芝居の小道具のやうに麥畑の縁に介在して續いてゐる。

牛の脊に蝶むつれゆく河内路

やがて道の半分ほども來たあたりが峠の絶頂になつてゐて今まで溪の底に見えてゐた麥畑が此度は道の兩側に高く雛段を築き上げてゐる。農夫が襦袢一つになつて暖い春の日を浴びながら麥に土を培つてゐるのも長閑である。牛のもう〳〵吼えるのを聞きながら峠の辻を向うへ廻

りきると、そこには更に廣濶な別境が展開して來た。道はまた何時しか山の中腹を繞つて通じ、深い溪底には、そこにも麥隴菜畦の雛段が續いてゐる。崖に據つた白壁作りの家屋がその間に散點してゐて、山から引いた水車がキラ〳〵と春光に輝きながら長閑に廻つてゐる。その向ふに紀伊と河内の國境を走る葛城山脈が蒼空を劃して、春靄の奥に禿兀とした巖涌山の浪漫的な山容、紀伊峠の陷落した山嘴などが眉廂の下に集つて來る。やゝ左方に眸を轉ずると、溪の向うの眞黑に欝茂した杉の木山の重疊した一番高い處に金剛山の翠微が宛然藍を染めたやうに鬱鍵として東方の天に顔を窺けてゐる。擦り鉢の底のやうになつた溪の行き詰りには菜の花と麥畑とを繞らした人家が群つてゐて、向うの小高くなつた樹林の葉隱れに幽かに朱色の堂宇が見えてゐる。私は豫想外の仙境の眺めに恍惚となり、ステッキに凭つて憩ひながら、顧望やゝ久しうしてゐた。そこへ牛車を引いて私と前になり後になり上つて來て男に訊ねると、彼も亦た春日の下に牛車をとゞめて、私のために指し教へてくれた。向うに見える堂宇は卽ち楠家累世の菩提寺觀心寺であつた。金剛山は恰も寺を俯瞰せる如く雲際に屹立してゐる。この時私の頭

には、忽ち涙の滲もやうな崇美な歴史的感情が湧いて起つた。延元の昔は最早吾々には現實としてそれを認めることは困難になつた。けれどもそれは永久に美しい宗教的感情となり、古い繪畫の如き蒼古な藝術となつて吾々の心に尙ほ鮮かに生きてゐるのである。

容齋の武者繪に見たる五百年

かういふ感情が濡れるやうに私の胸をじつと包んでしまつた。

牛車と私とはまた山の腰を繞つた街道を遲々として辿つていつた。やがて菜の花の村に入つてゆくと、そこは川上村字寺元といふ處である。蜜柑やうで卵などを鬻いてゐる小店の並ぶ一と筋の道を行くと突き當りに觀心寺の寺務所の門が見えてゐる。そこへ入つて音なうと若い寺僧が玄關に行儀正しく畏つてゐて、

『拜觀ならば、そちらの塀の外を廻つてゆくと、大きな赤い門がありますから、それからお入りになつた方が便利です。』と敎へた。

云はるゝまゝに、また門を出て白い條の入つた薄茶色の練塀の外について今の道を又暫く先へ行くと果して四五段の石段の上に赤い大きな門が立つてゐる。正面のずつと高い所に先刻遠くの街道から見た形の好い御本堂が立つてゐて、そこまで上つて行くには淸らかに掃除のとゞいた小廣い庭を又幾階に仕切つた石段を踏んで上らねばならぬ。ともかくも門を入つて庭に立ち、第一に感じた印象は境內の廣袤といひ、いかにも愼ましやかに引締つてゐて、楠家累世の菩提寺たるに應しい淸楚な好感を抱かしめた。京都や奈良附近に在る昔の巨刹が帝室の權威を借り時の俗衆の財寶を搾つて傲然法權を弄して善男善女の弱點に君臨したやうな俗惡なる痕跡が認められないのが何よりも氣に入つた。庭に立つて眺めると右手の方の廣い庭園には數十株の八重櫻が瀾漫として今が丁度眞盛りである。左の方の二三段石段を上つた處には小さい寶物庫が立つてゐる。今日は日曜日で午からは遊覽者が相應に雜沓する樣子であるが、時間が少し早いので境內は靜寂として朝の雨のあとがまだ淸らかな砂地に潤うてゐる。頭を回らして溪の彼方を繞らした東西の山を見ると、そちらのほうにはまだ露けき曙の色が澱んでゐるかのやうで峰の中腹に數株の山櫻が夢のやうに白く咲いてゐる。一と筋の山道が山の腰を廻つてそこへ通

うてゐるらしい。

此方の八重櫻の蔭には老媼が一人露臺を張つて、まだ漸う〳〵茶を沸かす支度をしてゐる。私は、後村上天皇行宮の跡と誌された石牌の立つてゐる小さい池の前を眞直に正面の本堂の方へと石段を上つていつた。

當山は　文武天皇の大寶年中役の小角の開創にして雲心寺と號し、後弘仁年中弘法大師來つて大師一刀三禮の作本尊如意輪觀世音菩薩を安置し、寺號を改めて新に檜尾山觀心寺と名づけられた。爾來帝室御歷代の勅願所として御崇信あり、就中南朝の諸帝は殊に篤信深くあらせられた。今の御本堂は淳和天皇の時勅願によつて造營せられたもので特別保護建造物である。小さく引締つた建築で、屋根や軒端の勾配や線の感じが誠に快よい。一順拜しをはつて堂を下り、そこから右手の方に開けてゐる幽淸な境内を奥の方へと歩を運んだ。それでもゝう早い觀覽者が五六人來てゐて、何處かの女學校へでも行つてゐるらしい二十ばかりの娘とその母親らしい婦人が東京近い言葉で話しながら若い女連れと打ち群れて歩いてゐる。本堂とやゝ離れた處に

三重の塔が一重だけ出來て、草葺の屋根をしてある。延元年中楠正成三重の塔を建立せんとして成就しない間に湊川で戰死したので初重のみを存し、俗に建て掛けの塔と云ふと板札に誌してある。

尙ほ境内を東に數十歩行くと、弘法大師の法嫡道興大師卽ち當山開祖の靈廟があつて、その隣りに楠公の首塚がある。公湊川に戰死の後敵將足利尊氏が公の義心に感じて特に其首級を公の遺族に送つたものである。

墓前に一基の石燈籠が立つてゐて、それに中井履軒の書が刻んである。靑苔を撫して文字を辿ると、

忠　廻　斜　日　義　陵　淸　霜
楠　公　元　千　年　載　如　生

と筆致奔放に書いてゐる。私にも一句浮んできた。

楠公に櫻手向けん八重櫻

朝から感興に乘じて一里の山道を上つて來て、憩ふ間もなくまた興にまかせて境内をぶらついて疲れを忘れてゐたが、暫らく足を休めようとして再び寺庭を出て門前の茶屋に腰を掛けた。塀脇の往來をまだ何處までも辿つてゆくと此處から千早の城址まで一里半ある。遠くから見えてゐた金剛山は、折り重つた裾山に影を隱して此處からは見えないが、道は懐しい新綠の奥につゞいてゐる。

一服して又境内に戻り、寶物庫を拜觀しながらそこにゐた寺僧に事情を話して、一昨年高野山にゐた時十八年ぶりで會つた東京の學校で同窓であつた僧侶東條氏に當山住職にあて、貰つてゐる紹介の名刺を忘れたことをいふと、寺僧は快よく承諾して、更に庫裡の方から高野山在學中の若い僧を呼んで來て更めて懇ろに本堂から處々を案内せられた。先程殘した　後村上天皇の檜尾山陵にも若僧に案内せられて登拜した。陵は恰も楠公首塚の背後の山の中腹に在つて、蓊鬱として老杉古檜のそゝり立つた中を清淨に掃除された數百級の石燈を上り詰めた處に在

る。私は先年拜した吉野の延元の御陵よりも此方の方が一層幽寂の趣が深くして何となく床しい感じがした。

やがて繪葉書などを求めて寺を辭し、門前に切手を賣つてゐる家の店先に憩ひながら遠くの知人に繪葉書を書いたりなどしてゐると、大阪あたりから遊覽に出掛けた男女が絡繹として續いて來た。

今年の春では此の二日路の旅ぐらゐ清興を覺えたことはあるまいと思ふ。

（九年四月二十五日）

大和路の春

青丹吉奈良の古都のあつた大和平野は陽春四五月歩いてみるのに此の邊りくらゐ好いところはない。

その大和平野の到る處に點在してゐる千年二千年の古跡を見て歩いた時のその自然の印象を誌してみようと思ふ。

私が奈良を好いと思つた時は、大正三年の四月の末に奈良に來た時であつた。同じ土地でもその時々の季候、晴陰その他の關係で、印象が全く違つたものになる。

その時は四月の、たしか二十四日の夜遅い汽車で東京を立つたやうに思ふ。翌朝名古屋で關

西線に乘換へて奈良に向つた。四月の末といへば東京でも春闌けて、八重櫻がそろ〳〵凋れる頃である。東海道の夜行列車は遠參兩州のあたりで、もうほのぼのと沿道の野面が蒼茫とした狹霧の中に茜色に染められてゆくのを朧朦と人いきれに曇つた車窓の中から認める。暢氣な性質の人間は何時までも、列車の搖きを打ち消すやうな大きな鼾聲を揚げつゝ睡りこけてゐる者もあるが、大抵の旅客は、もうその頃になると、落々熟睡出來なかつた顏を上げてクッションの上に起き直る。私も昨夜はあんまり車室が蒸暑かつたり、またかうして晩春のゆくゑを趁ふて關西の方へ自由な旅行をする嬉しさに頭の心が昂奮してしまつて遂々熟睡することが出來なかつた。昨夜は從つて、凝乎と眼だけは閉ぢながら、窓枠に凭れてゐる頭の中では種々な事が綿々として考へられた。かうして東京から關西に向つて行く汽車の旅。顧みれば幾十度と數へられぬほどであるが、まだ學生時代暑中休暇で歸省してゐた頃を除き、爾來十幾年の間、嘗て一度たりとも、幸福な感を胸に抱いて汽車に乘つたことがなかつた。その理由は今此處に語る必要はない。たゞ毎時不滿足な、感傷的な、不幸な感情を抱きながら汽車に乘つていつた。その事

を、『あの時も、あの時も……』と、心の中で繰返して追憶してゐた。そして今度のこの旅行を從來の車行に比べてみると、確かに不幸な原因で旅するのでもなければ、感傷的な思ひを胸に抱いて乘つてゐるのでもなかつた。明かに今度の旅行は其等の忌はしき感情からは解放されたものであつた。たゞかうして汽車に乘つて、多くのさまゞ〳〵の旅人や自然を無心に觀察しながら氣樂な旅行をすることは從來の自分には稀れなことであつた。

參州の蒲郡あたりから、もう晴れやかな、明るい春の朝日影が窓硝子に一ぱい射しかゝつて、靜かな曙の狹霧の棚曳く彼方には眼の醒めるやうに靑く伸びた、海近い麥圃の上に漁船の帆柱が林のやうに立つてゐるのが見えてゐる。

やがて名古屋に著いたのは十時近いころで、そこから大阪の湊町ゆきの關西線に乘り換へると、もう氣分は自然に京阪地方に來た心持ちになつてくる。朝早い車窓の中から眺めると、眼も遙かに遠く開けた尾張の平野は見渡すかぎりの菜の花で、まだ昨夜の夢から覺めきらぬものゝやうに、うつとりと露に濡れそぼちてゐる。汽車は、遠くの下流に白帆の見えてゐる木曾川

の長い鐵橋を轟々と渡つていつた。私は東海道の車室と違ひ人氣少い車内に寛いでゐる睡眠不足の頭に自然に安らかな微睡を催してきて、いつとは知らずクッションにに凭れてうと〳〵としてゐた。そして龜山に來て參宮鐵道から乘り終へた旅客がどやどやと入つて來たので眼を覺まされた。僅の間眠つたのでも、それで頓に頭が爽快になつて元氣が回復して來た。今朝早く眼覺めてから無性に物憂く氣怠かつたのが、今は何を見ても十分なる興味をもつて受入れることができるやうになつた。龜山までは三四人しかゐなかつた車室が、大阪あたりから伊勢參宮の戻りらしい旅客で、さしもの廣い車室は滿員になるとゝもに、いかにも春の旅人らしい陽氣の談笑な聲がそこにも此處にも湧いて、文明の利器によつて運んでゆかれる伊勢參宮にも伊勢まゐりには伊勢詣りらしい昔ながらの一種の長閑な氣分が誰の上にもたゞよつてゐることを感ぜずにはゐられなかつた。

折柄四月の正午時。もう窓外は暑過ぎるやうな晩春の日が沿道の野山にちろ〳〵照り輝いて、ゆく手の右方にあたつて西北の天際に屏風のごとく聳へてゐる鈴鹿山の頂邊には墨を流したやうな雨雲が追被さるやうに盛に動いてゐる。車道は次第に上りの勾配になつて、喘ぎ〳〵進んでゆく列車の轟く響が四圍の山々に、けたゝましい反響を呼び起しつゝ深山の中腹を穿つて駛走した。

私はこの關西線の車行を好む。殊に鈴鹿山を越えてゆく時、木津川の溪崖を走る時の車窓の眺めが好きである。

車内の歡聲湧くがごとく、中にも四五歳ばかりの男の兒に羽二重の紋服を美しく着飾らせた、大阪の客とおぼしい若い夫婦がその兒を愛してゐる無邪氣な談笑につれてほかの旅客も覺えずそれにつり込まれて笑はされてゐる。どんよりとした花曇りの空から大粒な雨滴がぱら〳〵と窓硝子を斜めに打つて來た。小萬で名高い關あたりからは、それが暫く本降りになつて、窓外の野山はしと〳〵と春の雨に濡れてゐる。加太、柘植あたりの山中は何處やら函嶺に似たところがあつて、一入車窓の眺めがなつかしい。柘植を過ぎてから次の佐那具までは伊賀盆地に向つて一瀉千里の勢ひで馳せ下つてゆく。鈴鹿山中の雨もこゝまで來ると、いつしか明るくなつ

て、微温湯のごとき大粒の雨が、日の照つてゐる空の一方に尚ほたゝずんでゐる薄雲のあたりから落ちてゐる。盆地の野末にはあちらにも此方にも籬落が見えて、白壁つくりの土藏に春の日影がきらきらと映つてゐる。長い間山の中を分けて來た機關車の喘ぎと同じやうに何となく輕い壓迫を感じてゐた旅客の心が再び空の色と同じやうに明るくなつて來た。佐那貝は伊賀盆地の端にある。そこから次驛の伊賀上野までは一面の平野で、暖い春の雨に黄白の菜の花が湯氣に蒸されたやうに遠く近く煙つてゐる。

私は何となく此の伊賀の國を好む。俳聖芭蕉の生國であつたといふことも——卽ちこの詩聖の詩句の妙なる力によつて、この國の山河自然が深い懷しみを以つて私の心に映じてくるのもその一つの理由であるが、芭蕉の詩を通して觀ないでも、直ちにこの國の自然が一種の浮世ばなれのした雅味を備へてゐるのが早くから私の興を惹いてゐるのである。

列車は上野盆地の平野を横切つて春雨に烟る菜の花の中を駛走した。藤堂家の支藩であつた上野の城址は煙雨を隔てゝ菜の花の彼方に模糊として見えてゐる。やがて汽車が上野驛についてゐた旅客はいひ合はしたやうに吾れもわれもと硝子窓をあけて物賣りを呼び食べる物を買つた。

て停車すると春雨に降り罩められ

伊賀の上野から次驛の島ヶ原驛を一つ過ぎると、もう山城と伊賀との國境で、長いトンネルを向うへ出拔けると、其處は南山城の大河原驛である。伊賀川と名張川とを合した木津川の淸流は國境の山の間をくゞつて大河原の驛前に流れ出てゐる。そのあたりは關東や信越地方に見る如き高標のある山ではないが、しかし何となく山深い趣があつて、殊に大河原のステーションのある處は嶮岨な山が削立してゐる。車道はそこから笠置、加茂の二驛の間木津川の溪に沿うて西する。

伊賀上野から島ヶ原あたりの汽車の窓から眺めると、雛段のやうになつた山の上に人家が群がつて、いかにも泰平な相を備へてゐる。あの溪山の趣は、月ヶ瀨卽ち名張川の溪谷をはじめ此邊一帶の山河の特徴で、同じ山中の住居でも關東地方の如く險惡粗豪な感じがなく、優雅温藉な趣が深い。かなり高い山の上まで田畑が開かれて、そこに白壁づくりの土藏などが麗かな

日光に浴しながら、片山里の春を享樂してゐるのは、餘所目にはさながらの桃源鄕である。

木津川の碧流に沿うた車窓の眺望はまた最も私の愛するところである。その時伊賀平野で晴れたと思つた春雨は、汽車が木津川の溪崖を駛走してゐる時分になつてまた降つてきた。天の一方では明々と日が照つてゐるのに、暖い雨は斜に西から東に向つて降つてゐる。油を流したやうな碧流の淀みに點々波紋を描いてゐる。すると柴舟が一艘激流に逆つて漕ぎ上つてゐる。磊々した岩石の上を這つて一人の男が遠くから網を引いてゆく。一人の男は棹を操つて岩を突張つてゐる。一人は蛇の目の傘を翳して舟の中に立つてゐる。明るい春雨が斜めにそれに降りそゝいでゐる。何といふピクチュエスクな光景であらうと思つて、私は汽車の窓から、いつまでもそれを見送つて居た。雨は笠置驛あたりから又止んで、加茂驛に來る時分には長閑な春霞が向岸の南山城の綠麥の野を白く罩めてゐる。その次が木津で私はもう奈良に近くなつたと思つて、飽かず眺めてゐた窓外の景から眼を轉じて立ち上つて旅鞄を形づけたり帶を締めなほしたりした。

奈良に着いたのは三時ごろで、今晩の宿はどこにしようかとあれかこれかと汽車の中から考へてゐたが、ステーションで車夫に訊くと武藏野は今廢業してゐるといふので、どこでも可いことにして公園の菊水に行つた。

それは大正三年四月の二十五日のことで、長い春の日も、宿について少憩して、入浴したりなどしてゐるうちにぼつ〳〵暮れかけて來た。私は今一刻千金の、此の古都の行く春の日を宿の座敷に唯じつとして過すのが惜しくつて公園の方に出てみると、すぐ前の南圓堂の方では高らかな聲を揃へて御詠歌を合誦してゐるのが聞えて、それに和する敲鉦（たゝきがね）の音が靜かな夕暮の空氣の中に濕やかに響びきわたつてゐる。習々（そよく）と吹く風につれてまだ咲き殘つてゐる山櫻の白い花片が、下をゆく袖にはら〳〵と散りかゝつた。一體東京の櫻花の華美なのに比べて畿内附近の櫻は多く山櫻で、東京の花の、葉よりも先に花を開くと異り、葉の芽ぐむのと同時に花を開く。それが東京の花とちがひ濃厚でなくして淡彩である。

さながら古都の情調にふさはしい厭世的な敲鉦の音と詠歌の聲は、それらの薄らさびしい山

櫻の花びらに震へるやうに黄昏の空に浸みて傳はつた。

公園の中を一とまはりして戻つてくると、二階の方では陽氣な三味線の音がして、大勢の客がそれに伴れて流行歌を唄つて騒いでゐる。三味の音にも歌の調子にも明かに、今自分は京阪に近い奈良に來てゐることを意識せしむる上方の音が歴々と感じられた。そこへ女中が夕飯の膳を運んできた。膳の上には蟹、烏賊のおつくり、鰆の吸物といふやうな、上方式の品の數々が載せられてあつた。

あまりに執固くやられると、いつも下品で厭になつて反感を起さしめる上方式の散財の聲が、今日は、いかにも京阪の春らしい氣分をそゝるのであつた。私は飲めない酒を命じて二三盃あけながら靜にその情調に浸りつゝ夕飯を濟ました。

翌日は春日神社から三月堂、二月堂、大佛の方を一順めぐつた。その時春日神社の丹塗りの本殿の近くに今を盛りに滿開してゐた八重櫻を見た時私は、

古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな

といふ古歌を思ひうかべて、その櫻の傍に稍しばらく立つて見てゐた。牡丹のやうな八重の花瓣には蜜蜂がうん〳〵唸りながら花から花へ飛び移つてゐた。その唸る聲に盛んな晩春の日の氣分が表はれてゐるやうに思はれた。

けれどもその時私はいつまでも奈良に逗まつてゐることは出來なかつた。その日の中に中國の方の鄕里まで歸着する豫定なのであつた。私は午前の汽車で大阪に向つた。

法隆寺の塔宇は汽車の右窓から北の方の松丘の麓に見えてゐる。去年——大正二年の五月にそこに行つたことが思ひ出された。それは五月の二十日過ぎであつたが、麥の野は最早大分黄色に熟して、清々しい初夏の風が南に見えてゐる金剛山の方から吹いて來た。その頃の季節の魁をする燕が嬉々として、私の乘つてゆく俥の前路を遮り、地上に腹を附着けるやうにして飛んでいつた。法隆寺へゆく野道の溝を干して里の子供等が鮒や泥鰌を漁つてゐた。——去年の五月の時分のことを思ひ浮べて、種々な回想に耽つた。そのころは私は主に大阪にゐた。そし

て去年の十月二十四日の晩梅田から汽車に乘つて東京に歸つたきり、約半歲ぶりに關西に來たのである。關西には未だ〳〵見殘してゐるものが多くある。明治二十七年に東京にいつてから、東京では正月を二十幾度迎へてゐるが、そのくらゐ東京及び東京附近のみを見てゐて、あまりに關西を見ることを忘つてゐた。關西では凡ての物が私に新しい興味をそゝるのである。

そんなことを思ひつゞけてゐる間に汽車は生駒山の南方大和川の狹隘に入つて大和平野から大阪平野に向つて出ようとしてゐた。

その翌年大正四年の四月の二十五日(?)にはまた私は奈良西の京の古寺を巡拜してゐた。その時は京都に長く足を逗めてゐたので、その前日大阪に來て一泊し、翌日大阪から電車で生駒山を通過して西の京の古い寺々を見て歩いた。四月の二十五日であつたが、まだ櫻によつては滿開であつた。西大寺の境内には今眞盛りに咲きこぼれてゐる櫻が古い御堂の傍に立つてゐるのが、華かなそして永久に新しい自然と千數百年の過去の遺物との對照をまざ〳〵と麗かな春光の漲る中に表現してゐるのが、私には名狀しがたい佗しいやうな懷しさを感ぜしめたのであ

る。私は麗々と照り輝く春の日を浴びながら、眞靑に伸びてゐる麥圃の中の里道を傳で秋篠寺、唐招提寺、新藥師寺と歷訪してまはつた。尼さんの住んでゐる法華寺だの、平城宮址などをも見て廻はつた。暖く軟かい春の風の吹いてゐる中で田圃の麥に土を培つてゐる農夫が不思議さうに背を伸ばして鍬に凭れながら、見知らぬ旅人が麥圃の畦を傳うてゐるのを何時までも見守つてゐた。

唐招提寺から新藥師寺までは近い。そこらは皆昔寺院のあつた跡で、跡形もなく崩壞した築地塀の中から散り際の櫻が下をゆく車の上にはら〳〵と落ち散つて來るのも物悲しかつた。

新藥師寺の紫銅の鑄造佛の優秀無比なるは觀る人、何人も讃嘆驚異の聲を放たぬはないであらう。私はさうして、晩春の日を一日西の京の古寺順禮に費し、長い春の日が漸く生駒山の上に傾きかけようとする頃法華寺を最後の打ちどめにして再び西大寺の電車停留場に向つて俥を田圃道に走らした。晝間は薄暑いくらゐであつた陽氣も日脚の傾きかゝるとゝもに冷々とした夕風が麥圃の上に吹いてきた。道傍の苗代や水田の中ではもう蛙が鳴いてゐた。物懷しい何處

か安息の場處を求めてゐるやうな心地をそゝるその鳴き聲を、私は俥の上で聽きながら、『あゝ早く京都の宿へ歸つて靜に落ち着きたいものだなあ。』と思つた。しかし京都に歸つても、畢竟そこも自分の最後の落着き場ではない。私はつく〴〵さすらひの悲しさを感ぜずにはゐられなかつた。

その翌年の五年と六年とも關西には來たけれど、いつも京都にばかりゐて大和平野には遂に來なかつた。そして七年の五月にはまた來た。その時は五月の四日の朝吉野を志して京都を立つた。そして行々初瀨の觀音に賽し、夜に入つて吉野に着いた。その日は午前から厭に南風が吹いて蒸暑かつたが、私は四月の二十九日に東京を立つ十日ばかり前から輕微な風邪に罹つて、それが何時までも癒らず、どうかすると時々輕い發熱をしてゐた。少し熱氣のあるところへ搗てゝ加へて心持ちの惡い南風がざはめいて、蒸熱い空氣が恰も自分の體温のさしひきのやうに息を吹いた。初瀨の觀音の長い廊下を一つひとつ石燈を踏んで上つてゆくと、じとじとゝする心地の惡い汗が出て着物の袖口や襦袢の襟裏が肌にべた〳〵附着いた。廊下の傍に栽

培してある初瀨の名物の一つになつてゐる牡丹の葉枝を時々どつと息を吹いて來るやうに颱風が搖つていつた。蒸暑い風の合間々々に絹絲のやうな細い雨が降りそゝいでゐた。鬱蒼とした初瀨の山の木々が颱風に煽られて白い葉裏を輝かしてゐるのが疲れた私の眼に眩しく映つた。何ともいひやうのない疲勞を感ずる日であつた。もう春が過ぎて初夏になつたのだ。物憂い夏が間近く迫つて來てゐる。はじめて詣うできて見た今日まで子供の時分から長いながい間美しいイリュウジョンの中に描いてゐた、西國八番の札所なる初瀨の觀音でその美しいイリュウジョンを現實に見出すことが出來ないのにやゝ失望して、少しも早く吉野の奥に入つてみたくなり、一向行程をいそぐ氣になつた。再び初瀨輕便鐵道で櫻井まで戻つて來て、其處から、高田ゆきの汽車に乘つた、二等の車室には私の外に大阪あたりの、女好きと思はれる六十格好の頑丈づくりの老人と、三十を一寸出たくらゐのお妾とも見える二人づれがあとから入つてきた。彼等は初瀨觀音へ牡丹を見かた〳〵參詣した歸り途と思はれた。この邊は大和平野の中心地點になつてゐて四方翠綠の山陵を以つて環らしてゐる地勢は、九州の地から遙に東征せられた皇祖神武天皇

が此の國に都を奠めたまふたに不思議はないと肯ける。海岸を持たぬ國土としては此の大和平野くらゐ平濶な面積を有してゐる地點は日本全國に少いであらう。大和平野は四方山嶽を繞らして自然に一つの城廓をなしてゐる。右窓からは大和三山の一つなる耳成山が見えてゐた。耳成山の附近に『冥途の飛脚』での香久山は左窓に見えるその少し先きに畝傍山も見えてゐた。天名高い新ノ口村がある。『梅川忠兵衛』は近松が架空の作であるにしても大和國の百姓のモデルを新ノ口村にとつたのは頗る面白い。この邊は大和國の農業の中心地域になつてゐるから、自然類型的にも忠兵衛をこの邊の人間にするのが妥當であつた。

私がさうして汽車の窓から左顧右眄してゐる間にも西南の金剛葛城諸山の方から吹いて來る颱風は一面の麥圃に青葉の波を揚げてゐる。平野の北端をなしてゐる法隆寺のあるあたりは遠く白い霞の彼方に隔たり、生駒山の圓かな輪廓さへも殆ど霞に隱されてゐる。野の上には春の女神が經うてゐるのか、白いヴェールのやうな霞が手にも觸はれさうに漾うてゐる。畝傍も耳成も天の香久山も、初瀬、三輪の山々も悉く白い霞の衣を被いでゐる。

高田驛に着くと、そこから關西幹線の王子驛から和歌山にゆく列車に乘り換へる。それから吉野の驛までは大和平野の西南方の境を劃してゐる葛城山脈の東麓に近い平野を南に駛せてゆくのである。その線路の右窓からは其等の山脈が手にとる如く見上げられる。近松の作で忠兵衛と梅川とが人目を忍び〳〵生國の大和へ落ち延びたといふ竹の内峠は葛城山脈の北端に峙つてゐる二上山の腰をめぐつてゐる通路なのであつた。葛城山の裾野に據つて家居をしてゐる、あの平和なる籬落を繞る夕煙を見よ。折から長い春の日は山脈の彼方に春ぎそめて行く手の金剛山から壺坂の方へかけて大きな虹の橋が架つた。

長命寺の夏の月

今歳は祇園町の畔に住んで京都の春にあひながら、都をどりにたゞの一度もゆかなかつた私は、却つて東近江の菜の花の野の果てに立つてゐる三上山に登つて湖水の春を眺めた。昨日は叡山を下つて久しぶりに京都に入り明日明後日に近づいた祇園會を待つ四條通りの夜の賑はひを見たが、京洛年中行事の最大唯一のその宵山を見やうともせず、京都に二た晩泊つた翌朝早く三條大橋終點から京津電車に乗つて再び京の街を去り、大津から湖水に浮んで琵琶湖の東岸にある奥の島に遊んだ。

先月の末湖水探勝に出掛けた時に奥の島の長命寺に寄航して、山の形といひ湖面に聳ゆる比良山の遠望といひ、湖水の景を賞するには此處が最も優れてゐることを知つて以來、ぜひ一度

月のある晩にかさねて此處に來て見たいと思つてゐた。石山の秋の月が八景の一つになつてゐるが、私は奥の島の長命寺の方が月を觀るには遙かに優れてゐるにちがひないと思つた。それで月のある頃を待つて再び長命寺へと志したのである。

奥の島は、琵琶湖を假りに南北に三分して中央部の南端、最南部の北端くらゐにあたる湖水の東岸にある琵琶湖中最大の島である。僅に一葦の水路を境して陸地につゞいてゐるが島は島である。蒲生郡に屬し、陸地と東西に相對して奥の島の入江を擁してゐる。その入江は可なり大きくつて、丁度奥の島くらゐの面積をもつてゐる。入江の東南部に突出せる兵陵は織田信長の城址安土山である。奥の島は遠くから見ると四つばかりの整つた峰になつてゐて、南のはづれの峰の西南面の中腹に西國三十一番の靈場なる姨綺耶山長命寺がある。その北の峰が一番高峻で比叡山下の阪本の方の水の上から見ると、そこから大分南の方に屹立してゐる三上山と殆ど同じ高さに見えてゐる。それはこの地方で中庄山といつてゐるが或は三上山より高いかも知れぬ。島の西北の水上にはまた沖の島といつて大きさ奥の島に次ぐ島が横つてゐる。島と島との最短距離

は二十町くらゐのもので、湖峽の水上から前後の島を見渡したあたりは琵琶湖沿岸中最も風光明媚な地點である。竹生島の世にも珍奇を極めたる島なることは東海の江の島にも優れてゐるが、その紺碧の水中に岩を築き上げて出來てゐるところといひ、周廻一里にも足らぬ島に一面無數の種類よりなる樹木や竹林が鬱生して、それが紺青の水に靜かに影を沈めてゐる有樣といひ、どうしても西洋畫の描寫を待たねば描き表はせぬ色彩であるが、竹生島の珍奇に比べて奥の島は遙かに瀟洒であつて、西洋畫よりもむしろ日本畫にふさはしい景色である。

水路を彦根の方から來て、愛知川の河口を過ぎてゆくと、島の北端部が別に、松林に蔽はれたる獨立の丘陵を成して北に延びてゐる。それも本當は奥の島から狹い水によつて離れた島になつてゐるのである。その翠綠の島と奥の島とによつて抱かれて灣入してゐる水の上に山の影を醮してゐる。右舷には沖の島の水際に磊々と轉がつてゐる岩つゞきの汀が見えてゐる。そのあたりから段々湖峽に入つてゆきながら奥の島の山を眺めたところは、どしても文人畫中の景である。そして山の形がいかにも柔かである。木もあるが大部分は伐つたあとの草原で、とこ

ろどころに大きな松が殘つてゐて。大きな竹籔があつたりするのが殊に文人畫の趣を見せてゐる。今私のゐる比叡山の山から好く晴れた穩かな日などには光つた水の上に其等の島が影を映してゐるのが遠く眺められる。

琵琶湖の景が、いかに比良山によつて生きてゐるかといふことは、一度び湖水に浮んだ者の必ず首肯することゝ思ふ。東北の方にあたつて伊吹山や北美濃の國境に聳えてゐる金糞が岳を遠望することが出來るし、湖水の中心點にある多景島、沖の白石あたりの水上から彦根の城閣の眞東にあたつて古の不破の關の上に聳へる靈仙山を望むことも出來るが、それ等はいづれも距離が遠過ぎてゐる。しかるに比良岳はひとり湖水の上からのみ仰ぐべき山である。此の山は特に琵琶湖の風景を完全ならしむるために出來てゐるとしか思はれないくらゐである。けれども湖水の北半部以上奥に入つてゆくと、もう比良山の眺望はそのあたりの景致の主人公ではなくなつて來る。寧ろ竹生島の北方、湖頭の方に突出してゐる越前境の山脈が眺望の眼目を成してゐるかのやうである。さうすれば比良岳は湖水の中央部のみに特に生きてゐるのである。そし

てまたこれを湖の西岸をめぐりながら眺めると勿論惡くはないが、水蒸氣の關係などで、どうかすると稍距離が近過ぎるやうに思はれることがあるが、奥の島から野洲川の河口あたりの水上から仰いだのが最もよさゝうである。その澄からは距離が遠くもなく、近くもない。屏々として湖西の天に巨象の背の如く横はつてゐる山の全景を一時に双眸に收めることが出來る。私は此の前湖水を一とめぐりした時に既にそれを知つて、比良岳は奥の島から野洲川の河口に到る間の水の上で見るべきものと思つたので、その時の山の表はしてゐた感情が餘りに好かつたので、もう一度それを見たいと思つてゐた。奥の島は卽ち比良山の眺望によく、湖上の月を仰ぐにも好いのである。比良の暮雪を眺めるにも此のあたりが從つて最も形勝の地點である。

大津から堅田あたりまでの湖面の眺望ほ度々見飽きてゐるのみならず極めて平凡なので、私は船室に降りて行つて他に相客のない氣樂さ、着物を脱いで携帶の浴衣に着更え、今朝この汽

船の間に合ふやうにと思つて早起きした、その埋合はせに暫らく横になつて眼を瞑つた。時々丸い船窓から覗いてみると船は穩なか水の上を北へ北へと滑べつて、自分の滯在してゐる叡山が薄化粧を施したやうな白霞の彼方に清楚な夏の姿をして立つてゐる。阪本を過ぎて堅田に來てから私は起き上つて船尾の甲板の上に出た。乘客は今日は殊に少く凡て〻六七人くらゐのものらしく、それも甲板にゐるのは僅に三四人で、私は莚の上に腹這ひになつて兩手に顎を支へながら水を眺めてゐた。前にもいつたやうに琵琶湖は堅田から奥に入らねば景致は富んで來ぬ。船が堅田を出て野洲川河口の三角洲（デルタ）を廻はつてゆく頃から眺望は優れてくる。野洲川の三角洲は幾つにも分れて、洗つたやうな白砂の岸に小松を涵しつゝ流れてゐる。叡山の私の室の机に凭つて眺めてゐると、空氣の澄んだ日などには遠く水に斗出した靑松白砂が小さい三保の松原か、天の橋立のやうに見えてゐる。その沖を通りながら船の上から見渡すと白い砂で緣をとつた小松原の遠くつゞいた上から三上山がぬうと富士山のやうな姿を見せて立つてゐる。三上山はどうしても廣重の東海道五十三次に出て來る山である。丸善のアテナインキを塗つたやうな

淡い藍色をして、野洲川の三角洲の白砂靑松を以つて山の裾の方を隱されてゐる具合がそのまゝ一幅の活畫圖である。私の傍にゐる客はいづれも此の近在の小商人（こあきんど）か何ぞと見えて汚いなりをして無雜作にそこに寢轉んでゐる。私は肱を枕にして或は横になり、或は兩掌を組み合はせて頭を載せて仰向けになり、雲を仰ぎ比良を望んだ。船の傍を一ぱいに帆を上げた和船が行きちがひに大津の方に向つてゆく。湖水では北風が吹くと晴れとしてゐる。さういふ日には白帆がどちらを見ても水鳥の群のごとく浮んでゐる。甲板の上に仰向けに寢轉んで見てゐると、その白帆の高さが比良岳の頂きまでとゞいてゐる。そのうち距離が隔たると、次第に低くひくゝなつて遠くに流れてゆく、野洲川のデルタの沖まで來ると、比良山は眞正面にその全姿を表はしてくる。今日は山の六合目くらゐの處から上に水平線を劃したやうに白い雲霧をつけてゐる。

長命寺に着いたのは十時で、大津を八時に出て二時間で來てゐる。棲橋の方を船の上から見ると、多勢の人が群つて何か祭禮でもあるらしいと思つてゐると、上陸してから、それは長命

寺の千日の御縁日であるとわかつた。毎年七月の十四五兩日が千日で近在近郷からの參詣人が身うごきのならぬまで雜沓するさうである。石段にして八百八段、六町あるといはれる山の中腹の寺のある處まで私は其等の群集の中をわけて石段を一つひとつ登つていつた。比叡山の僧侶眞島氏及び錦氏から長命寺の僧侶妙覺院の武内氏にあて、紹介狀をもらつてゐたので、その人を訪ねつゝ上つてゆくと、石段の途中で一人の僧に會つたので妙覺院を訊くと、妙覺院はまだ、ずつと下の方であるが、武内氏は上の本坊の寺務所にゐられるといふことで、私はまた身體に流れる汗をふきつゝ上つていつた。寺務所について武内氏に會ひ紹介狀を渡して座敷に通された。そこでしばらく一と息入れてから武内氏に案内せられて觀音堂へ參詣をした。

武内氏は去年まで阪本の叡山の天臺宗大學にゐて、此處に歸山後漸く二十歳を越したばかりの若年の身で一人きり此の僧房に寂しい生活をしてゐるのである。普通の俗人ではとても堪えられさうもない生活であると思はれるが、叡山直屬の天臺宗の僧侶には殊にさういふ生活をしてゐるのが多いやうである。

五時頃になつて、寺の下の湖水の方でブウと汽笛の音がした。その日は十五日であつたので湖水めぐりの汽船が寄港して來たのである。武内氏は其等の島めぐりの參詣者がやつて來るので『そのうちに湯が湧きますから、どうぞお入り下さい。私は直き下りて來ますからそこらを又案内いたします』

といつて、再び八百八段の石段を上つて寺務所の方へいつた。

私は、やがて風呂が出來たと案内せられたので、筧の水の流れ落ちてゐる傍の青天井の下に据ゑられた風呂に入つて、行水をつかひ、一日の汗を洗ひ流して蘇生したやうな氣持ちになつた。

下の棧橋の方で汽笛が二度も三度も鳴つて、その日がへりの湖水めぐりの乘客に乘船を促してゐるのがけたゝましく聞えてゐる。觀音堂まで上つていつた參詣人がぞろ〳〵石段を下りて船の方へ戻つて來るのを出て見ると、暑い夏の日は比良山の北にまだ入り殘つて刺すやうな强

烈な光線を水の上に投げてゐる。

武内氏は戻つて來ると、松が崎の方に行つて見ませうといつて連れ立つてそちらの方に出て見た。松ヶ崎はは長命寺の山の裾が西北に向つて岩の多い鼻を突き出してゐる處である。汀の岩の上に立つて向うを見ると比良山が日没の殘紅を背にして夕暮れかゝつてゐる。少し雲が出て來てやゝ暗くなつた沖の方から冷風が吹いてゐる。

夕飯を共に濟まして、今宵は十五夜を三日ばかり過ぎてゐるので、九時頃になつて東の山の端の明るくなりかける頃を待つて、船に乘つて見やうといつてまた棧橋の方に下りていつた。月は今丁度八幡山の頂を離れかけたところで、十八日の月はもうやゝ缺けて陰氣な色をしてゐるが、それでも段々上の方にさしのぼるにつれて月色は增して來た。船は漣に搖れてゐる月の影を亂して沖へおきへと漕ぎ出でた。向うの方の水の上で土地の若者が酒でも飲んでゐるか、大きな聲で放歌してゐる、夜泊の漁舟があつち此方に燈火を滅して暗い波の上に靜に搖られながら眠りに就かうとしてゐる。私達の舟は松ヶ崎の鼻をめぐつて、奥の島の山の輪廓を双眸に收

めるところまで乘り出していつた。北の方から吹いて來る風はやゝ強くなつて、大きな波が船首に向つて逆つて來た。月の空には雲が消えてはき湧き、湧いては消えた。私は、

雲折々人を休める月見かな

といふ古句を思ひうかべた

比叡山から琵琶湖へ

お姉さんと房子さんに、

この間からまた二三日琵琶湖の方へ遊覽に出かけて行つてゐて、留守中に來てゐた貴女がたのお手紙を昨日比叡山に歸つて拜見いたしました。此の春も伊勢參宮の歸途三井寺、石山寺の方へ見物に來たので、この夏はとても出られないとの御事情御尤と思ひます。なるべくならば私が比叡山に滯在してゐる間においでになれば、序に琵琶湖も案内して上げるのだが。琵琶湖は春にお姉さんが見た處だけでは、とてもほんとうに美しい處は分らないよ。私もこれまでは、湖水はずつと奥に入らねば好くないと聞いてはゐたが、一度見にいかう〳〵と思ひながら今日までゆかなかつた。今度はじめて行つて成程と感心した。それで、まだゆかないあなた方に

その琵琶湖や比叡山のお話しをしませう。

お姉さんは、春に來た時唐崎の松まで見て來たといつてゐた。そして唐崎の松は評判ほどよくなかつたといつてゐた。それはさうも云へる。一體あの松は、唐崎の夜雨といつて、夜雨などの降つてゐる時に靜に眺めるのに好いとせられてゐるので、そんなことは、お姉さんなどには何うでもよからうと思ふ。けれども私も、松はなるほど古い松だが、湖水ももうあの邊は水の色も汚く濁つてゐるし、その附近が一帶に風雅でなくなつてゐるから、お姉さんが好くないと思つたのも無理はないと思ふ。芭蕉といふ昔のえらい俳諧師が、

唐崎の松は花よりおぼろにて

といふ句を讀んでゐるが、その人は石山寺の奥の山に永い間住んでゐて、湖水のその邊の風景が殊のほか氣に入つてゐたのだ。それで石山から大津、三井寺、堅田のあたりまでの俳句は多いやうだが、奥の方の景色を讀んだ句はあまり無いやうだ。今から二百年も前のことだから、その頃は湖がまだ下の方でも好かつたのであらうと思ふ。俳句のことなどはお姉さんには、わ

かるまいが、房子さんはなか〳〵の才女だからお姑さんによく話して訊かして下さい。

『唐崎の松は花よりおぼろにて』といふ俳句は、女でも讀みさうな美しい句ですが、二百年も前にはあの松も今のやうに半分枯れてはゐず、まだ〳〵生々としてゐて葉なども繁り、綠の色美しく、清い蔭を翳して、春の宵などには花よりも綺麗に霞を罩めてゐたのでせう。比叡山の、私のゐる、卽ち根本中堂、寺の本堂のある處から唐崎の松までは四十町——ちよつと一里餘離れてゐるが先達てお姉さんが、唐崎まで來た時に、比叡山に登るのは、あそこから登るのだと訊いたといふ、手紙に書いてゐる阪本の麓から寺のある處まで二十五町の上りで、丁度その半分の十二三町の處に休むところがあつて、山と山との谷合から唐崎の松が一目に見下される。そこで、これも何百年の前に比叡山にゐたお坊さんで慈鎭といふ人が、かういふ歌を讀んでゐる。

唐崎の松は扇の要にて
漕ぎゆく舟は畫繪なりけり

山と山との間が丁度扇の形に開いてゐて、そこから湖が見える。その扇の要のところに唐崎が見えてゐる。そして水の上をゆく舟がまつたく繪のやうな具合になつてゐるのだ。

比叡山のうへからは湖はよく見えるけれど、あんまり高く離れ過ぎてゐて、白くブリキかなんかの板のやうに光つてゐるばかりで、美しい水の色や汀の景色などを見るにはよくないが、私の今借りて入つてゐる部室からも、本を讀みながら机に肱を突いてゐて大きな杉の樹の林の間から湖が見渡される。汽船や帆船が遠く動いてゐるのも見える。汀につづく青田や人家も見えてゐる。そして一と處ぐちや〳〵と人家の群がつてゐる處が見えてゐるのは堅田といふところで、八景の一つである。堅田の落雁ともいひ、堅田の浮御堂ともいつて、それは比叡山の横川といふ處にゐた恵心僧都といふ有名なお坊さんが建てた、湖の中に突き出して立つてゐる小さい御堂で、海門山滿月寺といひ、中には千體阿彌陀佛を安置してあるといふことだ。そこをも芭蕉が俳句に讀んで、

錠あけて月さし入れよ浮御堂

といつてゐる。夕方になると、私の部室から見ると、その堅田にぽつり〳〵火がともるのが見える。山の下の阪本からそこまで二里あるといふから比叡山の私の部室からは大分離れてゐるのだが、丁度そこまで遠く眺め渡されるので、私の部室の景色は誠に好い景色でありませう。

『錠あけて月さし入れよ浮御堂』かういふ俳句などは房子さんなどのやうなまだ二十四五の若い婦人には趣きがよく解るかどうか。滿月寺の中には千體阿彌陀佛の佛樣が安置してござるのだから、なるほど芭蕉がいふたやうに御堂の錠をあけて、湖水を照らしてゐる滿月の光を佛樣のそばにさし入れたい氣持ちがする。併し今日の琵琶湖はまだその浮御堂のあたりまでいつてもあまり水は美しいことはない。そこからずつと奥に入つてゆかぬと景色はよくならぬ。

それは追々云ふことにして、比叡山の事を、もすこし話しをすれば、比叡山は、私が去年一と夏いつてゐた高野山に比べて、あちらほど參詣人は多くない。高野山の御繁昌は、それは大したもので、信心で參る者よりも遊びに登山する者の方が多い。比叡山もやつぱりそのとほりだ。が、高野山は山の上に一寸した町が出來てゐて、なか〳〵便利だし、奥の院の弘法大師の

御廟、そこにゆくまで兩側に昔の大名などの石塔の立ち並んでゐる長い〳〵杉並木の處などを歩いてゐると夏の暑さも忘れて遊ぶのにもいゝし信心にも好いが、比叡山の方が高野山より、もつと閑靜としてゐて、心地が好い。寺は高野山の方が多いし、なか〳〵綺麗な庭や座敷のある處もあるが、山の上まで荷物を運ぶ牛や馬が上つて來るから蠅などもゐるし馬糞や牛糞が寺のある町につづいてゐたりするのが厭だ。比叡山にはそんなことはない。牛や馬は上つて來ぬ。その代り寺も少くて淑しく、山の上に俗家は一軒もなく、俗人は一人も住んでゐない。大きな杉や檜の繁茂した中にところ〴〵お堂や塔が立つてゐるばかりだ。それに高野山の本堂よりも比叡山の本堂の方はずつと有難い。向うのは建て〻からまだ百年くらゐになるかならぬのだが、此方のは三百年にもなるので丹塗りの圓柱や垂木などがもう色が褪めて褪紅色になつてゐるのが、その爲に物寂びてゐて誠に何とも云へず難有さうである。高野山の弘法大師と比叡山の傳敎大師とはほゞ同じ時分にゐて、いづれも今から千百年ぐらゐ前に死んだ人であるが、どつちも偉い人であつた。そして比叡山は寺は少いやうでも奥へおくへと峰つゞきを入つてゆく

と、やつぱり南北に二里東西に半里位廣がつて、その間の山の中に處々寺が散ばつてゐるのだから高野山の山の上より狹くもない。私は此處にゐる間に、暇にかけて氣の向く時に其等の寺々を參拜してみやうと思つてゐる。高い山の上の杉木立の涼しい蔭ばかりを歩いてゆくのだから暑くつて堪えられぬといふやうなことはなからうと思ふ。この山は高さは二千七八百尺だから、そんなに高い山ではない。高野山は此處より少し高くつて三千尺ぐらゐなもの、京の西北に見えてゐる愛宕山もそのくらゐ。それから、やつぱり春にお姉さんが行つた有馬の温泉のある、あの六甲山の山もまた三千尺ぐらゐはある。山の高いのは、どうしても關東や信州から東にゆかないと高くない。お姉さんは、ゆつくり温泉に入りたいといつてゐたから來年の夏お互にまだ生きてゐたら、ぜひ箱根に案内するよ。箱根だつて一番高い處は四千八百尺はあるから山を眺めるのにもなか〳〵見事なものだ。

けれども高い山の少い京都大阪あたりでは何といつても此の比叡山は名山である。京都の市街から見た形は誠によい。そして山の色がその時々の天氣の加減で幾色にでも變つて美しい。

私は去年から一年ばかり京都にゐて、この山の形や色の變るのをよく見た。やつぱり四月五月がいゝ。桔梗のやうな紫色になることが多い。これを琵琶湖の方から見ると京都の方から見るほど形はよくないが、此の山を北へきたへと峰つゞきにゆくと『比良の暮雪』といつて、八景の一つに數へられてゐる比良岳がある。これは比叡山よりもずつと高い。近江國はなか〳〵寒い國で、比良岳には雪が多い。その比良岳の峰を被ふた雪を湖水の東の方から夕日の沈む頃眺めるのが美しいのだ。さういふ處は湖の入口ではよく分らない。どうしても堅田より奥に入つてゆかぬと好い景色は見られぬ。堅田の浮御堂から水の上をずつと入つてゆくと湖水の東岸に奥の島といふ大きな島がある。それは今では川のやうな狹い水で陸地とちよつと切れてゐるばかりだけれど、やつぱり島なのだ。湖水では一番大きな島になつてゐる。その島も私のこの部室からよく見える。丁度堅田の人家のぐちやゝと一緒になつてゐる向うの處にその島山がよく見えてゐる。三つか四つに峰が高低になつてゐて、雨上りの日などには丁度繪に描いたやうに濃墨色に見える。その島に西國三十三番札所の三十一番になつてゐる長命寺といふ天台の古

い好いお寺があつて、

八千歳や柳に長き命寺
はこぶ歩みのかざしなるらん

と讀んである。

この間竹生島にいつた時に歸りにそつちへも廻つてみたが、好い處だ。『石山の秋の月』が八景の一つであるが、石山からは湖水は隨分離れてゐるし、そんなによくはなからうと思ふが、お月さまを見るなら石山より長命寺の方が、どんなに好いか知れないと思つた。そこらは、もう湖水がずつと廣くなつて來て、向側には比良、比叡の峰つゞきが湖水の西の空に、ずつと屏風を立てつらねにやうになつて、それは何ともいへない好い景色だ。青々として夏の山が薄化粧をしたやうに白く霞み、頂には今にも崩れかゝりさうな雲が、種々雜多な形をして湧き上つてゐる。水と陸地との堺には、いくつもの帆舟が丁度裾模樣のやうに流れてゐる。『比良の暮雪』も此の長命寺のある處から見るのが一番よからうとおもつた。

度々俳句の事をいふやうだが、芭蕉はまたかういふ句を讀んでゐる。

比良三上雪かけわたせ鷺の橋

一體芭蕉の湖水の句には女の讀むやうな美しく優しいのが多い。前にいつた唐崎の松もさうだし、それから、

明月や湖水に浮ぶ七小町

といふのも、前の句と同じやうに句の意味は、はつきりと分らぬけれど、何れにしても風景の美しいことをいろ〳〵にいふたのである。三上山といふのは、お姉さんが春に來た時に氣が付いたか、どうだか。あの時伊勢參宮から江州の草津の方に出て來たのだから、お姉さんは、靜の話しにも、

『お母さんは、汽車の窓のところに坐つて、天氣の好いのを喜びながら、窓外の景色ばかり眺めて、知らぬ人にでも、誰れにでも隣りの客に話しかけて、好いお天氣でよろしうございますなあ。』

と、いつてゐたといふから、そんなに外の景色を眺めてゐたら、必ず氣のつく筈である。私も汽車に乘つたら、窓から外の景色を見るのが何より好きなのだ。伊勢から近江の草津に出る汽車で、草津とその一つ先きの石部——石部は、それ『お半長右衛門』の淨瑠璃にある、あそこだ。一體此のあたりは、昔の東海道だから淨瑠璃にも多く出てゐる。『朝顏』の『いつかはめぐり逢阪の關路をあとに近江路や』といふのが、すでに此の邊で、あの大津から京都にくる長いトンネルがその逢阪の關所のあつた處だし、『丹波與作』の三吉が馬追ひをしてゐたのは此の草津から鈴鹿山の關の方にかけての道中のことだ。あの重の井の子別れはお姉さんずつと前に芝居で見てよく知つてゐるだらう。——それで石部あたりの汽車の右の窓からすぐ近く北に一面松の木に被はれて黑く見えてゐる富士山のやうな形をした小さい山がある。あれが三上山、又は近江富士といつて、山はそんなに高い山ではないが、昔から名の知れた山だ。私はその山が、東京から此方の方へ來る時など、常に氣にかゝつて眼に留つてゐたが、この卅春にお姉さんが京都に寄つた時に、あの翌日私の宿に來たら方々案内しようと思つて一日心待ちにしてゐたけ

れど、來なかつたから其また翌日の九日に私はその三上山の方まで近江の菜の花を見に遊びにいつて、山の上まで上つた。お姉さんが伊勢から近江の方に廻つて大津に一晩泊つて、石山や三井寺の方を見物したのが六日だつたらう。その翌晩七日の夜京都の宿で會つた時、近江の菜の花はどうだつたかと訊いたら、今丁度眞盛りだといつてゐたから、それで私は其翌々日に急いで見にいつたのだ。今年は櫻も早くつて、到る處のステーションなどに植えてゐる櫻が咲き溢れるやうに咲いてゐた。瀬田の唐橋の兩岸、膳所、粟津ヶ原、それから矢走の遠洲のつゞくところなど一面の菜の花で、ところ〴〵麥の綠もまじり、何ともいへない美しさ。やつぱり春が一番長閑で好いねえ。そつちの方から見ると比良岳の峰にも雪が消えてゐると思はれて遠くに淡紅色の霞がかゝつてゐる。私は汽車の窓に凭れて廣い菜の花の野の向うに見える其等の山を眺めてゐた。するうちに三上山は段々近くなつて、草津の次のつぎの野洲といふ驛で降りて、そこから廿丁ばかり東南にあたる。

『比良三上雪かけわたせ鷺の橋』といふ芭蕉の俳句の心は意味深くしてよく分らないが、それ

は石山の方から、雪の朝遠く湖水を隔てゝ立つてゐる比良と三上山とを眺めて、ふつとさういふ心持ちになつたのだらうと思ふ。『明月や湖水に浮ぶ七小町』といふのも、はつきりしたことはよく分らないが、明月の夜の湖水に銀波金波の碎けるさまの美しさから、ふとそんな物が眼に浮んだのであらう。小町は評判の美人であるから、そんな美しい女が七人も多勢湖の上に浮んでゐるやうに譬へていつたのだらう。面白い譬へだが、私は月の夜ではなかつたけれど、此の間、前に云つたその長命寺の處から堅田の方に向つて戻つてくる船の上で、そのことを思ひ浮べて、芭蕉の句のとほりだと思つた。私は長命寺のお寺だつたら、坊主になつても一生そこにゐてもいゝと思つた。私は近いうちになるべく明月の夜またそこまでいつてみるつもりだ。比叡山にゐれば、山を廿五丁下つてゆきさえすれば長命寺にでも竹生島にでもわけなくいかれる。

長命寺は湖水の東岸だが、西側にまた好い處が多い。堅田から奥に入ると丁度比良岳の裾が湖水の汀まで押出して來てゐるところに小松崎——近江舞子ともいつて、それは美しいところがある。石山や三井寺、唐崎あたりでは湖の底が泥で濁つてゐるけれど、小松崎あたりは一帶の

汀が白沙で、それに松原がつゞいてゐる。比良岳の山の中腹に懸つてゐる瀧もそのあたりの船から見えてゐる。多景島、沖の白石などいつて眞白い高い岩が藍の如き湖の中に突立つてゐたり、多景島は湖水で一番小い島で、深い水の底から岩壁で堅めた可愛い島の上に、ちよぼ〳〵と樹が生えてゐて、そこに小さいお寺が建立してある。竹生島はいふまでもなく美しい島だ。そこは西國三十番で、

月も日も波間に浮ぶ竹生島
　　船に寶を積む心地して

と御詠歌にも讀んであるとほり、湖水は竹生島と前にいつた多景島、沖の白石のある處との間あたりが一番廣くつて、そこに來るととても湖水とは思へない、海としか思はれない。兩方の岸は見えなくなつてしまうくらゐ水面が濶けてゐる。謠曲の竹生島に、『綠樹影沈んで魚木に登る景色あり、月海上に浮んでは兎も浪を走るか、面白の島の景色や』と、いつてあるのがまさしくそのとほりで、藍を溶したやうに澄んだ紺碧の水に岩の上に生ひ被さつた草木が綠の影を鏡

の如く映してゐる。不思議に美しい島である。大津から船に乘ればわけなく其等の景色を眺めながら行つて來られる。私は此の間歸りに竹生島から阪本まで七八時間船に乘つてゐたが、波は穩かで油を流したごとく、も小し時間が長ければよいと思つたくらゐだつた。（八年七月二日）

湖光島影

（琵琶湖めぐり）

比叡山延暦寺の、今、私の坐つてゐる宿院（しゅくゐん）の二階の座敷の東の窓の机に凭つて遠く眼を放つてゐると、老杉蓊鬱たる尾峰（をね）の彼方に琵琶湖の水が古鏡の表のごとく、五月雨霽りの日を受けて白く光つてゐる。湖心の方へ往復する汽船が煙を吐いて靜かに滑つてゆくのも見える。帆舟が動いてゐるのも見える。そのあたりは山の上から眺めても湖水の水が最も狹められてゐる處で、向ふ側から長く突き出して來てゐる遠洲は野洲川の吐け口になつてゐる。此方（西岸）から突き出てゐる處には人家が群つてゐて、空氣の澄明な日などには瓦甍粉壁が夕陽を浴びて白く反射してゐる。やがて日が比良比叡の峰つゞきに沒して遠くの山下が野も里も一樣に淺暮の底に隱れてしまふと、その人家の群つてゐる處にぽつり〳〵明星のごとき燈火が山を蔽うた夜霧

を透して瞬きはじめる。その賑やかな人家の群りが先頃から、京都の繁華を離れて此の無人聲(むにんこえ)の山の上に僧房生活をしてゐる者の胸には何となく懐しくて堪らない。人里の夜の燈火のむれがどんなに此の山の上からは心を惹くか知れない。そこは八景の一つに數へられてゐる堅田の町であつた。堅田の町、秋ならば雁の降りる處。また浮御堂の立つてゐるのでも知られてゐる名勝區である。叡山東麓の坂本からこの延暦寺の根本中堂のあるところまで急坂二十五町の登路、坂本から堅田までは汀づたひに二里弱離れてゐるから、私の凭つてゐる窓から燈火の見えてゐる處まで直徑どのくらゐあるか。私は兎に角、早く一度そちらの方に降りていつてみたくなつた。

琵琶湖はまた鳰(にほ)の海ともいひ、その名の如く形琵琶に似て、瀬田、膳所、大津などの湖尻から三四里ばかり北に入つてゆく間は東西の幅も一里位のもので、それが野洲川河口の長沙と堅田の岬端とで狹められてゐる邊は約半里くらゐのものかも知れぬ。それだけの間が恰も琵琶の轉軫(てんしん)の部分である。所謂近江八景は『比良の暮雪』のほかは、多く湖南に屬する地點を撰んで名

附けてあるが、今日のごとく西洋文明の利器に瀆されない時代には、その邊の風景も落着いてゐて一層雅趣が豊かであつたかも知れぬ。その頃は唐崎の松もまだ千年の緑を誇つてゐたのであらう。膳所の城もその瓦甍の影を水に醮してゐたであらう。粟津が原の習々たる青嵐も今日のごとく電車の響のためにその自然の諧音を亂されなかつたであらう。芭蕉は殊のほかこの湖國の風景を愛でゝ、石山の奥には長く住んでゐたのであるが、翁の詠んだ句には湖水の深い處の句は、自分の寡聞のせゐか餘り知らない。多く湖南に屬する景物を吟じてゐる。

唐崎の松は花よりおぼろにて

と大津にゐて詠んでゐる句を見ると、二百年前にはそれが實景であつたかも知れぬが、今はもう半ば枯れて空しく無慘な殘骸ををを湖畔に曝してゐる。それは樹齢の定命で自然にさうなつたものか、それならば止むを得ないが、汽船の煤煙で枯れたものとすれば惜しいものである。

とにかく堅田、野洲川河口の長沙以南の湖畔の景致は産業文明のために夥しく損傷されて、昔の詩人騒客を悦ばしめた風景の跡は徒に過去の夢となつてしまつてゐる。水も底が泥で汚く

濁つてゐる。その代りに轉軫の部分から胴の部分に入つて、堅田の鼻を一と廻りして遙に北に眼を放つと、水面忽ち濶け雲煙蒼茫として際涯を知らない。

私は琵琶湖の奥の絶景を人から聞いてゐたのは長いことであつたが、いつかは行つてみたいと思つて氣にかゝりながら久しく果たすことが出來なかつた。先頃京都にゐる間にも三條大橋の京津電車の終點からゆけばわけないので、幾度か思ひ立ちながら毎時好機を逸してばかりゐた。すると、僧房の色彩の乏しい生活と、寂しい心を誘惑するやうな堅田の人家の群りと燈火とは遂に私をして、ある五月雨ばれの朝早く比叡山の上から二十五町の急阪を降つてゆかしめた。發着の時間がよく分つてゐなかつたので、比叡の辻の太湖汽船の乘降場までゆくと八時半にそこに寄航する東廻りの船が二十分ばかり前に出たあとで、その船は煙を吐きながら堅田の沖を今滑べつてゆくのが見える。私はぐるりと湖水を一とめぐりするつもりである。殊に東岸には奥の島があつて、そこには古い長命寺の寺があるので、かねてよりその寺に行つてみたいと思つてゐたから、どちらを先きにしてもよかつたのだ。私は折角二十五町、阪本の濱までは三

十五六町の道を喘いで降りて來たのに、そんなわけで、殘念さうに遠くの水の上をゆく船の影をおうて眺めたが仕方がない。そこで通ひ船の船頭の教へるまゝに、その次に西廻りをゆく船は急行で、阪本へは寄航しないので、堅田まで俥でいつて、其處から乘ることにした。なるべくならば少しの行程も水路を行きたいのであるが、先頃來山の上から眺めてゐる堅田の町に入つてみるのも旅の一興であると早速心を取り直して俥のある處までまた七八町の道を無駄足して下阪本の濱から俥に乘つた。比叡の峰つゞきの裾山が比良岳の方に向つて走つてゐる山麓の村里を過ぎ挿秧のをはつたばかりの水田や青蘆の生ひ茂つた汀つたひの街道を走つていつた。俥の上から湖東の方を顧ると、此の春遊びにいつた三上山が平濶な野洲郡の碧落と緑樹と點綴せる上にくつきりと薄墨色に染まつて見えてゐる。衣川といふ昔は一萬石の城下で、北國街道の宿であつた村を越して、村はづれを流れてゐる衣川といふ小川の土手を上つて橋を向うに渡ると、堅田の人家は右手の湖の方に突出でた田甫の彼方に見えた。大津を十時に發する船は十一時に堅田を發することになつてゐる。時計の針は此の時もう十時五十分を示して、船は

田甫の向ふの青蘆のうへに黑い煙突だけを見せて吾々の俥を追掛けるやうに水の上を滑つて進んでゐる。脚達者な車夫は、

『これに遲れたら、もうお錢もらひまへん。』と笑つて語りながら急速力で驅け出した。

『どうどす？　浮御堂へ一寸寄つてお見やすか。』と車夫は、そつちへゆく道と棧橋の方へとの岐れ路の處で聲をかけたが、私は、京にゐる間から今まで幾度か行きそびれてゐるのに懲りて、直ぐ棧橋の方へ走らした。軒の低い呉服屋や荒物屋などの並んだ商家の通りを過ぎて俥が棧橋の手前の切符賣場にやつと轅棒を下すと、ぽうと笛を吹いて汽船の姿が近くの水の上に見えた。

浮御堂は、その棧橋を渡りながら右手の方の汀から架け出してあるのが見えてゐる。綠の濃い松が數株そのまはりの汀に立つてゐる。芭蕉は、

錠あけて月さし入れよ浮御堂

と詠んでゐる。叡山横川の惠心僧都の創建で海門山滿月寺といつてゐるのは、ふさはしい名

である。中には千體阿彌陀佛を安置してある。やがて船が着いて私はやつと湖上に浮ぶことが出來た。前甲板に呉蓙を敷いて天幕を張つてある處に座をとつて私はそこから四方を顧望してゐた。

今朝山を下りて來る時分には、どうかと氣遣つた天氣は次第に晴れて大空の大半を掩つてゐた雲は追々に散らけ、梅雨上りの夏の來たことを思はせる暑い日が赫々と前甲板の上を蔽うたテントの上に照りつけた。雲が刻々に消散して頭の眞上にあたる蒼空が次第に天上の領域を擴けてゆくとともに、水の面も船の進行につれて蒼茫として濶けて來た。日は水を照らし、水は光を反射して輝き、水と天と合して渾然たる一大碧瑠璃の世界を現出し、船はその中を、北から吹いて來る習々たる微風に逆つて靜に滑つてゆくのである。湖水では北風が吹くと晴としてゐる。昨日一日山の上で濛々として咫尺を辨せぬ淫雨に降り籠められ、今朝は夙に起きいでゝ二十五町の急阪を驅けるごとく急ぎ下り、勝手の分らぬ船の乘降に、さらでだに疲れたる頭を無益に惱ましたるそのうへに尙ほ二里の間、いぶせき田舍の泥濘路を俥に搖られて、ほと〳〵

探勝に伴ふ體苦心苦の辛さを味はひ、強か幻滅の悲しさを感じてゐたのが、眼の前に開けた美しい湖山の大觀のために、今までの憂苦は全く忘れられて、私の心は嬉々として眼の覺めたごとき悅びに滿ちて或は左舷に立つて眺め、或は右舷に凭つて遠く瞳を放ち、片時も眼を休ませないで、飽くことを知らず刻々に移り變る山の影水の光に見惚れてゐた。こゝまで來ると比良比叡の峰つゞきが、適度の距離を置いて一とまとめに雙眸に入つて來た。上空かち次第に拭ひ去られた雲は僅かに比叡と比良の頂に白紗を纏うたごとく殘つてゐたが、正午ごろになつて太陽の光が一層強くなつてくると、やがて比叡の頭にも雲は消えてなくなり、船の北進するにつれて山の影は次第に淡く南に殘り、清楚な夏の姿は、さながら濃化粧を施したやうに綠の上を白く霞に包まれてゐる。

船が堅田を出て初めての寄航地である、南濱に寄つて、そこから再び沖に出ると比叡の山影はいよ〳〵淡く、逢坂山からずつと左に湖南の方に連つてゐる山脈とともに段々遠く水の彼方に薄れていつた。そして左舷には、蜿蜒として湖西の天を蔽うて聳えてゐる比良岳がその雄大

なる山容の全幅を雙眸の中に展開して來た。雨後の翠巒は一際鮮かで、注意してよく見てゐると、峰は大きく二つに分れて、その二つがまた處々深い溪によつて幾つかの峰に分れてゐる。雲は山の面から去つてしまつたが、一番高い主峰だけには綿を千切つたやうな灰白色の雲が頂にかゝつたまゝ何時までも動かうともしない。それが如何にも主峰は主峰だけの威嚴を示してゐるかのやうで、雲に隱れた部分は距離が遠いせゐか清楚な夏の色も暗綠色に搔き曇つて恐しさうな感情を與へてゐる。雄松崎の白沙青松は、主峰が大きな溪によつて二つに分れてゐる處から流れ落ちて來る急角度の傾斜を成した比良川の溪流が直ちに湖水に迫つて汀に土砂を押流したところに出來てゐる。山は攝津の六甲山など、同じやうに花崗岩質の山と思はれて、船の上からも白い砂の盛れ上つてゐる溪流の水路が明かに見えてゐる。比良岳はその高標の割に何となく雄偉の感じに富んだ山である。一つは山の處々に薙の多いのが、何となく慘憺として悲壯な感じを起さしめるのかも知れぬ。肉が少くつて骨の太いやうな山である。それでも山下の村々はこの靜かな山の裾に平和に棲息してゐると思はれて眼の醒めるやうな山麓の青草と綠樹

に埋れて汀を縫つて人家が斷續してゐる。雄松崎は近江舞子の名、遊覽者の眼を欺かず、洗つたやうな清い汀に靜かな小波が寄せてゐる。まだ樹齡のさまで古くなささうな、すんなりとした松林が白砂の上に遠くつゞいてゐる。

其處から西北にあたる比良の北岳の中腹の岩に深く刻まれた皺があつて、飛瀑が懸つてゐるのが白く見えてゐる。楊梅の瀑といはれてゐる。船の上からそこまでは直徑にしても一里以上はあるだらうが、それでも可なり大きく見えてゐるところを思ふと、なか〳〵高い瀧らしい。

船は長い間比良岳を仰望しながら走航をつゞけてゐた。更に右舷の方に眸を轉ずると、此の時湖東の奥の島の三つに整つた山の影はもう稍東南の方に退いて、その前に横はつてゐる沖の島の翠微が赭土色の斷崖面をいつまでも眼印のやうに此方に向けてゐる。

湖面は東北に向つて、愈々遠く濶け、淼漫たる水は海の如く蒼茫として窮まるところは空と水と遂に一つに融けてその他には何物も認められない。やゝあつて多景島と白石島とが遠くの水の上に微かな姿を現はしてきた。

多景嶋は青螺の如く淡く霞み、沖の白石は丁度帆舟が二つ三つ一と處にかたまつてゐるやうに見えてゐる。その向うの方にぎさ〳〵として入江の影ともつかず、人家の群りともつかず障子に映る影繪のやうに、たゞ輪廓のみ高低をなして續いてゐるのは彦根から長濱の方であらう。地平線の上は水に煙つてゐて、はつきりとした物が見えないが、その上の方に遠く青空を支へて湖東から湖北の天を繞らしてゐる山の容が逶迤として連なつてゐるのが次第に明かに認められてきた。遠く北國の方から來て、北美濃と東淺井郡との境を長城の如く堅めてゐる山脈は北の方に抽んでて高く、深い鬱氣を付けてゐるのが金糞が岳といふのであらう。それより山勢大いなる波濤の如く南に走つて伊吹山に到つて強く支へられてゐる。伊吹山は北背に其等の山脈の餘波を堰き止めようとして山容やゝ崩れてゐるが、西南に面した部分は急に鮮かな傾線を引いて、さながら東國と西國との通路を守るものゝごとく、關ヶ原と思ふあたりの狹隘を俯瞰して峙つてゐる形勢が明かに看取される。東海道を往復する毎に、いつも私の強い興味を惹く山であるが、今日は雨後の澄明な空氣の中に夢の如く淡く薄紫の霞を罩めて靜かに立つてゐる。

比良岳の主峰と同じやうに、その頂にも一團の雲がかゝつて、それが何時までも消えようとしない。頂嶺がどこまで空に達してゐるか分らない。そこに何だか犯し難い神秘を藏してゐるやうで、高山の威重を示めしてゐる傷ましいやうな大きな薙のあるのも見えてゐる。西軍の主將石田三成が戰に破れて、あの山の中の洞窟に潜んでゐたといふのは極めてふさはしいといふ一種の悲壯な感じを表はしてゐる。伊吹山の南の方は暫く山脈が絶斷し、更に關ヶ原低地の南方に至つて再びもく〳〵と天に支へるやうに隆起してゐる一團の山塊が古の不破の關を固めてゐた靈仙山である。伊吹山や靈仙山や其等の山々が皆昔時の東山道の通路を阨してゐたといふことは一望して明かに肯かれる。琵琶湖は是等の湖東の國境に連なる山脈の眺望と、比良岳の翠巒を仰ぐことがなかつたならば、湖水の風景はどんなに平凡なものであつたか知れない。是等の山山をパノラマの如く雙眸に收めてゐることは、琵琶湖をして恰も中禪寺湖や葦の湖などのごとき高山の中腹に湛てゐる火山湖の趣きを成さしめてゐる。それと共に湖水を取り卷いてゐる四圍の地が古來人文の中心に近く、また湖東の地が屢々戰國時代に在つて英雄の爭覇戰の行

はれた史蹟に富んでゐるので、自然がたゞ單純な山河としてゞなく豊かな歴史的の感興を以つて裏付けられてゐる。

私は右舷の欄干に凭れて伊吹山の頂にかゝる雲と、その傷ましい薙の跡とをやゝ暫らく見詰めてゐた。船はその間にも進航をつゞけて、白鬚明神の社のある明神岬を廻つてゐた。明神岬は比良岳の餘脈が比良の北岳から二つに分れて、一つはそのまゝ北に走り一つは本來の比良山脈と殆ど直角を成して湖岸に迫り、山崖が汀に突出してゐる處がそれである。そこまで來るともう今まで長い間見て來た比良岳も斜に後に退いて、綿帽子を着けたやうな主峰のみ嚴かに聳えてゐるのが遠く眺められるばかりである。明神岬の鼻を一寸廻ると大溝の町が水に臨んで立つてゐる。そこから琵琶湖の岸に沿うて近江國の西北隅になつてゐる高島郡の平野が安曇川を挾んで濶けてゐる。近江聖人の邸址で知られた青柳村の藤樹書院も大溝の港から半道ばかり北に行つた處に在る。明神岬の鬱蒼たる森に至つて盡きてゐる比良の支脈を後にしてから船はやゝ山の眺望から遠ざかつて安曇川の河口に擴がつてゐる平洲を左舷に見て進んでゆくが、それ

でも比良岳がそのまゝ一直線に北に向つて伸びて出來てゐる蛇谷峰、阿彌陀山などの相應な高度を示してゐる山巒が安臺川流域の平野の果てに屏立して左舷の遠望に景致を添へてゐる。それは丁度二時頃の日盛りで、強い日光に照りつけられてゐる其等の山巒には多量の雨氣を含んだ薄墨色の水蒸氣が纏うて眼を威脅するやうに險しい表情をしてゐる。

竹生島は大分遠くから見えてゐたが、その邊まで來ると、一層明かに青い水の上に浮んでゐるのが見えて來た。伊吹山、金糞ヶ岳、それから若狹、越前の國境に繞らしてゐる蜒蜿とした連山も段々明かに認められて來た。賤ヶ岳、淺井長政の居城した小谷山なども指ざされた。そして伊吹山は恰も其等の盟主であるかの如く、頂點のところに白い横雲が捺塗つたやうにやつぱり引懸つてゐる。天に支へるやうな巨大な體に溢れるほどの感情を表はしながら何といふ強い沈默であらう。頂の雲は今にも動きさうな形をして流れてゐながら、雲も山もそれを見てゐる人間の眼を焦らすかのやうに、彼等は動いたり口を利いたりすることを忘れたのかといひたいほど鎭靜してゐる。

饗庭野の陸軍演習地のあるので賑はうてゐる今津の町は、水の上からも、陸軍の白いバラックの屋根が多くあるので遠くから、それと知れてゐる。船はそこを最後の寄航地として棧橋を離れると、今まで北に向つてゐた進路を轉じてや、北に振つた東に向つて進んだ。竹生島は船首に當つて段々近寄つて來た。その時分にはもう乘客は殆ど何處の船室にも、甲板にもゐなくなつて、或は私一人であつたかも知れぬ。やがて竹生島の棧橋に上陸したのは午後三時であつた。堅田からそれまで四時間の間飽くことを知らぬ美しい山水を眺めつゞけにして來たのであるが、丁度活動寫眞などを繰り熱心に見てゐると、後で頭痛がしたり精神が疲勞したりすると同じやうに、知らぬ間にひどく神經を使つたと思はれて、さうなくてさへ先達て京都にゐて二度ばかり劇しい腦貧血を惱んだ後なので、竹生島の棧橋に上陸するとともに頻りに生欠伸が連發して頭が病め、何とも云へない不快な心持ちになつて來た。その晩は竹生島の寺に一泊するつもりであつたので、ともかく寺務所の一室に通されて暫く休息した上で、觀音堂や都久夫須麻神社などを一順參拜した。いづれも太閤の桃山御殿の一部を移したものとかで、壯麗なる蒔

繪の天井や柱が年を經て剝落してゐる。すこし良くなつたと思つた心持がまた前に倍して惡くなつてきたので、觀るのはいゝ加減にしてまた寺務所の一室に戻つて來て外套にくるまつたまゝ、仰けに寢てゐた。頭は壓し潰されるやうに痛む、胸は嘔氣を催ほして少しでも頭を動かすことが出來ぬ。氣も遠くなるやうな心持になつてゐた。そして若し此のまゝ腦溢血にでもなつて死んだらどうなるだらうなどゝいふやうな雜念が湧いて起つた。それでそこにゐた所化に事由を話し、別棟の寢處に移つてその晩は夕飯も食はず風呂にも入らず、呻吟しながら寢てゐた。それでも一と寢入りして九時頃に眼を覺ますと、頭もやゝ輕く、氣分も大分快くなつてゐた。それで安心して此度寢なほすと、翌朝まで一と寢りに熟睡することが出來た。

湖の西岸は汽船の往復も一日に數回あるが、湖東の方はずつと汽車が通じてゐるので、從つて船の便は少く、大津と竹生島との間は東廻はりは一日の往復一廻づゝかない。琵琶湖の一番奥になつてゐる、もう餘吳の湖に近い鹽津をまだ闇いうちに出帆した船が竹生島に朝の五時三十分に寄港するのである。歸航はぜひとも湖東を廻つて來ようと志してゐたので五時半の船に乘り遲れたら、また一日竹生島に逗留しなければならぬ。寺男は氣を利かして寢室を覗いて、どうするかと注意してくれたが、强ひて起れば起きられさうだつたけれど、折角まだ二三時間は眠れさうなので、此の快よい睡眠は何物にも代へがたく、私は蒲團の中から聲を出して、もう一日延ばすことにした。

午前十時三十分には西まはりをして大津の方に歸つてゆく船があるので、その時はいつそ昨日と同じ風景を眺めて歸らうか、二日續いても三日とは受け合はれない梅雨半ばの此の頃の天候は明日になつてまたどう變はるかも知れないとさまゞに迷つて見たが、まゝよ、雨が降らば降れ、雨も又奇なりと思ひあきらめて、遂々その一日は竹生島に逗まることにして、それより舟を雇うて島の周圍を一とまはりしてみる。謠曲の『竹生島』に

緣樹影沈んで魚木に登る景色あり、月海上に浮んでは兎も浪を走るか、
面白の景色や

といつてゐるのは實景である。島の周圍は全部岩石を築き上げてそれに生ひ茂つた眞青な苔や一つ葉、擬寶珠など名の知れぬ無數の草がその上に生ひ拡さつてゐる。その上に又綠の木々が蓊鬱として繁茂し、瑠璃を碎いて溶かしたやうな美しい眞青の水に暗綠色の影を醮してゐる。深い水の底を鯉や鮒などが泳いでゐるのが、よく透いて見える。頭を上げて岩上を見ると上には驚くほど無數の種類の草木が足を踏み入れる隙もないまでに雜然と密生してゐて、中に櫻、椿、藤、楓などの四季々々を飾る樹木が案外に多い。椿は殊に島の蔭に面した、凄いほど青い水が岩を醮してゐる處に濃綠色の影を翳してゐる。舟夫はその椿が眞赤な花を付ける時分や藤の花が長い薄紫の房を水に映す頃の島の美しさを語つた。私にもその時分の美しさがよく想像せられた。琵琶湖もそこまで來ると、若狹、越前の國境に連なつてゐる山脈の餘脈が直ちに湖岸に迫つてゐて、廣い水は其等の斷崖によつて圍れてゐるので、中禪寺湖や葦の湖などの火山湖と少しも異らない感じを與へてゐる。

その日は一日さうして孤島に逗まつて私は又しても退屈さに湖上を遠く眺めて早く夜が明け

て明日になることを思つた。辨天の祠前の舞臺に上つて東の方を見ると、沖は灰色に搖曇つて伊吹山も、たゞ山の輪廓ばかりが幽かに見えてゐる。明日は雨らしい空模樣で、島の根を洗ふ波の音が夕刻に近づくに從つて大きくなつて來たやうである。

頭の調子がどう狂つたか、昨夜は一寸も眠むられなかつたので、夜の明けるのを待ちかねて起きいで、體を拭いて衣服を更め、五時半に發する汽船をもう五時頃から棧橋の處に降りて行つて待つてゐた。沖は曇つてゐるが、切符を賣つてゐる老人に今日の天氣はどうがと訊くと、『天氣になりますやろ。』といふ。雨が降つたら湖が多少荒れるばかりじやない、阪本から二十五町の杉林の下を叡山まで登つてゆくのが難儀である。昨夜は眠られぬまゝにそんなことばかり氣にかゝつてゐたが、老水夫の經驗によつてその點は安心らしい。やがてブウと汽笛が島の蔭で鳴つて、鹽津から出て來た船が着いた。客は私一人かと思つて通ひ船に乗り込んでゐると、寺の高い石段を寶嚴寺の老僧が新發意などに扶けられて、杖を突いて急いで降りて來られ

る。舟夫に老僧が何處かへゆかれるかと訊くと　何處かへゆかれると答へたが、言葉がよく分らなかつたので、何處へゆくのだらうと思つてゐるうちに、老僧はそこに渡した歩板をわたつて舟に入つて來られた。十四五の新發意が千代田袋に菓子折くらゐの小さい包みを持ちそへて附いてゐる。私は好い鹽梅に老僧に會ふことが出來た。二晩厄介になつたお禮もいひ、話しもして見たい。一昨日から姿は餘處眼にも見てゐたが、お目にかゝることはしなかつた。今年七十幾歳の高齢で、竹生島には小僧さんの時分からずつと定往してゐられるのだといふ。花は咲き鳥は歌ふことがあつても嘗て女人を解せず、暈酒を知らず、春風秋雨八十年の生涯を此の江湖の水によつて遠く俗界と絶ち、たゞ一と筋に佛に近よることを勤めて老の到るのを忘れてゐられるのである。それは昨日ほかの者から噂にきいてゐた。

老僧は通ひ船に乘り込んだはずみに私の方に近づいて來られたので、私は會釋をしつゝ

『いろ〳〵お世話になりました……』

とお禮を述べると、老僧もそれと同時に、女の様な柔和な笑顔をこちらに向けて、

『ゆきとゞきませんで、さぞ御不自由でお困りでございましたでせう。』

と、聲も女のやうな優しい寂のある聲である。觀音さまには男相と女相とあり、或ひは男とも女とも區別のつかぬ御顔をして居られるのがあるが、老僧こそ風光明媚なるこの竹生島觀世音の化身ではあるまいかと思はれて、顔容といひ音聲といひ、體までが小さく瘦枯れて女と見まがふ柔和な方である。中古の黑絹の道服に絹袖の着物の質素な裝をした老僧は杖をついて舟の中に向うをむいて立つてゐられる。

やがて汽船の傍に漕ぎ寄せて老僧は雛僧さんに扶けられて船に乘り移り、私もそのあとから續いて乘つた。雛僧さんが手荷物を老僧に渡して歸つてゆくと、一等室には老僧と私と二人きりである。老僧は行儀よく端の方に腰を掛けて、兩手を膝に載せてをられる。どこまでゆくのであらう、あまり遠くへゆくのでもなささうだと思ひながら、

『どちらへおいでになります？』

『私は早崎まで、すぐこの先の地方です。』

『あゝ左樣ですか、御老體にもかゝはらず、お達者で御結構です、お幾つにおなりになります。』

『今年七十七になります。』

『あゝ左樣ですか、私の老母は當年七十八歳になりますが、先年竹生島へ參詣いたしたことを話して居りましたので、湖水の風景を觀かた〳〵是非私も參詣したいと思つて居りましたが、今回漸く宿望を遂げました。誠に聞くに優る美しい景色の處で。』

『あゝ左樣で、その頃は今よりまた一層交通なども不便であつたでせう。』

老僧は柔和な口元に優しい微笑を浮べながら語る。世間のさういふ老僧などに屢々見る對手を見下したやうな尊大な口の利きやうや僧侶に共通の俗人を諭すやうな言葉尻の臭味もない。そこへ船童が茶を入れて以つて來た。老僧はそれを見ると、船童に

『私は白湯にしてもらふ。この方はお茶にして、……此の方はお茶にして。』

さういつて、二度目の、此の方はお茶にしてといふのを稍語勢を強めていはれた。ボーイは

その通りに老僧には白湯を汲んで薦め、私の方へは茶を煎れて出した。すると老僧はその茶碗を手にとつて底に一滴も殘さぬやうに仰向いて茶碗を啜り、空になつた茶碗を靜と茶托の上に伏せて置かれた。人は平素の行儀を一朝にして改むることは出來ない。書生流の私は茶碗を半分だけ飲み殘した。老僧に眞似てそれを伏せることもならず、そのまゝ茶托とともに卓の上に突出して置いた。舟車の中などでは大抵の人は通常の家に在るよりも一層行儀を忘れて顧みないものだが、老僧にはすこしもさういふ風は見えぬ。その時もし私がるなくつて老僧が一人きりであつてもその通りに恭謙であつたにちがひない。一椀の食一滴の水も佛恩であるから、これを粗末にしてはならないといふ訓條を恪守して、それが今は習ひ性となつてゐるのであらうと思はれた。そのうちにもう船は向岸に近づいたと思はれて船長が入つて來て老僧に挨拶をしていつた。私も起つて老僧にお別れの辭儀をして、顏を上げてみると老僧はまだ〳〵圓い頭を兩掌に載せて卓の上に額づいてゐられる。私は詮方なくもう一遍額を下げた。船童は手荷物を持つて老僧の先きに立つて案内する。私もあとから送つて出た。

舷側には一二人の乘客を乘せた通ひ船が近づいて來た。老僧は船長や船童に扶けられて通ひ船に乘り移り、座の上にきちんと坐られた。そして舷側を離れるとともに恰も佛の前に稽首くやうに三度ばかり鄭寧に頭を下げて謝意を表せられた。恐らく此の時の老僧の心には船長やボーイその他の見送つてゐる者が佛の使者として考へられたのであらう。老僧の心眼には一切の有情無情が佛の一部として映つてゐるのであらう。

船はさうして老僧を通ひ船に移すと直ぐまたけたゝましい推進機の音に水を蹴つて進航を始めた。甲板に上つて見てゐると、朝霧の中から漸く眼の覺めかゝつてきた水の上にどこからともなく薄い日影がさして湖の上が次第に白く輝いて來た。老僧の圓い頭が一つその中に見えて通ひ船は段々向うに遠かつてゆく。早崎に續く地方の寺や人家の屋根が綠の樹々と點綴して汀の青蘆の彼方に遠く廣がつてゐる。先刻竹生島の棧橋で老人のいつたとほり、天氣は確かに晴れであるらしく東の方が倍々明るくなつて東北の方の山脈が霧の奥から雄大なる姿をすこしづゝ露はしてきた、金糞ヶ岳、伊吹山も深い雲霧の彼方にまだ夢みてゐるやうな淡い影だけ見せ

てゐる。老僧はと水の上を見ると白い水煙の彼方にやつぱり圓顱の姿が小さく見えてゐたが、そのうち舟の影と共に霧の中に消えてしまつた。竹生島も、もうずつと西北の水の向うに影が薄れてしまつた。

昨夜の代りに今のうちに少し寢て置かうと思つて一旦船室に入つて來たが、やつぱり甲板の眺望が氣にかゝつて眠られさうにないのでまた起きて出て見る。その間に船は姉川の河口を廻つて南濱といふところに寄つて、そこからは乘客がどや〳〵甲板に上つて來た。賤ヶ岳の方も今朝は船尾の方にそれと認められる。小谷山も朝靄の中に朝日を浴びてゐる。長濱に着いた時はまだ七時で貨物の積み下しに出帆までには三十分ばかりの時間があるといふので、その間を利用して長濱の町の瞥見に上陸してみる。肥料にする干魚の臭や繭の市場の臭ひのする中に商買に拔目のなささうな町の人間はもう夙に起き出でゝ、その日の業務に就いてゐる。天氣は本當に晴れ上つて暑さが劇しくなつて來た。

長濱を出てから昨日は遠くに見た靈仙山が今日は長濱から彦根につゞく坂田郡の平野の彼方

に天を衝いて盛り上つてゐるのが見える。彦根の城閣も朝霧の中に朦朧とした輪廓を見せて來た。その少し左の方に佐和山の城址も見えてゐる。

今まで忘れてゐた右舷の方の湖上に眼を放つと、多景島がやゝ近くに岩の上に立つてゐる堂塔の形を見せてゐる。沖の白石はその眞西にあたつて、今日も白帆を集めたやうに水の上に浮いてゐる。今日は一昨日に倍して湖の上が一層和やかで、平滑な水の面は油を流したやうにのんどりとして沖の方はたゞ縹渺と白く煙つてゐる。天氣が好いと見たか湖西の方の水面には幾つも帆舟がかゝつてゐる。船が彦根を出るとボーイに誂らへて置いた辨當が出來たので、それを甲板に持つてこさせて湖上を展望しながら食べる、そこから奥の島の伊崎不動のあたりまでは三四十分ばかりの間左舷の風景がやゝ單調なので、今のうちに少し微睡をとつて頭を休めておいて、奥の島が近づいて來た時分に起きようと思つて室に入つてシャツと股引ばかりになつて長く寢そべつてゐると、相客は一人もゐないで、いゝ心地にづる〳〵とまどろむことが出來た。そして眼を覺して舷窓から水の上を覗くと、いつの間にか伊崎の不動は後の方に退いて

船は沖の島の東端を廻はつて早や奥の島との湖峽にさしかゝらうとしてゐる處である。此の邊を見外づしては大變だと、慌てゝ甲板に立ち出ると、左舷には文人畫に見るやうな奥の島の明媚な山水が眼の前に開展してゐるところである。それとゝもに右舷の方を顧望すると、比良岳は縹渺たる水の果てに一昨日見た時よりも今日は一層壯美な姿をして聳えて見ゐる。

（八年七月八日誌す）

京美やげ（畢）

16044

大正九年九月十日印刷
大正九年九月二十日發行

（定價金貳圓）

著作者　近松秋江　東京市本郷區弓町一丁目廿五番地

發行者　茅原茂　東京市本郷區弓町一丁目廿五番地

東京市本郷區弓町一丁目廿五番地
日本評論社出版部
電話小石川一九七一
振替東京九六七八

京美や げ

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
（印刷者）　株式會社博文館印刷所
荻原勝次郎

日本評論社出版部

岩野泡鳴絶筆

長編小説

女の執着

竹久夢二裝
價二圓五十錢
送料十七錢

附錄 田山花袋・德田秋聲・野口米次郎・菊地寛・上司小劍・生田長江・蒲原有明・南部修太郎・岡落葉・江部鴨村

追憶錄

本書の前半は中央公論と太陽に掲載され、當時著者の所謂一元描寫論を完全の域に達せしめたものとして文壇の大好評を博したものである。其の後著者は本書の完成を畢生の大事業とし、只管完結を急ぎしも途中病魔の襲ふところとなり、筆の進み意の如くならず、幾多呻吟、眞枝夫人秋聲氏等の諫止をも退けて遂に百數十枚を加へ死前三日遂に本書の完結を見たもので、著者の眞の絶筆である。節は秋、傑出の文藝を渴仰するの時本書出づ、思ふに秋季に於ける文藝批評の中心は本書に集中せん。敢て薦む。

日本評論社發行

泡鳴二大傑作

四版

燃える襦袢

四六判四百餘頁
箱入美裝
價壹圓七十錢
送料十三錢

泡鳴氏の濃艶なる方面の代表作を集めたるもの、而もその技巧や天衣無縫の圓熟！ 本集には專ら變つた女を材料としたのを集む。卽ち

燃える襦袢・藝者あがり・膝に飛び付く女
お仙・四十女・醜婦・部落の娘

長編家庭小説

情か無情か

四六判約四百頁
箱入美裝
價壹圓七十錢
送料十三錢

家庭小説として通俗淺薄なのが多い時に當り、このやうに深刻で高級な家庭小説があらうか。哲學者の幻滅的戀愛、これに附き纏ふ繼母繼子の暗鬪、著者の博大な心に實現せしめた人生自然の姿內容の充實と技巧の圓熟！ 特に本書を「女の執着」の讀者に薦む。附錄として脚本二篇を收む。

日本評論社發行圖書

長編小說

照る日の虹

眞山青果作

●四六大判五百餘頁・箱入上製頗美裝

價 二圓卅錢 送料十五錢

貧しく生れたるものゝ夢は、その世の終るまで寒かるべきか矜りある者の幻影は、その生の限りに華やくべきか。人の夢、空の虹、いづれ何時までの眞實なるべき。本篇は貧しく生れたるが故にその戀に破れて江湖に流離する頗强朴訥の一青年を主人公とし、配するに、濃艶豐肥、五月の陽に咲く牡丹花の如き乙女を描く。少女の眸は絶えず空際の幻華に醉ふ時、青年の眉は常に地に這ふて呻吟す。田園より都會に、街頭より深窓に、深窓より閨房に、兵營牢獄讀者と共に人生の機微を窺ひ見んとす。

長編小說

妹思ひ

德田秋聲作

●四六大判四百數十頁・箱入上製頗美裝

價 二圓卅錢 送料十五錢

しんみりとしたる著者の靈筆は本篇に於て眞に特殊の輝きを見る妹の幸福の爲めに戀を捨て死をも辭せじとする弱き美はしき心の藤野子と、常に勝者たらんとして强き自我に苦しむ艷麗花の如き妹美代子、宿命的に沈溺せんとして目醒めし可憐なる咲子、これ等の女性を中心に、離るべからざる生と愛との現代的種々相を描いて微に入り細を穿つ。一讀人情美に泣き再讀人間苦に泣く。結構の巧、雕琢の妙、文壇者宿の大作たるに背かず。

第十八版

尼港事變國辱記

溝口白羊編著

定價二圓八十錢 送料十八錢

附錄 尼港事件の眞相と策戰 尼港慘狀踏査記

尼港派遣參謀大尉 和田盈述

大毎尼港特派員 名村寅雄述

卷頭の地圖及寫眞版は千秋の恨を留めたる獄壁の遺書を始めとして慘狀實況寫眞總て六十餘頁何れも陸軍省、參謀本部寫眞班撮影に係る國辱記念として永久保存子孫に傳ふべきの書。血あり涙ある者は讀め！

三版出來

血笑記

富本憲吉裝

定價一圓八十錢 送料十五錢

法學博士 吉野作造氏序・沖野岩三郎氏跋・法學士 松本眞一著

著者が志を抱いて鄕關を出でゝから十有餘年、人並ならぬ苦學を續け然も立派に本年帝大を卒業した。本書は實に著者が十有餘年間の苦學の奮鬪史であり小說よりも奇しき運命の叙述である、新しき立志傳として大方の青年の必讀すべき書なり。

日本評論社刊行圖書

茅原華山氏著 ■ 國民的悲劇の發生　定價金貳圓　送料金十八錢

小倉徂峯氏著 ■ 三益主義　定價金六十五錢　送料金四錢

秋田雨雀 仲木貞一氏著 ■ 戀の哀史 須磨子の一生　定價金一圓四十錢　送料金十錢

安成二郎氏著 ■ 戀の繪卷　定價金一圓五十錢　送料金十錢

室伏高信氏著 ■ デモクラシー講話　定價金一圓三十錢　送料金八錢

森律子孃著 ■ 妾の自白　定價金一圓五十錢　送料金十錢

山川菊榮氏著 ■ 婦人の勝利　定價金一圓三十錢　送料金八錢

茅原華山 小田政賀氏著 ■ 現代文章講話　定價金一圓三十錢　送料金八錢

日本評論社刊行圖書

金子洋文氏著 ■ 勞働美談 力の勝利　定價金七十五錢　送料金四錢

木下幹氏著 ■ 婦人も働け　定價金七十五錢　送料金四錢

青山洪平氏著 ■ 株は此の呼吸で行け　定價金參圓　送料金十八錢

植田好太郎氏編 ■ 勞働問題講話　定價金一圓五十錢　送料金十三錢

多惠春光氏著 ■ 新しい婦人の手紙　定價金一圓　送料金十錢

豐田敎嘉氏著 ■ 人間萬事 日蓮主義で行け　定價金一圓三十錢　送料金十二錢

ビー！ムッシオ著 時國理一譯 ■ 現代 產業心理學講話　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

渡邊貴知郎氏著 ■ 雄辯第一　定價金一圓二十錢　送料金十二錢

日本評論社刊行圖書

石田傳吉氏著	■農村改造講話	定價金一圓五十錢 送料金十二錢
米國二大學教授著 板橋卓一譯	■利益分配の理論と實際	定價金一圓八十錢 送料金十三錢
パスカル・ラーキン著 中目尚義譯	■マルクス派社會主義	定價金一圓五十錢 送料金十三錢
アトキンソン著 松本悟朗譯	■合理的賃銀制度	定價金一圓四十錢 送料金十二錢
米國トムソン著 時國理一譯	■科學的經學法の理論と實際	定價金一圓八十錢 送料金十三錢
横田英夫著	■農村改造か農村革命か	定價金一圓六十錢 送料金十三錢
ガリカン著 相葉久江譯	■結婚心理學	定價金一圓二十錢 送料金十三錢
田川大吉郎氏著	■改造途上の歐米社會見物	定價金二圓 送料金十五錢

日本評論社刊行圖書

ラッセル著 松本悟朗譯	■社會改造の原理	定價金一圓五十錢 送料金十三錢
ラッセル著 松本悟朗譯	■自由への道	定價金一圓五十錢 送料金十三錢
ラッセル著 松本悟朗譯	■政治の理想	定價金一圓五十錢 送料金十三錢
岩野泡鳴氏著	■燃える襦袢	定價金一圓七十錢 送料金十三錢
ガント原著 麓三郎譯	■ガント式工場管理法	定價金二圓五十錢 送料金十五錢
來栖健助氏著	■證券市場改造論	定價金三圓 送料金十八錢
カアペンター著 時國理一譯	■農業と社會主義	定價金一圓四十錢 送料金十三錢
伊藤正德氏著	■改造の戰ひ	定價金二圓二十錢 送料金十五錢

日本評論社刊行圖書

■社會改造の諸問題　佐野袈裟美氏著　定價金二圓　送料金十八錢

■勞働改造の原理　エレン、マロー著　丸山茂樹譯　定價金一圓六十錢　送料金十三錢

■民族性の研究　納武津氏著　定價金二圓　送料金十五錢

■新文化への道　野村隈畔氏著　定價金二圓　送料金十五錢

■工場委員制度　ストッダード著　板橋卓一譯　定價金二圓　送料金十五錢

■農民の聲を聞け　横田英夫氏著　定價金一圓六十錢　送料金十二錢

■露西亞革命實記　トロツキー著　茅原退二郎譯　定價金一圓六十錢　送料金十二錢

■日蓮遺文　新修養の道　井上惠宏師著　定價金一圓八十錢　送料金十五錢

日本評論社刊行圖書

■國家社會主義の本質とその運用　タマス・ヒユーズ著　高橋正熊譯　定價金一圓七十錢　送料金十三錢

■米國よりの脚本集　佐藤健氏著　定價金二圓　送料金十八錢

■未知の國へ　野村隈畔氏著　定價金一圓三十錢　送料金十三錢

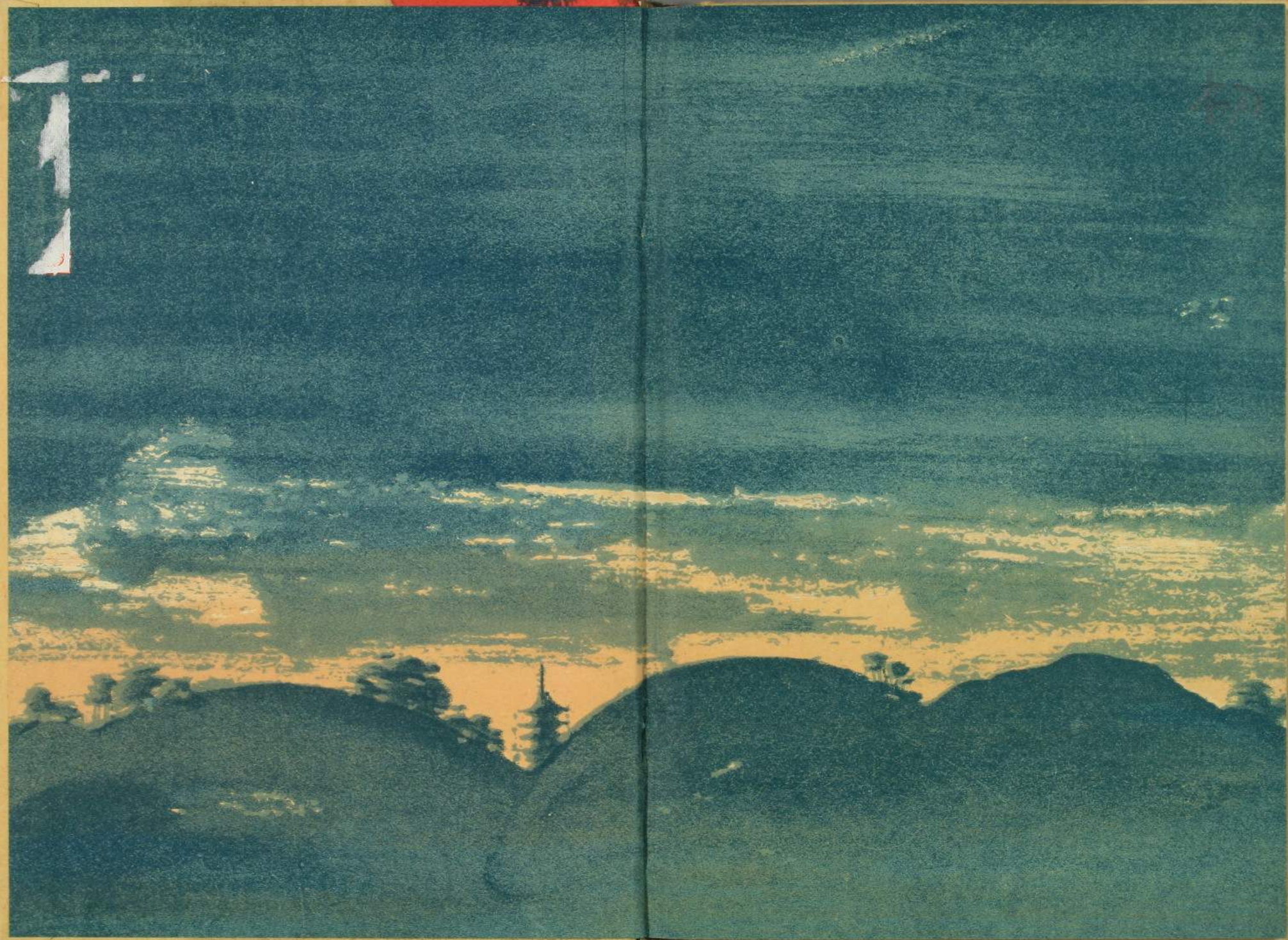
■長編小說　情か無情か　岩野泡鳴氏著　定價金一圓七十錢　送料金十五錢

■過激主義の心理　スバルゴー著　淺野護譯　定價金一圓五十錢　送料金十三錢

■正義と鬪爭　ラツセル著　時國理一譯　定價金一圓五十錢　送料金十三錢

■勞働詩集　どん底で歌ふ　根岸正吉　伊藤公敬氏著　定價金一圓　送料金八錢

■人間篇　唯一者と其所有　スティルネル著　辻潤譯　定價金二圓　送料金十三錢

日本評論社刊行圖書

ゲラヴニック著 高橋正熊譯	■革命の悲哀	定價金一圓六十錢	送料金十二錢
マツケンヂー著 納武津譯	■社會哲學原論	定價金三圓	送料金十八錢
グリフイス著 森下岩太郎譯	■警察と犯罪の秘密	定價金一圓八十錢	送料金十五錢
岩橋信二郎氏編	■世界思潮叢書	定價金一圓三十錢	送料金十三錢
眞山青果氏著	■長編小說照る日の虹	定價金二圓三十錢	送料金十五錢
モリスヒルクイツト著 高橋正熊譯	■社會主義大系	定價金二圓五十錢	送料金十五錢
相葉久江氏著譯	■森林ロマンス	定價金一圓四十錢	送料金十三錢
德田秋聲氏著	■長編小說妹思ひ	定價金二圓三十錢	送料金十八錢